
ルークの新しい世界で

uyr yama

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルークの新しい世界で

【Nコード】

N1884N

【作者名】

u y r y a m a

【あらすじ】

レプリカルークは、レムの塔での障気中和で消滅してしまふ。

生きる事に絶望をした少年は、音素に戻る中、ネギま！世界へと転移する。

そこで得る仲間や恋人達との間に出来る絆。

そして、本当の17歳になったルークの悩ましく、ちょっとエッチな青春w物語。

ヒロインは、アスナ、のどか、愛衣の3人を中心に、サブヒロインが数名です。

ネギアンチでも、魔法使いアンチでもありません。
現在第2部開始、原作本編軸に突入中。

プロローグ（前書き）

レムの塔での障気中和で消滅したルーク。
彼のネギま！世界での優しい物語。

プロローグ

死にたくない……

正直な話、そんな感情よりも楽になれるのだと言う気持ちの方が先にいった。

どの道、死にたくないなんて喚いても、この世界を支配する2つの国のトップを前にして言える訳もないのだし。

仲間達の悲痛な叫びも、心の隙間からヒューヒューと抜けていくだけだ。

だから彼は儚げに微笑むと、コクリと小さく、だけでもハッキリと頷き返す。

「俺が、一万人のレプリカを道連れに障気を中和します」

言葉を発した瞬間、空気が重くなる場とは裏腹に、ルークの心は軽くなった。

踵を返し、重くなった会議室から無言で出ると、障気に覆われた空を見上げた。

何の為に生まれてきたのか分からなかった。

偽者の命として、何の為に……

でも、ようやく分かった気がするのだ。

この時の為に、俺は存在を許された。

『お前は意味がなければ生きられないのか』

今ならハッキリと頷く事が出来ると、ルークは思う。

意味がなくても生きられるのは、きっとオリジナルだけだ。

劣化した偽者は、意味がなくては生きていけない。生きる事を許されない。

このオリジナルの世界から、弾き出されるだけ。

いや、それともそれは、俺だけなのかな……？

苦く、苦く……笑った。

空が青を取り戻した時、そこにはもうルークの姿はなかった。

ヒラヒラ舞う彼が着ていた上質の布で出来た服と、まるで墓標のよう刺さった一本の剣を残し。

みゆうー……

悲しげに泣く小さな魔物。

みゆうー

みゆうー

彼が聞いたら間違いなくウゼー！っと言う泣き声で、いつまでもいつまでも……

そして、小さな魔物は、自分の森へと帰った。

彼の仲間達が引き止めるのも聞かず。

青い空を見る度に、小さな魔物は泣き続けるのだろう。

自分を置いて逝ってしまった、たった一人のご主人さまを想って。

平和になった世界。

マルクト帝国のエンゲープの村では、晴れた日になると聞こえてくる。

チーグルの森と呼ばれる森の奥から、みゅうー、みゅうーと悲しげな泣き声が、聞こえてくるのだ。

「お、おい、姫子ちゃん。それ……」

「拾った」

どこか表情の死んでいる少女が、一人の少年を抱えていた。

自分よりも年が上だろう少年を、大事そうに、宝物を抱きしめる

みたいに。

なぜだか素っ裸の7〜8才と思われる少年。

気を失っているのか、それともただ眠っているだけなのか？

大人しく少女の腕の中。

どちらにしても、裸で放置されていただろう少年。

尋常ではない。

でも、表情一つ動かさない少女が、小さく、本当に小さくだけでも、頬を緩めている。

どうしてと思わないでもない。

だが、それ以上に少女が笑ったコトが嬉しくて。

「そっか……」

サウンド・マスターと呼ばれる男は、嬉しそうに少女の頭を撫でるのだ。

そして少女ごと少年を抱きかかえると、2人が笑って過ごせるだろう場所を目指して足を進めた。

紅き翼の仲間達と共に、旧世界は日本、麻帆良と呼ばれる土地に。

「あ、そっぴやエヴァのコト忘れてたぜ。怒ってるよなー、見つかる前にトンズラこくか……」

自分には何もないと思っている少年と、同じく何もないと思っている少女。

2人の出会いが世界を歪ませ、新しい物語を紡ぎだす。

「ちよつとルーク！ キチンと片付けなさいよ……！」

「うっせーなー。わーってるって。コレ読んだら片付けるって……」

「……」

ルーク・フォン・ファブレと神楽坂明日菜の物語が、始まるのだ。

プロローグ（後書き）

初投稿です。

忌憚ない感想、ご意見、お待ちしております。

第1話 ルーク、中学時代の最後で

麻帆良学園都市の外れに、小さな家がある。

学生寮ではなく、かと言って教員専用貸家でもない。

そんな場所に住む、中学3年生の少年と、小学6年生の少女。

少年の名はルーク・フォン・ファブレ。

少女の名は神楽坂明日菜。

兄妹どころか、血のつながりさえも一切ない二人は、周囲の優しい大人達に見守られながらゆったりとした時を過ごしている。

それは、道具にしか過ぎなかった少年と少女にとって、よつやく得られた優しい時間。

いつの日か、再び戦いに身を投じる日まで、ゆっくりと心と身体を休める大切な時……

「ルークく、そろそろお風呂入るわよ」

「あー、そろそろ一人づつ入ろうぜ？ アスナも小6なんだしよ……」

そう言った瞬間、くしゃりと顔を歪ませる少女。

ぎゅっと上着の裾を握り締め、下唇を噛み締める。

目には一杯の涙、ウルウルとした視線で睨みつける。

アスナの無言の抗議に、ルークは「うッ……！」と唸りながら、半歩よろめくように後ずさった。

だけでもだ、ルークとて容易くアスナに同意する訳にはいかない。

ルークも思春期の健康的な男の子なのだ！

例え小学生とは言え、女の子と一緒にのお風呂はいい加減勘弁願いたい。

それに小学生だったって、もう小6だ。
中学生と体型は殆ど変わらん。

胸は女の形に膨らみ始め、ちょうど手に納まるくらい。
股間の土手は……残念なことにアスナは完全無毛だけど。

ともかく、健康的な男であるルークは、アスナの未成熟な肢体にドキドキなのである。

正直な話、そろそろ我慢ができない。

何かの切欠があれば、押し倒すこと間違いなし！ である。

「いや、だからな……？」

「うー！」

「その、な……？」

「うー！うー！」

「ほ、ほら！ タカミチが言ってたろ？ そろそろ女の子としての嗜みがっ」

「……いや、なの？ 私のこと、嫌いになっちゃった？」

ウルウルとしていた瞳から、ポロリと涙が一滴。
頬を伝い顎を通って床にポタリと黒い染みを作った。

ポタ、ポタ、ポタポタ……

涙の雫が川になり、そして滝のように変わる寸前、

「だ　　ッ！　わかった！　分かったからもう泣くな！！」

頭をガシガシ掻きながら、ルークは諦めきった僧侶のような
諦観とした表情。

そして、すぐに涙を止めて笑顔になったアスナに呆然。

えっ？　嘘泣き……？　何ソレ、怖い……

呆然とするルークの耳に何故だか聞こえる、遠い遠い昔、かつて
の仲間の一人の声。

ルーク！　女の子の涙を信じたらダメじゃん！

そんなんじやスグに喰われちゃうよ？　もう、ホントぼっちゃん
なんだから。

でっかい不気味な人形を連れた少女が、とてもありがたい忠告を
してくれた気がする。

色即是空 空即是色……

湯船に浸かりながら、ルークは何度も唱える。

自らの中の煩惱を追い出さんがために。

今ルークの目の前には、アスナの濡れた頭がある。

長いキレイな髪が湯船を漂い、ルークの胸に張り付いていた。

鼻をくすぐるようなシャンプーの好い匂いが、アスナから漂ってくる。

何よりやばいのが、膝に感じる柔らかい尻肉の感触。

ちよつとも気を抜けば、股間がパオーンとおつきしてしまいそう。

だから唱えるのだ。自らの中の欲望に勝つ為に！

色即是空 空即是色と……

なのに、なんでだ！ どうしてだ！！

「ねえルーク。お尻になんか硬いの当たってるわよ？ アンタ、もしかして……」

顎を上げ、下から見上げるようにして見るアスナの瞳は、ルークには軽蔑の色が混じっているように見えた。

勿論そんな事はない。アスナは遊んでいるだけだ。

だけでも、思春期真っ只中のルークにはそうは見えず、何よりたった一人の家族に対し、こうやって淫心を持ってしまっ自分を恥じ、

「き……気の、せいだ……」

だらだら脂汗を流しながら、必死に誤魔化そうとする。アスナは、そんなルークを愛おしいと想ってる。

彼の瞳は、自分と同じ全てを諦めた色のない瞳だった。

初めて会った日に、彼が最初に口にした言葉……

『なんで生きてんだ、オレ……』

そう言った彼の顔は、絶望しかなかった。

あれから10年。

ルークと言う半身をみつけたアスナは、人として大きく成長した。

もちろん、女としてもだ。

「そう？そうかもね。だったら、きちんと100数えるわよ」

い〜ち、に〜い、さ〜ん、し〜い、じ〜お……

麻帆良に来て、2人きりで生活するようになってからは、いつもこうして一緒だ。

一緒に遊んで、一緒にご飯を食べて、一緒にお風呂に入って、一緒に寝る。

延々とその繰り返し。

だけでも、そろそろソレに変化が加わってもいい頃だ。

アスナの仲間である仮名クウネル・サンダースの助言通り、最近はどうやってルークを追い詰めていた。

もう、ただの家族では我慢が出来ない。

ただでさえルークはモデルのだ。

赤い髪に、整った顔。卓絶した運動能力にさりげない気遣い。乱暴な口調とは裏腹に、彼がとても優しい性格なのだと思いついてしまえば、目の有る女の子ならば恋に落ちて当然だとアスナは思う。実際、表の一般生徒にも、裏の魔法生徒にも、どちらにもファンクラブが出来るほど人気があるし。

特に裏では『旋律のルーク』なんて中二臭い二つ名まである。

世にも珍しい『魔力』を用いて戦う『剣士』
剣に込められた魔力が、まるで詠うように旋律を奏でるコトから付けられた名前だ。

ルークはコレを聞く度に、オリジナルを思い出して嫌だな……なんて言うけど、満更ではないことをアスナは知っている。

それはともかくとして、モテモテなのだ！

表の生徒からは恋人になってくれと迫られ、裏の生徒からは剣士と言う特性からなのか、『魔法使いの従者』に成って欲しいと迫られる。

このまま放って置いたら、もしかしたら誰かと恋人となってしまう。

誰かの従者になってしまう。

そんなのイヤ！

そうになったら、私はまた一人になっちゃう……
だから、そうなる前に、私が恋人になろう。

これが今のアスナのルークへの想いの原点。

ルークがこっそりトイレなんかでスッキリしなきゃならんかった理由。

もしもルークが知れば、暴れる事間違いないし。

はちじゅはぐち、はちじゅきゅぐち、きゅぐじゅぐ……

でも、ルークの視線はアスナの2つの双丘に釘付け。

湯船に浮かぶ淡い膨らみがとても扇情的で、ルークの股間を熱くする。

アスナの数字を数える声すら色気を感じ、もう辛抱がタマラン！
だけでも、ルークとてこの程度の欲望に負けるわけにはいかない。

万が一にでも手を出してしまったら、アスナの保護者を自認する
タカミチにボコられる！

アスナと自分を守って死んでしまったガトウが化けて出る！！

ルークはアスナのおばーいを網膜に焼きつけつつ、100まで耐え切ると、ザバアッと勢い湯船から飛び出し脱衣場へと逃げた。

急いで濡れた身体を拭き、そのままトイレへと駆け込んで……

アスナが風呂上りの牛乳に舌鼓を打っている頃、げっそりやつれたルークがトイレから出てきた。

この日、ルークは決意した。

アスナが中学生になったら、女子寮へと押し込もうと……

第1話 ルーク、中学時代の最後で（後書き）

音素⇨魔力

超振動⇨王家の魔力

こう思って読んで下さい。

第2話 ルーク、高2の春で

旋律のルーク。

世にも珍しい魔力を用いて戦う剣士。

剣士を始めとする前衛型の者達は、『気』による肉体強化や攻撃が一般である。

だけでも彼は違った。

独特の剣術もさる事ながら、魔法と一体化になったその技の数々は目を見張る物だ。

炎を、氷を、雷を、光を、それぞれ刀身に纏わせながら振るう剣の威力は圧巻に過ぎる。

何より彼から発せられる魔力は、静かな旋律を持って詠うのだ。

話を聞いただけの者達は、鼻で笑って否定する。

そんな筈はない。

魔力が詠うなどありえない。

だったら、今聞こえる旋律はなんだ……？

「雷神剣ッ！！」

鋭く剣を振り下ろすと同時に、雷の洗礼を浴びせる。

例えば神鳴流の雷鳴剣などと比べると、一段も二段も威力は低いその技。

だが、単体殺傷力でいえば決して見劣るモノではない。

その技を、殆どノーモーションで繰り出したルークは、自らが斬り、雷で焼き尽くした式神を見下ろしていた。

そんな彼の周囲を漂うようにして光り輝く魔力の光が、まるで蛍のように明滅しながら何かの歌を奏でている。

少女は、ルークの奏でる旋律に、魅せられる……

その日の訓練が終わり、ルークは自分のクラスの担任の先生でもある葛葉刀子に訓練内容の採点をして貰っていた。

旋律などと言う大層な二つ名持ちではあるが、ルーク自身はそれほど自分が強いとは思っていない。

例えば元の世界で敵対した自らの師、ヴァン・グランツの足元にも及びはしないだろう。

他にも六神将と呼ばれるヴァンの部下達にも、一対一では互角かそれ以下。

経験豊富なジェイドや、後方支援が達者であるティアがいなければ、あの贖罪の旅も序盤で死んで終わっていたのだ。

だからだろう、他の流派の剣の使い手である刀子の指摘に一言頷いて見せるのは。

頭を低くし、教えを乞う態度を決して崩さない。

普段のルークの乱暴な口調も、この時だけは鳴りを潜め神妙である。

思い返せば、ルークはヴァンにも常に敬語であったのだから、何かを教えてくれる人には頭を低くしていたのだ。元々。

彼の昔の仲間は、それに気づかなかつたけれど。

「と、まあ、色々言いましたが、もう特に注意しなければいけない点はありません。頑張りましたね、ファブレ君」

「ありがとうございます、刀子先生」

「アナタのその不思議な剣技……基礎がしっかりと出来てる所為かしら？ とても上達が速く、実にキレイです。本当に良い師に恵

まれたのですね」

ルークは大きく目を見開いた。

彼に剣を教えたと言えば、それはヴァン・グランツである。

彼を作り、騙し、見下し、そして捨てた人……

ルークに最大の絶望を与え、最強の敵だった男だ。

どれ程の憎悪をむけても可笑しくはない相手……

でも、ルークは彼を嫌えない、憎悪出来ない。

誰も『ルーク』を見ようとしらない中で、ただ一人、『ルーク』を見てくれた人。

今ではそれが偽りだったのだと知っている。

だけでも、それでも、ルークは彼を尊敬し、慕う心を止められない。

ヴァンに基礎をしっかりと叩き込まれたからこそ、ルークは自力でアルバート流剣術の奥義に手をかけるコトが出来たのだから。

「ええ、ヴァン師匠は厳しい人だったけど、とても、そう、とても……」

ルークは言葉を最後まで言わずに飲み込んだ。

複雑な感情全てを消化しきれていない今、それは口に出来ない。

でも、刀子の言葉はとても嬉しかった。
もう記憶の中にしか居ないヴァンを、師匠として誇れるのだと。

だからルークは笑った。

眉尻を下げ、子供みたいに、ニツと。

「ファブレ君がそこまで慕う人、一度手合わせ願いたいですね」

「直接戦ったらサウザンド・マスターにだって負けやしませんよ、あの人は……」

「フフフ……そこまでの相手ならば、余計に血が滾りますね。年は？収入は？恋人か、それとも奥様はおられるのですか？」

「へ……？」

刀子の問いに、ルークは目が点なった。

あれ？この人なに言ってるの？ である。

そんなルークの様子に気づいたのだろう。

刀子は「ゴホンツ」と咳払いをすると、顔を真っ赤にしながら、

「今のは聞かなかったことになさい。いいですね……？」

それはもう、恐ろしい顔でルークを脅した。

ルークも刀子の剣呑な様子に怖気づき、コクコクと何度も首を縦

に振る。

2人の間に流れる気不味い空気。

ルークも、刀子も、2人とも目をキョロキョロ忙しく動す。

どうすればいいのか分からない。

ルークはまだまだこの手の経験が足りず、刀子は自分の失言を恥じて。

だが、そんな空気をぶち壊す爆弾が、ルークに落ちた。

「あ、あのっ、ファブレ先輩！」

恥かしそうにモジモジしながら、必死な瞳をルークに向ける少女。

アスナみたいに髪を両端に結わえる……言わばツインテール。

ただ、ちよつとばかりアスナよりは短いか？

大人しげで、どちらかと言えば性格は内向きに見える。

今年、アスナと同じ麻帆中に入學したピカピカの中学一年生。

おろし立ての制服が良く似合ってる可愛い子である。

ルークは助かったとばかりに少女の方に身体を向けると、

「どうした？」

務めて優しく笑って答えた。

ティアやナタリア、何よりガイの教育の成果である。

「あ、あああああなのっ」

緊張して身体が小刻みに震え、呂律が回らない。

ルークは、またか……、と少女に見られぬ様に顔を顰めた。

最近、良くあるのだ。

この後のセリフも大体分かる。

好きです、魔法使いの従者になって下さい、だ。

知らないヤツに好きだと言われても困るし、誰かの従者になんぞなるつもりはない。

恋人になんかなねーし、従者になる気もまったくねー！ そうはっきり答えるつもりだった。

「わ、私を……ファブレ先輩の従者にして下さいっ！！」

「……え？」

虚を突かれた。

ルークは剣士である。例え魔力を用いようとも、前衛でガンガン前に出て戦う戦士だ。

魔法使いの従者と言えば、魔法を使う間の時間稼ぎや、主である魔法使いの盾となること。ルークはそう認識している。

かつては自分もそうやってティアやジェイド、ナタリアなんかを

守っていたのだし、自然とそう思い込んでいたのだ。

最近の魔法使いの間では、恋人みたいなモンだと言う事も、当然知らない。

「ダメ……でしょうか……」

しゅん、と落ち込む少女。

ちよつと可哀想かな？ と思うが、やっぱりルークは断るつもりだ。

従者になるつもりは無いが、前衛である自分に従者はいらん。

虚を突かれた所為で、断るタイミングを今一外してしまったが、気持ちは変わらない。

だが、

「いいのではないですか？」

刀子の発言に、言い出すタイミングを再び外してしまった。

しかもだ、

「ダメー！ ダメダメダメダメダメ

ッ！！ル

ークの従者になって良いのは私だけよっ！」

どこからともなく現れたアスナが、必死な様相で反対する。
勢い少女の胸倉を掴み、持ち上げようとするが、その寸前、刀子
がアスナを抑え、

「でしたら神楽坂さんも従者になればいいでしょう。ファブレ君
の魔力量なら容易いですしね」

こんな簡単なことで面倒かけるなど言わんばかりの口調だ。
この後、アスナが暴れたり、ルークが暴れたり、少女が泣き出し
たりとか色々あったが、結局……

「あー、そういやまだ名前聞いてねーんだが」

「佐倉愛衣です。メイって呼んでください、お兄様！」

仮契約は学園長の陰謀でキスになり、ファーストキスをアスナ、
セカンドキスをメイにそれぞれ奪われ。

この日よりルークは、2つのツインテールに挟まれながら、思春
期のモヤモヤと戦うことになる。

時に、ルーク高校2年生の春。

休みのたびに、家に押しかけてくる女が一人増えた瞬間である。

「んじゃ、今日から私のことはお姉さまって呼ぶのよ？」

「はい、アスナ先輩」

「アンタ、いい度胸してるわね……」

第2話 ルーク、高2の春で（後書き）

次回はちょっと遅れます。

別なの2つ書いた後になるんで。

第3話 ルーク、高2の夏で

時折、パラツと本のページをめくる音だけが聞こえる、ゆったりとした優しい時間。

ルークは図書館島の地下2階にある休憩所で、こうして本を読む時間がとても好きだ。

昔の、例えばオールドラントにいた頃の彼からは想像できない様子である。

事実、最初にここに来た理由は、ただの部活動だったし。

図書館島探検部。その探検の部分が目当てでルークは入部したのだから。

そして一年かけてこの図書館島を制覇した時、彼は一冊の本を手にとって持っていた。

何故かこの最深部で食っちゃねしてたアルビレオから渡された一冊の本。

「ルーク、アナタに必要なのは知識を得ようとする態度です。もう、あの世界での最期みたいなハメにはなりたくないでしょう?」

食っちゃねしてるニートに言われたくねーよ!とルークは思ったけれど。

ティアやジエイドの嘲り見下す視線を思い出す。

アニスとナタリアの呆れた顔が目蓋の裏に写し出された。

親友だ、親代わりだと言ったガイの、ルークだからしょうがないと溜息吐く姿が見える

こんなヤツに自分の全てが奪われたのか、と罵倒するアッシュの声が聞こえた気がした。

だから、ルークは頷いた。

この日まで、ルークの成績はお世辞にも良いとは言えなかった。最下位争いをしてる程悪くはない。

でも、下辺を低空飛行している事は事実であり、それがこの日之境に、平均かそれよりちょっとだけ上まで持ち直した。

最低限だけでも勉強をし、少しづつだけでも本を読み、そして……

今に至る。

この世界の日本という国は、ルークにとってつまらない場所だ。

思うがまま剣を振るうことも、冒険する場所もない世界。

だから図書館島探検部なんてモノに入っただし、規則を破って最深处を目指し、攻略していく過程は楽しかった。

それが終わった今、アルビレオに言われた本を読むという行為だけがルークの無聊を慰め、そして新しい趣味となったのだ。

それに何より、アスナとメイは此処には滅多に来ない。

最近のあの子達は、ルークが引くほど積極的にボディーランゲージをしてくる。

思春期のルークにはそれがたまらない。
だから尚更ここでこうして本を読んでいる時間が好きなのだ。

ペラリ、ペラリとルークが本のページを捲っていると、ルークの隣に座る後輩の子が、おずおずと声を掛けてきた。

後輩の子は、ここで良くこうしてルークと一緒に静かな時間を過ごす相手である。

「あ、あのー、ルーク先輩……」

「ん？ どうかしたのか？」

「軽くつまめる物を持ってきたんですー。どうですかー？」

「おっ、サンキユ。わりーな」

ルークは一言お礼を言うと、後輩の娘が持ってきたクツキーを口に放り込む。

サクサク、サクサク……

小気味よい食いっぷりのルークに、嬉しそうに目を細める後輩の少女、宮崎のどか。

彼女は両手で頬をくるむように頬杖をついて、うつとりする。
トクン、トクンと鳴る鼓動がとても心地好い。

のどかは、ルークが好きだ。

乱暴な口調で喋る部活の先輩。

男嫌いの気があったのどかにとって、最初は少し苦手な相手だった。

いや、むしろ嫌いだったかもしれない。

乱暴で、口が悪く、いい加減。

本が好きな人に悪い人はいない。

のどかが良く口にする言葉だが、のどかは当初、ルークは例外だ
と思っていた節がある。

部活の先輩であり、図書館島を探検する時の世話役で案内役でも
あったけど、のどかはルークが怖くて怖くて……

「ちっ、メンドクせー」「だりー」「うぜー」

何かを頼むたび、こんな風に言われればそれも仕方ない。

でも、さり気ない優しさにふと気づく。

部活を始めたばかりの頃は、体力がなくて皆から遅れてしまうの
どか。

そんな彼女を気遣い、ゆっくりとしたペースで歩くルーク。
それでも息を切らせ始めたら、何も言わずに休憩を取ってくれる。
のどかは、やっぱり本が好きな人に悪い人はいなかった！と喜ん
だ。

それからゆっくりと、少しづつ……
のどかの心に芽吹いた若葉が、やがて木になり大樹となる。

「……どか？ おい、のどか！大丈夫かお前？」

肩を揺すぶられる。

のどかはハッと気づくと、真っ赤になった。
なんせ、心配そうにするルークの顔が至近にあったのだ。
恋する乙女として当然の反応である。

「うっ、ごめんなさい……」

「いや、それより大丈夫なのか？ 具合がわりーんだったら今すぐ帰った方がいいぞ。寮まで送ってどうか？」

「い、いえー、大丈夫です」

「そうかあ？」

ルークは、疑わしげにのどかを見ている。

彼にとって大切な後輩だからだ。

そんなルークの視線に、のどかは緊張を隠せない。

吐息が肌を感じるほどルークの顔がのどかの顔に近づき、コッソ
とオデコがぶつかった。

「ツツツ?!?!?!?!?!?!」

のどかは混乱した。

ビックリにも程がある。

だから顔に全身の熱が集まったみたいになった。

「ん、ちょっと熱いか……」

なんて言ってるルークの声も耳に入らず、のどかは恋人同士みた
い……なんて考えが頭から離れず。

混乱からか、夢と現実の区別がつかなくなってしまい、思わず……

ちゅっ

唇をルークの唇に軽くぶつけ、

「好きです、ルーク先輩」

そう言って、もう一度、キス。

今度は唇の湿りが分かるほど、きっちり重ね、そして離れた。

「好きです、ルーク先輩……」

もう一度、告白する。

脳の芯が痺れる様な甘い吐息を感じながら。

もっと彼を感じたい。もっと、もっと、もっと……

そして、我に返った。

のどかの目の前には、首まで真っ赤にしたルークがいた。

「い……」

のどかはボソッと何事かを口にすると、顔を俯かせる。

そして数秒後、「いや

っ!!」と大声を出して

逃げた。

しばらく呆然としたルークは、腰を抜かしたみたく椅子に深く座り込み、天井を仰ぎ見る。

告白された事自体は初めてではない。

何度もされているし、その全てを断り続けてきた。

自分のコトを何も知らない人と付き合うなんて考えられない。

アスナやメイが居ることもある。

それに、絶対に誰かを恋人として選ばなければならないと言われるれば、ルークは迷い無くアスナを選ぶ。

だけでも、ルークは分かっていた。

アスナと結ばれても、ルークも、そしてアスナも決して幸せにはなれない。

ルークとアスナは、同病相憐れむ関係だからだ。

2人、互いの傷を舐めあう関係なんて、長くは続かない。

きっと、今の家族と言う、どこか一線を引いた関係が一番なのだと分かっていた。

とは言っても、アスナと結ばれるつもりはないが、そのアスナを置いてメイと付き合うつもりもない。

当然のどかとも……

彼女は大切な後輩で、柔らかく控えめな性格がとても好みだけど。彼女と一緒に読書をしながら飲むお茶の時間が、とてもとても大好きだったけど。

ルークは重い息を肺から吐き出す。

そんな時だ、ダダダダ！と勢い良く床を蹴る音が聞こえたのは。

「ルークツ！ アンタなに浮気してんのよっ！！ 全部、本屋ちゃんから聞いたんだからね！ 言い逃れは、許さんツ！！」

「お兄様！ 私も仮契約と関係ないキスがしたいです！」

「ちよつとー！ アンタ何言つてのよー！！」

「アスナ先輩は羨ましくはないんですか！？ 私はすごく羨ましいんです！ だから黙ってて下さい！」

「はん！ たかがキスくらいで何いつてんの？ 私なんかルークの半立ちピー（放送禁止用語）をお尻の谷間に挟んだことがあるわよ？」

「ちよつ！？ なに言つてんだっ、オマエはー！！」

「なに言つてんだって、ナニ？」

「ナニですよね？」

「ねー」つと2人仲良く楽しそうに笑い合うアスナとメイ。

当初の目的なんて何処へやら。

そのまま何時もの定位置……ルークの左肩にしな垂れるアスナ。
ルークの右肩にしな垂れるメイ。

両肘に当る、大きさの違う柔らかい脂肪の塊にドキマギしながら、
2人に引き摺られて来たのだらうのどかに笑い掛けた。

もう少し、もう少しだけこの関係で続けたい。

ドタバタとした喧騒が絶えぬこの関係を。

ルークはアスナは勿論、メイも、のどかも好きだから。

あと、本当に、ちょっとだけだから……

いつもは静かな筈の図書館島の休憩所を、一人の少年と、3人の
少女の楽しいげな声が響く。

いつか終わると知ってはいても、何時までも続けとルークは思っ
た。

なーんて格好つけてたルークだったのだが……

今日は金曜日、明日は土曜日で学校はお休み。

外出届けを出したアスナとメイ。それにアスナに促されてルークの家までついて来たのどか。

「アンタさ、私と恋人になったら傷の舐め合いがどうとかツマンナイ事考えてるでしょ？」

「へっ?」

「色々あるけど、私は幸せだよ? それでもダメだって言うならさ、傷の舐め合いにならないように、メイと本屋ちゃんにも見ていて貰おう?」

ルーク、本屋ちゃんのコト好きなんでしょ? 私の次くらいにね」

「なんでソコに私の名前が入らないんですか?」

「え、ええつとー、な、なななんの話だかわからないですー」

「メイは黙ってて! 本屋ちゃんは……まあ、その内知るわよ、たぶん」

ルークは何か言おうとして、でも何も言えなかった。

アスナが、とてもキレイに見えて。

でも、言わないといけない。

アスナは、オレの答えを待ってるのだ。

メイとのどかを巻き込んで、オレの答えを、待ってるのだ。

「アスナ」

「なによ？」

「好きだ」

「知ってるわよ」

柔らかく微笑みながら、当然とばかりにルークの唇に、ちゅ……
長く、甘い、キス。

メイが、「ズルイです、アスナさん！」と叫び、のどかは、「あ
わわわわ……」ってオロオロしだす。

そして最後にアスナは……

次の日の朝、妙に元気な3人の少女と、げっそりやつれた一人の少年。

ただひとつ言える事は、少年は抵抗しまくり、DT卒業しなかった。

第3話 ルーク、高2の夏で（後書き）

次回、ルークにとって唯一の存在。
あの子がこの世界にやって来る！

そんで、ようやく説明的な前章部分が終了です。

第4話 ルーク、高2の秋で

憎々しいまでに晴れ渡った空。

魔物は自分が行く事が出来ない遠い空の彼方、音符帯の向こうを憧憬の思いで仰ぎ見ていた。

あれから、どれだけの時が流れたのだろう。

魔物にとって、最早時間なんて何の意味も無いものであったけど、子供だった魔物が大人になり、老境に差し掛かるほどの時が流れたのは確かだった。

魔物は、あれからいつも一人ぼっち。

心配する同じ魔物の仲間達の声も聞かず、ずっと、ずっと空だけを見上げ続けていた。

みゆうー

みゆうー

「ご主人さまにとって、ソコは陽だまりですか？」

「寂しくはないですか？」

みゆうー

みゆみゆみゆうー

ボクは寂しいですの……

ボクもご主人さまと一緒にきたかったのですが、どうして置いて逝ってしまったんですの……？

悲しい鳴き声が森中に響き渡る。

それはいつものコト。

晴れた日には必ずと言っていい程に聞こえてくる、寂しい魔物の慟哭……

一日中鳴き続ける、魔物の、泣き声。

でも、その日は違った。

太陽が頂点に達した頃、魔物の住むチーグルの森を一人の赤毛の青年が訪れた。

青年の腕の中には小さな子供。

青年の子なのだろう。

父親と同じく、血のように燃える紅の髪の少年。

外の世界が珍しいのか、しきりに目をキョロキョロさせて落ち着きがない。

「……何かようですか？　ボクはアナ達の顔なんか見たくないですの」

「酷い言われようだな。まあ、仕方ないが……」

「分かってるなら消えて下さいですの」

「この子は、オマエの知るルークとは、違うのか……？」

「……？　何を言ってるんですの？」

青年は、魔物の不思議そうな様子に、「そうか……」と微笑した。世界を救った英雄達は、この青年の息子をルークの生まれ変わりと信じていたから。

ただ、青年は違うと感じていた。

それは青年がルークを憎んでいたからではない。

感じなかったから。自分の同位体だった存在と同じ波動を、一切感じてはいないのだ。

「父上……？」

「いや、なんでもない。お前は、ただ健やかに育てばいいんだ」

青年は、子供が出来た事で、あの時の自分たちがどれだけ醜かったのか理解した。

それは彼の仲間達にも言えるコトで、だから余計にこの子に構いたがる。

でも、それは違つと青年は思っていた。

自分が楽になる為に、この子を使っているだけじゃないかと。

そんな奴等と一緒にはなりたくない。

これ以上、彼は卑怯者にはなりたくなかったのだ。

だから彼は魔物に会いに来た。

もつともルークを大切に想っていてくれた魔物に。

キムラスカの罪、マルクトの罪、ダアトの罪、ヴァンの罪、ルークの仲間達の罪、そして、青年の罪。

あの時代のあらゆる罪を背負わされたルークを、最も大切に想っていた、たった一匹の彼の本当の仲間。

この小さな魔物に会いに来て良かったと、青年は思った。

そして、よくぞ間に合ったとも。

魔物は、もう命が短い。

早晩息絶えるのが見て分かる。

心も、身体も、ボロボロだ。

だから青年は、徐々に失われつつある彼の力で、この小さい魔物を送ってあげたいと考える。

せめて最期は、幸せな夢を見ながら、あの遠い音符帯へと……

「ミュウ、と言ったか？」

「なんですよ、アッシュさん？」

「オレが、オマエをアイツの所へ送ってやると言ったら、どうする……？」

アッシュの問いかけに、ミュウは勢い良く返事を返すと、ボロボロの老いさらばえた身体を彼に預けた。

アッシュは、ローレライを解放して以来使った事がない力、超振動を高めていく。

もう、アッシュの中から失われつつあるこの力を、手に持つ第7音素の塊、ローレライの剣の力を借りて限界を越えて絞り出す。

「もしもアイツに会えたら、謝っておいてくれ。すまなかったな、『ルーク』ってな」

「……ボクは、アナタが大嫌いなのです。ご主人さまを追い詰めて、殺したアナタ達が。」

でも、ありがとございます。ボクを、楽にしてくれて……嫌な思いをさせてしまって、ゴメンなさいですの、アッシュさん……」

「気にすんな」

「なんかその言い方、ご主人様にソックリですね」

「あんな劣化野郎に似ているなんて言われても、嬉しくもなんともないんだがな」

ミュウはルークが逝ってしまっただけ以来、初めて笑った。

そして……

「ああ……見えるのです……
ご主人さまが、楽し、そうに……して……る……です、の……待
つてて……い、ま……」

ミュウの身体が音素に分解されていく。

幸せな夢を見ながら、小さな魔物は大きく跳ねた。

ミュウ……ウイーング……!!

パタパタと耳を大きく広げ、その夢の光景に向って、飛んだ。
ソーサリーリングと、何故かローレライの剣まで巻き込んで。

きらきらきらきら……

光り輝く音素になって、そして、消えた。

アッシュは握り拳の側面を口に当てて、クスリと苦笑い。
送ってやるとは言ったが、剣まで持ってけとは言っていない!

「いいんですか、父上？ あの剣は……」

「良いんだ。あの剣は、もう必要ないからな。
コレから先のこの世界には、必要ないんだ。
さあ、帰るぞ。オマエがオマエである証明も取れた。
コレであのバカ共にデカイ面はもうさせねー」

「はいっ！」

訳知り顔で、この子に構ってくるかつての仲間達を、アッシュは心底嫌っていた。

例えこの子が、あのルークの生まれ変わりだとしても、今のこの子はオレの子だ。

貴様たちがどうこうしていい存在じゃねーんだよ！ と。

アッシュの子ども自身も、自分を見ないでルークを見る彼らに辟易していたこともある。

それも今日でお終い。

ルークを最も大切に想っていたミュウから確約を得たのだ。

例え親代わりだの親友だのと煩い隣国の貴族が来ても、コレで突っぱねてやる！

かつて鮮血のアッシュとまで呼ばれていた頃の、凄惨な笑みを浮かべ、彼は帰る。

彼が守るべき国へ、罪に塗れ、だがその罪全てをルークに押し付けたまま省みない彼の国へ。

みゆうー！

突然耳に入った懐かしい鳴き声。

「ブタザル……？」

だけでも、居ない。

居るはずがない。

ミュウは、あの世界に居るのだから。

ルークは久しぶりに思い出した小さな魔物の姿に、小さく口元を綻ばせた。

最後まで彼の味方であり続けてくれた、たった一匹の大切な相棒。

柔らかく、そして優しく頬を緩め、でも次の瞬間、それが恐怖に変わった。

「誰がブタザルなのよ……？」

ツインテールの髪が怒気によってユラユラ揺らめく。
アスナから発せられる気は、既に瘴気といっても過言ではなかった。

ルークは違うのだと叫びたかった。

お前に言ったんじゃない！誤解だ！と言いたかった。

でも、恐怖で口が上手く動かない。

「アデアット」

ボソリとアスナの口から出た言葉。

同時に彼女が手に持つカードが光輝き、大きなハリセンの形を成した。

それを大きく頭上にかかげ、次の瞬間「死・ね！」ブオンっと空気を裂いてルークの脳天に直撃するのだった。

その日の夜、いつもは健啖家なアスナは食事を抜き、寮で同室の木乃香を大層心配させたらしい。

「私はブタなんかじゃ、なーいっ!!」

んで、ルークと言えば……

気絶していたところを、修行のお誘いに来たメイに発見され……

「うお!? なんで俺目隠しされてんの!？」

「ああん。ダメですよ、お兄さま！そんな、ところに手をやったら……ひいあっ」

「えっ？ 俺どこ触ってんの！？ 目が、目が見えぬえー！ ちよっ、このぽによつてしてんの何なんだー！」

「い、いあ……そんなに強く掴んだら、痛い、ですっ。ふああ……そ、そう、優しく、お願いします……」

「えっと、こ、こっつか……？」

「ん、んあ……あ、あ、ああああ……」

夕食のお誘いに訪れたのどかが来るまで、とても妖しい介抱は続けられた……

第5話 ルーク、高2の冬の始まりで

ルークにはトラウマがある。

アナタ、こんな事も知らないの？

見下し、蔑む口調で何度も言われた。

嘲りを受け、嘲笑される。

それに何一つ反論出来ず、ただ唇を尖らせ顔をうつむかせることしか出来なかった。

『常識』を知らないが故に、バカにされたあの頃。

もう、あんな思いはしたくない。

だからルークは学校の帰り道、通りすがりの女子高生の会話に、目を大きく見開いた。

「えー、マジDT!?!」

「DTが許されるのは中学生までだよね!」

「「キャハハハハハハ」」

姦しくべちゃくりながら通り過ぎる女子高生の背中を見送りながら、
ルークはボソリと……

「えっ、マジで?!」

呆然と呟いた。

でもすぐに「いや、ねーよ」って言いながら、肌を刺すような寒風
の中、急いで家に帰った。

「うっ、ちぶちぶ……」

寒さで赤くなつた手を擦り合わせながら玄関の扉を開けると、暖かい空気と共に、ぷんつと美味しそうな匂いが漂ってくる。

この匂いはおでんかな……？

大根、ちくわぶ、きんちゃく、はんぺん。こんにゃく、卵にタケノコ、牛スジ。

ああ、なんて魅惑的なメニューだろう。こんな寒い日にはたまらない献立である。

ルークは頬をニヤケさせ、大きな声で「ただいまー」と言いながら靴を脱ぎ、廊下を早足で通り抜けリビングに入り、台所へと足を進ませる。

台所からは、アスナの楽しそうな鼻歌が聞こえてきた。

ルークはもう一度、「ただいま、アスナ」そう言うと、アスナは嬉しそうに振り返り、「おかえり、ルーク」と返事をかえす。

制服の上からエプロンをつけたアスナは、普段の勝気なトコが影に潜み、とても家庭的に見えてルークの男心をグッとさせるのだ。

「ちょっと待ってね。スグに出来るから」

なんかこのやり取り、まるで新婚夫婦みたいだな。
何気なくルークがそう思った瞬間、さっきの女子高生の言葉を思い出した。

えー、マジDT!?

DTが許されるのは中学生までだよな!

キャハハハハハハ

下腹の辺りがズドン!と重くなった気がする。

ルークは首を左右に激しく振ってさっきの女子高生の言葉を振り払うと、冷蔵庫を開けて冷たい水を一気に啣った。

チラリと横目に入るアスナの顔……

実に楽しそうに料理をしている。

アスナの笑顔がとても眩しく見えて、なんだか息苦しくさえ感じた。

「どうかした? お腹空いて我慢でもできないの?」

「い、いや、なんでもねーって。手洗ってくんぜ!」

内心のドギマギを隠し、ルークは逃げるようにして台所を後にした。はあ、はあ……息を切らせて脱衣場に面している洗面所の前に立つと、大きく息を吐く。

平常心だ、平常心。責任とれないウチはダメだ……

この世界の育ての親的存在が、麻帆良学園都市在住の教師達であるせいか、この辺ルークはとても堅い。

なにセルークときたら、アスナが色気づいてからこっち、どんだけ迫られてもキスから先へは決して進ませはせんのだ！

いや、微妙にBは余裕でしていたりするけども、最後の一線は絶対に越えたりはしない。

互いに好意を確認しあい、更には周囲から3股野郎と罵られているにしては初心すぎる。

そんなところが、アスナ達の胸をきゅんきゅんさせているんだけど。

ルークは手を洗い、続いて火照った顔を冷水で冷ますと、洗濯力ゴの中にあつたタオルを手取る。

手触りにちよつと違和感を感じたルークだったが、特に気にせず顔を覆うようにしながら、ふあんの良い香漂うタオルでゴシゴシ水気をぬぐった。

顔と手から水気が無くなり、ふう〜つと一息つくと、ルークは頬をヒクツと大きく痙攣させ硬直する。

今、自分が顔を拭いた布の正体が、タオルではなく、女物のシャツ

だったからだ。

もしもアスナにこんなトコ見られたら……

戦々恐々とするルーク。

スグに我に返り、手に持つシャツを洗濯力ゴへと放ろうとしたのだが、

「ルーク？ 私のシャツに顔つつこんで何やってたのよ？」

「あ、その、なんだ……いや、違うんだ、アスナっ!？」

アスナは最初、ホントに何してんのコイツ? って感じに首を捻って不思議そうにしていた。

だけでも、スグに顔を真っ赤にさせる。

ルークが、自分の洗濯物の匂いを嗅いでいたのだ。

彼女の汗を吸って汚れたシャツの!

アスナの鼓動が激しくなった。

顔が熱い。耳まで熱い。

今ここでルークにせまれば、一気に関係が進むというのに、なんでだろう? とても、恥ずかしい。

裸で抱き付いた事まであるのに、なんで、どうして……?

今まで責め側だったから気づかなかったけど、もしかしたら私はいざその時になったらダメな子なのかもしれない。

それでも、言わなきゃ……

アスナは恥ずかしさから顔を俯かせ、

「あ、あのね？ い、いいわよ……？ だから、直接、匂い、嗅いでみる？」

ちらつ、ちらつと、時折上目遣いでルークを見ながら震える声で一生懸命。

普段の肉食系明日菜と違って、とても可愛い。

ルークも違うんだ！何て言葉は喉の奥へと引っ込んで、ふらふらと手がアスナの肩に伸びた。

指先がアスナの肩に触れた瞬間、ビクン！とまるで感電したみたいに身体を跳ねさせる。

「じ、ごめん！」

「ううん、大丈夫。大丈夫だよ、ルーク……」

思わず謝ってしまったルークに、アスナはいつもの責め気を僅かに取り戻す。

怖じ気づき始めたルークに、アスナは自分から行こうと身体を動かした。

ルークの胸に飛び込んで、思う存分、自分を感じて貰おう。

そう思って、ルークの胸へと飛び込むアスナ。

いや、飛び込んだつもりだった。

でも、実際は身体をふるふる震えさせているだけで、ルークとの距離はまったく縮んでいない。

それでもルークとアスナの距離は、本当に僅か。

ちよっと手を伸ばすだけで、全てを奪われてしまうような距離。

互いの緊張した吐息が肌に感じる程だ。

尻込みしてしまったアスナに、だがルークは興奮が弥が上にも高まった。

ルークは震えるアスナの両肩をしっかりと掴むと、ぽふん、っとアスナの胸の谷間に顔を埋めた。

そして、スウーっと大きく息を吸い込む。

アスナの勘違いではあったが、せつかく許可が出ているのだからと、ルークは遠慮なく一杯に彼女の匂いを肺に吸い込ませた。

心が穏やかになる柔らかい胸の感触に、アスナの甘い匂い……

緊張しているのだろう、アスナの激しい鼓動が、柔らかい胸を通してルークの耳に直接の振動を与え、それがまたルークの心を熱くさせた。

「アスナ……」

「な、なに、よ……」

「……いいか？」

「す、好きにきなさいよっ！」

アスナは、これをルークからのエッチなお誘いだと思った。

いざこうなると、とても怖いけど、こうなる事を望んでいたのだし

……

覚悟を決め、やや乱暴な口調で同意の返事をする、身体が力チンコチンに硬直し、動悸も一層に激しく高鳴り始めた。

ルークの手が肩から腰に回り、ぎゅっとアスナを抱き締める。肌と肌が触れ合い、互いの体温がとても温かく感じる。

いつもお風呂に入るときは、もっと大胆にくっついてるじゃない！

アスナは涙目になりながら、そう自分を鼓舞するのだけでも、なんだろう？　一緒にお風呂に入っていたときよりも、全然恥かしい。

だから、はやく、してよ……

そうすれば、この恥かしい感情もあつという間に霧散して、きつとスグに慣れてしまう。

アスナの心の声が聞こえたのか、ルークの顔が、グインと動いた。それなりに大きく育ったアスナの胸の谷間を堪能するかのよう、グイン、グインと。

「……………んあ……………んん、んう……………あ、いい……………」

ルークの動きに合わせて、アスナの胸がむにゅむにゅ形を変えていく。

先端が硬くしこり、こりこりとした感触をルークの頬に当てた。

痺れる様な快感がアスナの身体を走る
そして子宮がキュウンっと鳴り、熱い溜息が唇から外に出た。

「す、好きよ、ルーク……」

思わずこぼれた愛の囁きに、だけでもルークはアスナの胸の感触と匂いを堪能するのに夢中で聞こえない。

結局、この日はこれ以上先には進まなかった。

ルークも、アスナの匂いを嗅いでもいいよ、と言われた以上のコトをするつもりはなかったのだ。

それでも帰宅途中に聞いた見知らぬ女子高生たちの言葉がなければ、ここまですら進みはしなかったろう。

そしてアスナは……

これまで週末になると必ず帰省し、一緒にお風呂、一緒に就寝だったのが、お風呂がなくなった。

何故だかとても恥かしくって、仕方ないのだ。

それは、女としての成長だとも言えるし、本当の意味でルークを意識しだしたのだとも言える。

ルークは一緒のお風呂が無くなった事に安堵するとともに、どうしても残念な気持ちが出てくる。

とは言え、これで入浴後にトイレに駆け込むことは無くなった訳で。

良かったんだか、悪かったんだか……

ルークは自分の隣で眠るアスナに視線を送りながら、口元を苦笑いの形で歪めた。

そして、繋がれたアスナの手を、ぎゅっとキツク握ると、自分も目をつぶって、安らかな吐息を出し始めた。

すうー、すうーと次第に大きくなっていく寝息。

アスナは寝たふりを止めてむくりと起き上がり、「うう……眠れないよ……」と涙目でルークを睨みつけた。

一緒の布団も恥かしい……

でも、一緒に寝ないのも嫌だ。

アスナは複雑に矛盾しまくった心に悩みながら、今日も眠れない夜を過ごす……

第6話 ルーク、高2の年の暮れで

翡翠の瞳と、朱色の髪。

のどかの好きな人の色だ。

だから、その光景に驚きはしたけど、ただそれだけで。

ううん、違う。

ルークの髪の毛が、虹彩色に輝き、空気に溶ける様にして消えていく光景に、見惚れた。

「俺さ、人間じゃねーんだ」

ルークの痛みを堪えるみたいな口調。

辛いなら言わなくてもいいのに。

私は、そんなどうでも良い様なコトは気にしないのに。

「レプリカっつー、偽物でさ。本物のルーク・フォン・ファブレは別にいんだ」

偽物なんて言われても、私にとってのルークは貴方だけ。

なのにキレイな翡翠の瞳が、恐怖を隠しきれない傷ついた子供の目

をしている。

なんでそんな目を……

「ルークせんぱ……」

彼の名を呼びかけて、でも寸前でグツと飲み込む。

もう、私は彼の隣にいと決めたのだ。

例えば彼が嫌だと言っても、のどかは許すつもりは無かった。

大体、こんな瞳を向けられて、放っておけるはずない。

だから、もっと、気持ち込めて、声を出さなきゃ。

「せんぱい！」

のどかは緊張で高鳴る鼓動を抑えられない。

自嘲めいた笑みを口元に張り付かせ、ルークは彼女が発する言葉に期待と不安を隠しきれない。

私の大好きな2人だから、きっと上手くいくに決まってる。

少し離れた場所で2人を見守るアスナは、そう信じて疑わなかった。

あれから数ヶ月。

のどかは裏関係の世界も、ルークの本当も、全部知っている。

それでものどかは裏の力を求めようとはしない。

ルークにとっての日常になりたいからと、変わらずに前のまんま一般人で有り続けている。

ファンタジーな世界は、本が大好きなのどかにとっての憧れだけでも、それ以上にルークが大好きだから。

だから、今日ものどかはルークの隣で静かに微笑む。

「んと、次は何だ？」

「はい、次はですね……」

2人きりでのお買い物。

大晦日とお正月を健やかに過ごす為のお買い物。

ルークにとっては唯のお買い物かも知れないが、のどかにしてみたらデートって言っても違和感ない。

何より、そのお買い物にアスナではなく自分を頼ってくれたコトがとても嬉しくて。

「ルークさん、年越しそばやおせち料理はどうするんですかー」

「んー、その辺はアスナが勝手に用意すんだろーし、食い物関係は別にいいや」

ルークとお喋りしながら、のどかはこっそり手を伸ばす。荷物を持つ反対の手。

ぶらーん、ぶらーんと揺れている手に、自分の手を重ねた。

指と指を絡めながら、下から覗き込むようにルークの顔を見上げる。ほんの少しだけ媚びる視線で上目遣い。

「じゃあ、もう買う物は無いみたいですよ」

「そ、そうなのか……？」

「はいー」

顔を赤くさせ、目をきよるきよる落ち着かないルークは、だけでものどかの手を離しはしなかった。

世間で自分が何と言われているのか知っている。

可愛い女の子を3人も侍らせている3股野郎。

実際は3股も何も、一切手を出してはいない。

だからせめてと、こつやつて手を繋いで想いを伝える。

ドキン！ドキン！と胸が張り裂けそうになるぐらい高鳴っているのを、みんな解ってくれているだろうか？。

ルークはこの暖かい手を離したくはないと思っている。

何と罵られようと、情けなく卑屈な自分を受け容れてくれた3人の少女を、手放したくはないのだ。

ずっと、そばに居て欲しい。

自分の身体が音素に還る、その日まで、ずっと、ずっと……

「じゃ、じゃあよ、その辺を少しぶらつくか……?」

顔をそっぽに向け、恥かしそうに、でもしつかりとどかの手を繋いだまま。

のどかはルークが何て思っているようにも、今の状況をデートみたいだと思っていた。

でも、この瞬間から、みたいが、本当になる。

「はい……」

のどかは返事をしながら、やっぱり恥かしそうに顔を俯かせる。

頬が熱く、繋いだ手まで燃えるように熱く、汗ばんでくる。

気持ち悪いつて思われるのが嫌で、のどかは手を離そうとするのだが、ルークは逆に力を入れ、決して離さない。

不機嫌そうに唇を尖らせ、前を向いたまま、「行くぞ」とボソッと告げた。

ズンズン前に行くルーク。

引つ張られるようにされながらついて行くのどか。

慌ててルークの隣に立つと、絡みついた指をそのままに、腕をも絡

めて上体を預ける。

ルークの腕に当る柔らかいオツパイの感触。

だが、ルークは平常心を崩さない。

アスナに、メイに、常日頃迫られている今のルークは、この程度でうろたえたりはしないのだ！

だけでも、ルークは不意に気づいた。気づいてしまった。

肘に当る何かコリコリとした固い感触……

何だ……？とルークは小さく首を傾げ、そして理解する。

柔らかい胸の中央に、固く屹立したソレは、乳首だ……！

ルークは健康的な高校生である。

おっぱいの柔らかい感触は覚悟していたから平然なふりをしていられた。

でも、乳首まで想定してぬえーよ！

前屈みになっても可笑しく無い位に、下半身に血が溜まっていく。

やべー、このままじゃ俺は……っ！

まず考えなきゃならんのは、自然にこの状況から脱する事だ。

自然に、自然に、自然に……！

「な、なあ、疲れたからどっかで休んでいかねーか？」

「えっ!？」

少しもってしまっただが、ルークにとってはこれ以上望めない程に自然流れ。

適当な喫茶店にでも入ってしまえば、あとは何とかなるだろう。な、善なのに、のどかは驚きの声を上げると同時に、耳まで……いや、全身をルークの髪よりも尚赤く染め上げた。

「あ、ああー、うあー」

意味不明な言語を発しながら、ルークと、そして2人の目の前にある建物を交互に見る。

そして意を決したのか、顔を俯かせて、コクンと、でもしっかりと頷き、

「はい……」

聞こえるかどうか、って感じのか細い返事。

恥ずかしくって、ルークの顔をまともに見られないけど、彼の顔も真っ赤なのは良く解って……

のどかは、きつと先輩も同じ気持ち……なんて思う。

自分を求めているのだと、そう思ったなら、嬉しくて、切なくて……

緊張して喉がカラカラに乾いてくる。
でも、無理矢理ゴクンと生唾を飲んで喉を潤すと、のどかは決意した。

女は度胸。

こう見えて、のどかは明日菜よりもずっと土壇場に強い女だ。
同じような場面に出くわせば、アスナなら怯むところでも、のどかならば引きはしない。

一見草食にみえても、中身は立派な肉食系なのだ。

のどかは決意の眼差しで目の前の建物……お城みたいな装飾のホテルをキツと睨みつける。

爪が彼の手の甲を傷つけていることにも気づかずに、絡められた指の力を一層強く、ギュツと握り締め。

足を前に出す。

さっきまでとは反対。

今度はのどかがルークを引っ張る様にして、目の前の建物の暖簾のれんを潜った。

「へっ？　ちょ、ちょっと待てよのどか！　休むって此処じゃ……」

なんかルークが叫んでいるけど、のどかの耳には入らない。

顔から火が出るんじゃないかってくらい、恥ずかしい。
動悸が激しく、息も荒い。

頭が混乱して、自分が何をやっているのかも今一良く解らない。

これから行われる行為を思えば、それも仕方ない。

のどかはカウンターに座るお婆さんに、

「休憩、お願いします」

のどかの少しだけ震えた声が、ルークの鼓膜を振るわせ……

気づけばピンク色の部屋の、やたらと大きなベットの端に腰を掛け
ている自分に、ルークは驚いた。

「あ、あのー、先にシャワー使わせて貰いますねー」

のどかの、小さく小首を傾げ、はにかんだ笑み。

「あ？ あ、ああ……」

呆然と、流された返事をする。

そして……

シャワーを浴び、濡れた髪で真つ赤な顔を隠すのどか。シャワーの熱と、これからの期待で火照る肢体を覆い隠すバスタオル。

ハラリ、とそのバスタオルが床に落ち、ルークは、のどかの裸体に心を奪われる。

見掛けによらず結構あつた胸。アスナと同じ、無毛の丘陵。

その全てが滑らかな曲線を描き、シャワーの雫がキラリと光を反射した。

頭が真つ白になり、そんなルークの唇を、のどかは自分から塞ぎにいく。

「んっ……」

最初はただ触れるだけのキス。

初めてルークとした時の様な、唇を合わせただけの。

そして、すぐに離れ、互いの吐息が感じる位置で、見詰め合った。

「せんぱい、すぎ……」

「お、俺も、のどかが、好きだ」

「うれ、しい……」

「でも、いいのか？ 俺は……」

「関係、ないです。レプリカだろうが、なんだろうが……」

再び、ルークはキスをされる。

のどかの想いがたつぷり込められた情熱のキスを。

ぬるぬるした舌先がルークの口中に入り込み、前歯に触れる。

ルークの肺一杯に注ぎ込まれるのどかの熱い吐息。

だからだと喉に流れ込む、甘い唾液の味。

同時に感じるのどかの身体の震え。

緊張してんだ、よな……

それとも、怖いのか？

だったら、男の俺がしっかりしねーでどーすんだ！

のどかの震えに、ルークは覚悟を決めた。

のどかの細腰を引き寄せながら、彼女の舌先を自分の舌先で強く絡め取る。

「ううんっ、ん、んウ……ンンン、むうう……」

くぐもった喘ぎ声を漏らすのどかを、ベッドの中央まで引き寄せると、ルークは自分の身体でのどかの小さな身体を押し潰した。

「で、でー！ それからどうしたのー！！」

「ハルナ、少し落ち着くですよ。ですがのどか、私もとても気になるですよー！」

ルームメイトで、親友でもある2人に、のどかは今日の成果を誇らしげに語る。

「ふふ、あのねー」

「うんうん！」

興味津々の2人は身を乗り出してのどかの次の言葉に耳を傾け……

「ないしょー」

「ああ……」

でもガツクリと肩を落す。

不満そうな2人に、でも上機嫌なのどかは、

「すごく幸せだったから、今年はまだ思い残すことないよー」

世界中の全ての幸福を独占したかのような満面の笑み。
ほんのり赤みがかかったほっぺがとても可愛らしい。

そんなのどかに、2人は微笑ましそうに、嬉しそうに目を細め、
けども、身体が幼い少女は少しだけ寂しそうに顔を歪めて……

「良かったです、のどか……」

精一杯の祝福の言葉を。

「後は、アスナさんと、佐倉さんを出し抜くだけですわね！」

「3股で満足してたらダメだって！ やっぱ好きな男は独占しな
きゃ！」

2人の勢いにタジタジになるのどかだったけど、決して2人の言葉
に頷いたりなんかしない。

だって、「私、アスナさんとメイちゃんのコトも、大好き」だから。

その日、女として大きく成長した少女は、親友の2人をドキッとさ
せる程に妖艶な笑みを浮かべ、そう言い切った。

第7話 ルーク、激流間近の何気ない日常で

ルークは学園長に立て替えて貰っている学費と生活費の足しにと、裏の仕事をしていたりする。

裏と言っても、犯罪チックなモノではなく、魔法関係の仕事のコトだ。

内容はといえば、人々の平安を脅かす魑魅魍魎や魔物といった存在の退治や、それこそ魔法関係の犯罪者を捕まえたり色々である。

3学期が始まってまもない土日の連休。

ルークは従者であるメイを連れ、麻帆良から少し離れた場所まで仕事に来ていた。

土曜の朝に麻帆良を出、昼到着。その後、日が暮れるまで山野を駆けずり回って魔物の退治である。

退治しなきゃならない魔物の数が果てしなく多く、時間が経てば再び魔物が溢れ出すというこの仕事。

定期的に発生する仕事な上に、かなりの好い報酬が出る割には何故か人気がなく、ルークはこれぞ！とばかりに以前から目を付けていたのである。

メイと共に現場に降り立ったルークは、余りの現場の広さに閉口すると同時に、どうしてこの仕事が人気が無いのか分かった気がした。

とにかく、労働条件がハンパぬえー！

ルークはひたすら走りながら剣を振り下ろし、化け物共を斬り捨てていく。

そのルークの後ろでは、メイが仮契約カードから得られるアーティファクト 『旋律ノ魔法銃』 をぶっ放しまくっていた。

今の魔法界では骨董品とも言える魔法銃。

だがメイはこのアーティファクトをととも気にいつている。

名前がルークの2つ名である旋律なところもそうだが、なにより、大気中の魔力を吸収する上、メイの唱える魔法をも飲み込み放つ、この銃の威力が凄まじいのだ。

更にはルークがボソリと「譜銃か、これ？」と呟いたのを聞いたメイが、それは何ですか？と聞き返したのを切っ掛けに、彼の原点をより深く知る事が出来た。

その強力無比なアーティファクトで、目に入る魔物を次から次へと屠っていくメイ。

魔物一体一体の力が弱く、そのお陰か撃墜ペースはルークよりも遙かに上。

とは言っても数が本当に半端無い。

霊地と呼ばれるこの場所の所為なのだろう。
引っ切り無しに現れる。

「つ、次からはアスナも連れて来よーぜ……」

「そ………です、ね………」

日が完全に落ち、辺り一体の魔物を狩り尽くしたルークとメイの2人は、息もたえだえ。

背中合わせに座り込み、話すのも億劫である。

メイも折角の2人切りの機会にも関わらず、次回からはアスナ先輩も一緒にいいやと、どこか投げやり。

疲れ切った2人は、用意されたビジネスホテルに直行し、2人同室なのも気にせずにそのままボタン、キユー。

眠りにつく寸前にルークは、やっぱりこの仕事、次からはやめとうか……なんて思った。

そして、夢を見る。

一級の霊地なんて場所に長時間居たせいだろうか？

ルークにとって、これ以上ない位の悪夢を、繰り返し、繰り返し……

崩壊する大地。

師の視線は自分を通り抜け、本物のルーク・フォン・ファブレであるアツシユしか見ていない。

汚れた障気。底なし沼のような其処に、沈み往く子供。

助けられない。助けられる筈も無い。

その子を死に向かわせたのは、自分だというのに。

恐怖で身体がガタガタ震え、自分の所為じゃないと現実逃避。

仲間達の眼は冷たさを帯び、断罪の言葉を投げつける。

ティア、ナタリア、ガイ、ジェイド、アニス、そして、アツシユ……

グルグル、グルグル。次々に、入れ替わり立ち代わり、蔑む視線で自分を見下ろす。

苦しい、辛い。もうどうしていいのか分からない。

誰も俺にそんなコトを教えてくれなかった！

無知が罪だというのなら、俺を無知にしたのは罪じゃないのか……？

アクゼリユスを落とした俺が罪人つみびとならば、俺にアクゼリユスを落と

させる為に送り出したキムラスカとダアトは罪じゃないのか？

師匠を信じたコトが罪ならば、同じように師匠を信じたティアは何

故罪人じゃない？

俺を操ってパツセージリングを破壊したヴァンせんせい師匠は如何なんだ？

あの頃は思いもしなかった疑問がいくつも脳裏を過り、でも、一番

悪いのは俺なんだと、仲間達が罵倒するのだ。

ルーク、アナタ変わるんじゃないの？

いい加減になさいまし！

これ以上失望させないでくれ

あんまりイライラさせないでくれませんか？

サイテー

この屑が！

言い訳をするなぞ許されず、罪人は、ただ粛々と罪をあがなえばいいのだ。

自分に何度もそう言い聞かせ……

屍を更に積み上げ、同胞たるレプリカの命まで奪い尽くし、きつと俺は地獄へと堕ちるのだろう。

後ろを振り返れば、殺してきた者達の無残な屍。

屍の、救いを求めて上げられた手が、虚しく空を切っていた。

ハッ、と目を覚ます。

辺りは薄暗く、夜明けがまだ訪れていないのが分かった。

ハアハアと息を荒げ、寝汗でグツシヨリ濡れたシャツが張り付いて
気持ち悪い。

額の汗を拭い、カーテンを開け窓を開く。

夜明け前の冷たい風が、汗で濡れた身体にヒンヤリと心地好く、乱
れた息を落ち着かせた。

「夢、か……」

いいや、夢じゃない。

実際にあつたことだ。

消し去る事が出来ない、犯した罪の夢。

ここ最近、とんと見なくなった夢。

久しぶりに見たこの夢で、幸せに蕩けきった心がピンと張ったのが分かる。

万を優に越すだけの人を殺してきたこの身。

例え一度死んでも許される筈もない。

自嘲した笑みを口元に張り付けながら、窓を閉め、もう一度寝ようとベッドに手をついた。

むにゅっ

手に、柔らかく心地いい感触が伝わる。

な、なんだ……!?

と半ば答えが分かっているのに、指を蠢かせる。

むにゅ、むにゅ、むにゅむにゅむにゅ……

「あ、うう、ああん。お兄さまあ、もっと優しく……」

寝ぼけてはいるが艶のある、だけでも若々しく健康的な声が耳をくすぐる。

鬱めいた心が桃色吐息に塗り替えられて、ルークは「うわっ」と思わず悲鳴を上げて手を避けた。

最近、幸せに蕩けきっていた一方で、男として自身を失くしていた部分が唸りを上げかけ、だれどもすぐさま鎮静する。

色々我慢していたアノ頃。

最後までイクことは無かったけれど、それでもソコはカチンコチンになったと言うのに、今はピクリと反応しただけで、その後は……

ED

アルファベット2文字がルークの脳裏に過った。

DTでEDとか笑えるぜ！

「アハハハハ……」

虚しい……それでもさっきの鬱な感じとは程遠く、ずっとマシな笑い声が部屋中に響いた。

そうは言っても、これはこれで問題だ！

なんでこうなったのかと言つと……

年明け前、ラブホでルークはのどかといイ感じに良いトコまでイッタのだが、イザ挿入！の場面で、入り口が分からずモタついている

内に暴発。

のどかのお腹に白濁した液を撒き散らし、焦ったルークは名誉挽回とばかりにナニをナニしようとしたのだが、焦っていたせいなのだろうか？

段々とアソコが力を失い、萎びてしまい、小さくなったナニをみたのどかが、

「可愛い……」

ぼそつと一言。

……男としての自身を喪失してしまったのだ。

DT君らしい失敗ではあった。

のどかも大して気にしてない。

なんせ自分も初めてだったし、良く分からなかったのだから。

だけでも、ルークの心はガラスのように粉々に砕け散り……

EDを学校の友人達に相談しても、

友人1 豪徳寺薫

「あー、そのなんだ……ガム食うか？」

友人2 中村達也

「そ、そんなコトよりさ、俺の烈空掌とお前の魔神拳、どっちが強いかに比べてみようぜ！ なっ、なっ、なっ！」

「さて、と……トイレ、トイレ……」

こんな感じで役に立たんどころか、終いには菩薩のような顔で慰められるだけで、どうにもこうにも。

ルークは虚しく首を数回横に振り、悟り切った賢者のような……

いや、むしろ聖者の域にまで達した顔で、結局すうーすうーと穏やかな寝息をするメイの横に寝そべった。

胸を揉まれ、ルークの虚しい笑い声まで耳元で聞かされても、なお眠ったままのメイ。

疲れているんだろーそんな彼女を抱き寄せ、首筋に顔を埋めて思い切り息を吸い込む。

いつもだったら、ドギマギして男のシンボルが唸りを上げないようにするのでいっぱいいいっぱいのだが、今は聖者モード。

女の子特有の甘い良い匂いと、暖かく柔らかい女の子の身体に、心が穏やかになっていく。

先ほどの悪夢も、DTでEDな自分も忘れ、人肌の温もりに、うつらうつら……

きつと、次見る夢はいい夢だ。

なんて根拠はないけど、自信を持って言い切れる。

「メイ、あんがとな……」

ルークがこう呟いてから数瞬後、2人の穏やかな寝息がハーモニ
となって、暗いビジネスホテルの一室に、静かに静かに響いていた。

これはどう言うコトだろう……？

朝、目覚めるなりに飛び込んで来たのは、朱色の髪の毛。
寝起きの頭をフル回転させながら、寝ぼけ眼を大きく見開く。
薄いシャツと、パンツだけの恥かしい姿の自分の身体。

その身体が、彼の体重に押し潰されてベッドに沈んでいる。
そして、ライバル的存在であるアスナとは比べようもない位にちっ
ぽけな胸の谷間に沈む、彼の顔。
最後に、両足は大きく割られ、その割られた間に彼の固い腹が押し
当てられていた。

そう、まるで、性行為をしているかのように……

顔が、ボンツ！と真っ赤になる。

普段は結構大胆にルークにせまるメイだけど、本来のこの子は弱気
で恥かしがりやさんだったのだ。

実は今まで、恋敵であるアスナに負けないと頑張ってただけ。

しかも最近のアスナはどこか積極性に欠け、恥かしそうにモジモジ
するもんだから、メイも段々と本来の自分を取り戻しつつある。

だけでも、のどかお姉さまに先を越される訳にはいきません！と
ばかりにルークのベッドに忍び込み、ブラを外して薄いランニング
シャツとパンツだけのエッチい格好。

朝、目が覚めるなりきわどい格好の自分を見て、顔を真っ赤にアタ
フタするルークに自分という存在を刻み込もうと考えていたのに……
…アタフタするのが自分とか、笑えない。

メイは顔を真っ赤にしたまま、何とかこの状態から抜け出そうと身
体をよじった。

細身の割りに、筋肉のせいなのかやたらと重いルークを何とかどか
そうとするためだったのだが、ズズ……股間がルークの鉄腹にこす
れて、なんだか変な気持ち。

その上、メイが身をよじったせいなのだろう、人肌が無くなるのを
嫌がったルークが、彼女の腰に手を回し、ガシツとしっかり身体を
固定。

完全密着状態になった状態で、胸の谷間に納まっている顔を、グリングリンと動かし始める。

ただでさえ、変な気持ちになりかけていたのだ。

ビクっ、ビクビクビクンッ！

「きゃう！　だ、だめえ……」

背筋を通る甘い電流。

感極まったのか、目の端に溜まる涙に、上気した頬。

息を荒げながら、このままじゃイケナイと、腕の力だけで上体を起こす。

ルークの身体がメイの胸を刺激しつづり落ち、ついでに股の辺りまで刺激される。

それでもどうにかこうにかルークの頭が膝の上に納まる所まで頑張り、ホッと息をついた。

緊張と、その他色々な意味で沢山かいた汗が気持ち悪い。

汗で濡れたせいで、胸の頂のポッチのピンクが、薄いシャツの上からでもはつきりと分かる。

そして、僅かに湿った感のある、下着……

「しゃ、シャワー浴びようっ」と

殊更明るい口調でそう言いながら、起こさないように慎重に膝の上で安らかに眠るルークをどかそうとしたその瞬間、気づいてしまっ

た。

股間に掛かる生温かい感触。

それはじんわり濡れたアソコを刺激する、ルークの吐く息と、吸う息の感触だ。

「あ……や、やだ……」

慌てたメイは思わず脚を開き、ルークの顔が、アソコに直接、ポスン。

「あっ！？ だめっ、だめなの、にい……っ！ んっあああ……
……」

頭の中がまっしろ。

もう、だめ……ごめんなさい、お兄さま……

もの凄い勢いで生暖かい感触が広がる下着に涙しながら、メイは生まれて初めての絶頂による甲高い嬌声を上げた。

これ以降、メイはアスナと同じように、ルークに勢い迫ることは少なくなっただとか何とか……

それは爽快な目覚め。

夜中に一回目覚めた時の不快感は完全にぬぐい去られ、どこか暖かい気持ちで胸がいつぱい。

布団の中で小さくうずくまっているメイのお陰だろうと、ルークは思った。

よだれでもしていたのか、なんだかかやたらとベタベタする顔を手でゴシゴシふき、ピクリとも動かない、動こうとしないメイの耳元に唇をよせた。

「あんがとな、メイ。大好きだよ」

眠る彼女に告げた一言に、いつぱいの感謝と、いつぱいの想いをのせて……

その言葉に、ビクンっと身体を震わせ、そして……「う、うええ〜ん」っとイキナリ大泣きし始めたメイに、ルークはオロオロ、オロオロ。

メイの胸に過る申し訳なさに、ルークは気付ける筈も無く。

ルークはどうしたらいいのかと、チエックアウトギリギリの時間まで、困った顔してメイを慰め続けた。

この世界の奏者である、とある少年が麻帆良の地を訪れる、ほんの少し前の話……

世界観設定の擦り合わせとその他諸々設定

世界観設定の擦り合わせとその他諸々設定

・音素

ネギ魔世界での魔力に当ります。

・超振動

未だ詳細不明の王家の魔力に当ります……が！今後のネギ魔原作設定如何によっては変更の可能性アリ

・時間

オールドラントの1年は、地球時間のほぼ2倍、2年に当ります。ですがTOA原作設定に、オールドラントの時間は現実世界の大小そ2倍に当りますが、成長速度は現実世界の1年と同じです。とありますので、この作品中では、オールドラントの1年＝ネギ魔世界の1年です。ですから、ルークが17歳ならば、オールドラントのアッシュは27歳です。

・ルークの扱う魔力は詠う

まんまです。本作のルークは、魔力を音素として使ってます。故に、詠うのです。

・アスナ

旅の最後でガトウが死んだ辺りは原作準拠。
ですがルークが存在により記憶を消す云々のイベントは起きませんでした。

・ルークとアスナの生活基盤

名目上の保護者はタカミチが務めてますが、実質の保護者は学園長です。

学費や生活費、その他諸々全てを面倒見て貰ってる代わりに、ルークは魔法関係の仕事、アスナは木乃香の学校と寮でのボディガードをしています。

とは言っても、ボディガードの方は名目上だけで、単にルークの限界の叫びを重く見た学園長が、ソレを理由に一時的な引き離しを行うための説得理由にただけです。

実質に木乃香のボディガードをしている暇人はいません。

刹那？あれも名目上のものでしょう。原作的に考えてもw

・アーティファクト

アスナは原作準拠で、ハマノツルギ。

メイはオリジナルの、旋律ノ魔法銃。

TOAでリグレットの譜銃ですw

大気中の魔力を吸収し、更には持ち主の魔力まで弾丸にして撃ち放つことが可能。

魔法自体を込めるコトも可能ですが（例えば魔法の矢とか……）、メイはそこまで使いこなしていません。

・ルークの武器

現在は関西の長より譲られた、とある銘付きの日本刀。
ルークにとっては余り使い勝手は良くないようです。
アルバート流との相性は良くないですからね。

・ミュウは？

出待ちですw

最初期設定ではもう出てる予定だったんですが、途中でプロット変更、しばらく出番はありません。

・ルークの知名度

2つ名持ちですが、学校のアイドル的な存在です。
ようするに、マホラ外では無名です。

・ルークの魔法

使えません。つか使いません。

・ルークの気

オーバーリミッツです。

原作で微妙扱いになりつつあるKANKAHOUに迫る究極技法。攻撃力が倍加し、痛みと衝撃の神経が凍結され、どのような攻撃を受けても気にせず攻撃を続けることが可能になります。

この状態のルークは、エヴァンジェリンからバーサーカーの異名を付けられています。

現在は刀子とタカミチにより、使用を禁止されています。

・ルークの強さ

現在のネギ魔原作のNegiには勝てないでしょうww

Negig>龍宮(半魔族解放)>ルーク(7話現在)>楓>刹那
情けない?いやいや、上の2つの頭がオカシインですってw

・オールドドラントは?

ルークが抜けた穴にアッシュが入り、普通に原作ストーリーまんまに世界を救いました。

違いはローレイ解放でアッシュが消えなかった事ぐらいです。

・PT&アッシュのその後

現在のルークの新しい世界での時間軸で、アッシュは国王、ナタリ

アは王妃。

ティアがユリアシティの市長、アニスが樽豚の後釜、ジェイドは研究者、ガイはお貴族さまです。

結婚してるのはアッシュとナタリアだけ。

2人の間に来た子供を、ルークの生まれ変わりだと信じています。全員に言えることですが、年を取り、ルークに対してそれなりに反省と後悔の真っ只中。

とはいっても、俺もバカやったな〜程度なモンです。

キチンと反省してるのは、王になりキムラスカの裏を知り、親になつて子を持ったアッシュとナタリアだけです。

あと、全員が英雄として敬われています。

その事を自省し苦々しく思っているのもアッシュとナタリアだけ。

・メインヒロイン

アスナ、メイ、のどかの3人です。

・サブヒロイン

アスナとのどかに数人のサブヒロインが付いています。

原作の友好関係と照り合わせて下さい。

その他、疑問点があれば感想にてご質問下さい。
現状答えられる範囲で答え、現在設定外の場合は設定しますw

ルーク（Yes!DT!!&ED!!）を取り巻く人物関連

恋人

神楽坂明日菜

佐倉愛衣
宮崎のどか

従者

神楽坂明日菜
佐倉愛衣

保護者

タカミチ・T・高畑

部活関係者

宮崎のどか
綾瀬夕映
早乙女ハルナ
近衛木乃香

幼馴染

雪広あやか
近衛木乃香
豪徳寺薫

担任教師兼魔法関係の指導員

葛葉刀子

友人

豪徳寺薫

中村達也

山下慶一

昔（オールドドラント時代）の仲間

ミュウ（ブタザル）

ガイ・セシル

ジエイド・カーティス

ナタリア・L・K・ランバルディア

ティア・グランツ

アニス・タトリン

イオン・ダアト

第8話 追いかけてくる過去の足音（前書き）

特に意味はないけど、第7話が第1部最終話。
今話が第2部プロローグです。

第8話 追いかけてくる過去の足音

これは今より少しだけ前の話。

3人の少女に迫られて、あたふたする赤毛の少年がいた。それを小高い丘からこっそり見下ろす、どこか疲れた風に嗤う少年と、そんな少年に微笑ましい笑みを見せる少年。

「あー、もう！ 見てらんないよ！」

「あはは、彼はあれで天然ですからね」

「……アイツも、アンタにだけは言われたくないって、きつと……」
楽しそうに目を細め、赤毛の少年を見守る弟分に、少年は呆れた口調でそう言った。

「それにしても……」と、優しい顔で笑う少年は笑みを止めると、ばつが悪そうに話題を変えて、赤毛の少年から街の方へと視線をずらす。

「本当に平和ですよね、ここは……」

この地から少しでも離れれば、戦争なんていくらでもある。

しかもそれは、少年たちが元居た世界のソレよりも、おぞましく、凄惨なものだ。

それを知らず、日々をのほほんと呑気に暮らす者達。知らない事は罪だ。

少年たちは、その事を良く知っていた。

眼下で笑う赤毛の少年が、その体現者であり、その罪に苦しむ様を良く見ていたのだから。

でも、それでも、この平和な場所には価値があると思いたい。

「ああ、本当、忌々しい程に平和だよ、ここは……っ！」

厳しい口調で吐き捨てた少年の顔に浮かぶモノは、果たして怒りか、憎悪か。

いや、違う。少年は、この世界での10年で変わったのだ。

だからそれは、守りたいモノ達への、何も出来ない無力さからくる苛立ちだった。

「……帰りましょうか」

「ああ」

言葉少なく乱暴に言う少年に、だけでももう一人の少年は機嫌を損ねる事はない。

この世界で彼と再会してからは、何度も罵り合った仲だ。

だから彼のコトは、誰よりも理解している。

決して、『元』が同じだからじゃあない。
一人の『人間』として、長い時間をかけて互いに理解し合ったのだ。
そのお陰だろう。今では、こんな軽口さえも叩きあう。

「宿題、きちんとやりました？ ボクの丸写しとかダメですからね」

「やったよ！ いつボクがアンタの宿題を丸写ししたよ！」

「だったらいいんです」

平和で、のんきで、忌々しい。

それでも2人は、この世界での家族が待つ場所へと帰るのだ。

大切な、大切な、あの世界では決して得るコトの出来なかった、優しい両親の下へと。

「ねえアニス。ボクは幸せですよ……」

望まぬ生に、望まぬ地位。そのしがらみを越えて、いつも自由に見えたアナタへの、憧れ。

でも今は、そんなアナタよりも大切な人達がいる。愛する家族がいる。だから、さようなら……

夕暮れの中、二人仲良く並んで帰る道筋で、ポツリと呟いた言葉に、彼の兄弟は呆れた口調でこう言うのだ。

「可愛い妹が待ってるんだ。さっさと帰るよ、イオン」

イオンは満面の笑みを浮かべ、「はいっ！」っと元気良く返事をす
る。

それは、平和なこの学園都市の、暖かな日常のページ。

そして、時は戻る。

季節は真冬。

麻帆良は雪があまり降ることもなく、寒さもケテルブルクに比べれば暖かい。

それでも吐く息は白く、ひんやりとした朝の空気に身が縮こまる。太陽が昇ったばかりの空は、どこまでも透き通る青い、青い、空……

それはさわやかな朝、のはずなのだ。

3人の恋人達のお陰で、昔の嫌な夢も見なくなり、目覚めはすっきりさわやかである。

なのに、どうして……!?

もう、3ヶ月! 3ヶ月なのだ!!

股間のナニが反応しなくなってから!

男の生理現象、朝立ち。

それがまったくなく、心にぽっかり穴が開いたように虚しいとルークは思ってしまうのだ。

アスナ達の目もあり、かつてはその生理現象を抑えようと四苦八苦したものだが、こうなってしまった今、アノ頃の若い自分が懐かしい。

ルークはそんなコトを考えながら、疲れ切った老人の表情でチラリと視線を横にずらす。

自分がたった今まで寝ていた場所のすぐ横で、一人の少女が幸せ

そんな寝息を、すうー、すうーと静かに立てながら眠っていた。ルークの大切な彼女の一人、アスナである。

アスナは寝相悪く布団から上半身を曝け出しながら、着ているパジャマの前を肌蹴させていた。

チラリと覗く胸の谷間に、でもルークの下半身は反応しない。

反応しないから、心がさざめかない。さざめかないから、反応しない。

それはきつと、悟りを啓いた聖者のように。

なんて最悪な悪循環。

クソっ！っ！と心の中で毒づきながら、ルークはアスナの胸に手を伸ばした。

むにゅっとマシユマロみたいに柔らかく、それでいてゼリーの様にプルンと弾ける。

「むにゃ…………るーくう…………だめだつてえ…………」

身をよじり、痺れるような甘い感覚から無意識に逃げようとするアスナ。

だけでも、ルークは目の前の獲物を逃がすつもりは無かった。

あの頃を思い出してみる。

まだ自分の股間が雄々しかった頃を。

どうしたら雄々しくなったのかを。

今、股間はいくまで聖者モードだが、こうやってアスナの肢体を弄り、甘い声を鼓膜に響かせ、そして味わえば…………

きつと股間に成された封印が解けるのだと信じたい……！

そして、アノ頃の自分を取り戻すのだ！！

聖者ではない、ただのルーク・フォン・ファブレに……

ルークは肌蹴たパジャマの上着を、アスナを起こさぬように気をつけながら脱がしていく。

薄いタンクトップシャツ一枚にすると、ルークは大胆にもシャツの下から手を侵入させ、直接アスナの胸を揉みしだき始めた。

「ん……っ、ふっ、っ……あんっ……」

アスナの口から声が漏れた。

ルークはアスナの喘ぐ声に、のどかとラブホへ行った時並みの興奮に襲われた。

だからルークは、心の赴くままにアスナの上に覆いかぶさる。

そして、うなじから耳朶にかけて舌で唾液の道を、ツツウーっと作り始めた。

「や、んっ……る、ルークう？ なにやってんのよ……っ！？」

流石のアスナも、これだけされたら目を覚ます。

耳朶を蹴る、ルークの舌のざらつく感触に、アスナはぎゅっと目をつぶった。

いやいやと首を振り、なんとかルークの行為を止めさせようと、彼の胸に手を当て押し退けようと力を入れる。

自分を拒絶するアスナに、だがルークは耳朵を髑ついていた舌でアスナの唇を割り、今度は口中を蹂躪しだす。

アスナの舌に押し付け、唾液をたっぷりと絡み合わせる。

ダラダラと咽に唾液を流し込みながら、飲みきれなかった唾液が2人の口の周りを汚していった。

同時に乳房を弄る手の動きが一層淫らにネチツこく。

尖った乳首を、おもむろに摘み、捻り、アスナを刺激する。

咽を通るルークの粘る唾液と、胸全体から襲ってくる快感。

アスナの身体中に電流が走り、ビクツ、ビクツ、ビクン！　　っと何度も身体が跳ね上がる。

「ン！　んう……ン、ン、ン、ンウツ！？　ンンンン……ンふアツツ……！」

そして、一際大きい快感の衝撃で、アスナは人生で最初の絶頂を体験してしまった。

起き抜けにここまでされたアスナは、もう何が何だか分からなくって、次第に抵抗する力が抜けていく。

最近目覚めた羞恥心で、ルークを襲うのを止めていたアスナだったけど、元々こうされるのを望んでもいたのだ。

そしてルークも、アスナの痴態に聖者となった股間に血が巡り始め

……

よし！　イケル……！！

ふさいでいた唇からゆっくりと離れ、唾で出来た銀のアーチをうつとりと二人眺める。

見ればアスナの腰は小刻みに震え、もじもじと擦り合わせるフトモモの根元は、滲み出した愛液で下着にシミを作っていた。

熱い吐息を感じあい、蕩け、潤んだ瞳で見つめ合い、もう一度啄ばむように唇を吸って、アスナの頬を優しく撫でた。

「するぞ、アスナ……」

「や、やさしく……して、よ……」

「ああ、わかってる」

いつもと違って強引なルークに胸をときめかせ、お腹の奥がキュンとする。

成すがままになったアスナに、ルークは失ってしまった自信を取り戻し始めた。

ルークにとって、名誉挽回の時が来た！！

そう！ 俺のアソコは可愛いだけじゃないんだって教えてやるぜ！！！！

だが、ルークは、アスナは！ 2人は忘れていた！！

今日は休日ではない。普通に学校がある日だ。

なのに、なんでアスナがこの家に居るのか……

それはアスナと寮の同室である木乃香が、学園長からとある依頼をされたからだ。

依頼の内容は、新任の教師を迎えに行くこと。

なもんだから、朝早くから駅へと行かなければならない。

駅は寮からよりも、ルークの家からの方が近い。

そういう訳で、アスナと木乃香はこの家に泊まったのだ。

泊まったその日、アスナはルークの布団の中に忍び込み、木乃香はそのまま客室にて一夜を過ごした。

当然、木乃香はこの家の中におり、だからして、だからする。

ガタン！と部屋の前で大きな物音。

ルークとアスナが音をした方へと振り向くと、顔を真っ赤にして部屋の扉にしがみつくと木乃香の姿が。

「ちゃ、ちゃうんや！ 覗こう思ったわけやなくてやな……そ、その、ウチはすぐに消えるから、つ、続きをしても、えええええよっ」

2人の上気した頬が、違う意味で上気する。

代わりに昂ぶった性欲と言う名の獣は去った。

ED治すついでにDT捨てる機会もまた、完全に去ってしまったのだ。

「ちょ、ちょっと待って、このかーっ！」

「そ、そうだぞ！俺とアスナはエッチをしようとしたワケじゃねーんだ！」

「あ、あはは、そうなんや〜、ウチ勘違いしてもうたな〜」

「まままったく、ここここのかったららら……」

苦しい言い訳のルークと、噛みまくり、どもりまくりのアスナ。嘘言ってるのが丸分かりだけでも、木乃香は空気を読んだ。

「「「あはははは……」」」

3人のワザとらしい笑い声が、部屋に響くのだった。

学校が終わり、自宅への帰り道、こんな朝の出来事を思い出しながら、ルークは一人空しく歩いていた。

結局EDは治らず、もしも朝のアレが、EDを治す最後のチャンスだったとしたらと、気分はうつむき加減。

思わず、

「うがああああ、俺はどうしたらいいんだーっ!!」

頭を掻きむしりながら往来で叫ぶルークを、通りすがりの人達は微笑ましく笑う。

なんせルークは、一時期はファンクラブまであった有名人。

3股発覚以降はファンクラブも解散し、どこかしら軽蔑めいた感で見られていた彼だったが、人は何が功を奏するか分からない。

聖者となり、ニヒルでストイックな雰囲気や自然と醸し出すルークに、あまり表にはでないものの、人気が再燃し始めているのだからもったも、ルークとしては、そんな嬉しくもなんともないのだけども。

そんな感じに、ちまたで有名なルークが頭を抱えて絶叫する姿は、

通りすがりの人達の、ちょっとした楽しみみたいなモノだったりする。それは、平和で暖かい麻帆良なら、どこでも（？）見られる光景なのだが……

頭を掻きむしりながら歩くルークと、一人の少年がすれ違う。その時ルークの肘が、少年の肩にぶつかり、

「あ、わりつ、大丈夫か？」

ルークは謝ろうと少年の方を振り向いた。

「あ、あれ？」

でも、その場所には誰もいない。おっかしーなー、そう思いながら、再び頭を掻きむしろつとした瞬間、背中から声をかけられる。

「随分と鈍ったね、レプリカルーク」

『レプリカルーク』

その言葉に、ルークの身体がビシリと硬直する。そんなルークの横を、悠然と通りすぎる緑色の髪の少年。

そんなハズはない。

こんな所にいるはずねー！

だって、こいつは……！！

少年はルークの存在など無いが如く、そのまま背中を見せたまま、ゆっくりと遠ざかっていく。

僅かに見えた顔の輪郭、その髪、その背中……

「い、イオン……いや、シンク……か？」

ルークの呆然とした呟き、ピタリと足を止める。
が、すぐに何事もなかったかのように歩き去ってしまった。
為す術もなく、ただただ呆然と見送るルーク。

「なん、で………？」

殺し合いをした奴の、それでも懐かしい声だった。

お前が、どうしてここに………？

すでに見えなくなった背中。

その方向をいつまでも呆然とした面持ちで見ていると、

「どうなさいましたの、ルークさん」

顔がぶつかるんじゃないかって位に近い場所から、不意に声をかけられた。

ルークは「おわっ!？」と身体をのけぞらせ、悪戯が成功して喜ぶ幼馴染の顔に目をしばたたく。

いつの間に……? そう思いつつ、「なんでもねーよ」と言いながら、幼馴染の少女が持つ荷物に目をやった。

「これですの? これは可愛いらしい新任教師の歓迎会をするための品ですわ」

「新任教師……? ああ、アスナと木乃香が言ってたヤツか……」

少女が自然とした動作で荷物を押しつけると、ルークは苦笑いしながらその荷物を受け取った。

「どこまでだ?」

「私の教室まで」

「……メンドクせー、校門までで我慢しろって」

「はあ、仕方ないですわね」

「なにが仕方ねーだよ！」

「まあっ！いい加減その乱暴な口調は直したほうがよろしくてよ？」

「ナタリアみたいなコト言ってるじゃねーよ！」

「……ナタリアって誰ですか？」

頬を怒りで引き攣らせながら、ルークのお尻をギュッと抓る。

「いつてー！ なにすんだよ！」

「3人も女性を困っておきながら、それでも満足しない、るー兄さんへのお仕置きですわ！」

思わず出てしまった昔の呼び方に、怒りでない赤で頬を染めながら、誤魔化すように抓る力を強くする。

そんな感じで、わーわーぎゃーぎゃー。

本当に楽しそうに言い合いをするルークと少女。

ルークは、うつむき加減になった心が晴れたのが分かる。

それは間違いなく、今もルークのお尻を抓る彼女のおかげだ。

「痛いって言ってるんだろーが！」

「あたりまえですわ。痛くしてるんですもの」

……本当に仲のいい2人だ。

何かの切欠さえあったなら、アスナやのどかやメイでなく、彼女がルークの隣に居ても可笑しくないと考える程に。

そんな光景に、幼馴染の少女の付き添いだった2人のうち、そばかすがチャームポイントの赤毛の少女は驚く。

だって、ルークといえば、3股で有名な女ったらし。

クラスメイトのアスナに本屋、それに1年下の少女と本当にお付き合っている男だ。

堅くて真面目でシヨタコンな彼女が、こんなに親しそうにするなんて思えなかった。

「あらあら、あやかったら本当に楽しそうね」

「でもさ、それってやばくない？ あの人って、確か……」

「噂ほど女タラシじゃないみたいね」

「そーかなー」

「そうよ」

そばかすの少女は、大人の色気溢るる少女の言に首を傾げる。
でも楽しそうにしているルークと友人の姿に、ちづ姉の言う通りか
も……と、ルークの見方を少し変えた。

「夏美さん、千鶴さん、お二人の荷物も持ってくださいさるそうよ
ー！」

幼馴染の少女がからかい口調でそう言いながら、連れの人2人の少女
に手を振った。

「そんなん言ってねー！」

ルークは怒った風にそう言ったけど、

「あら？ 持ってくださいさらないの……？」

下から覗きこんでの上目使いのお願いに、

「も、持たねーとも言っつてねーよっー！」

ツンデレた。

3人の少女のにやにやした視線に、ルークは「うがーっ！」と怒りの声をあげる。
一斉に笑う少女達と、唇を尖らせながら、全部の荷物を乱暴に受け取るルーク。

ルークは、この世界が、麻帆良が、大好きだ。

暖かく、楽しく、幸せな気持ちにさせてくれる、この場所が。

だから、なんでこの世界に居るのは分からないけれど、オールドラントと被験者に絶望し、怨嗟を振りまいていたシンクも、ここでは幸せになれるに違いない。

幼馴染の少女と、見知らぬ2人の少女に囲まれながら、そう思った。

それは始まりの終わり。終わりの始まり。

この世界の奏者たる少年がこの地を訪れ、その少年の為だけに世界が蠢きだす。

常識が消え、理を歪め、大人達は力を失くすのだ。

第8話 追いかけてくる過去の足音（後書き）

木乃香はヒロインでもサブヒロインでもありません。

あと、六神将は出て来ません。

それは、この世界に転移する、設定上の条件を満たしていないからです。

各キャラの名前の呼び方表

アスナ ルーク

のどか 先輩

メイ お兄さま

あやか ルークさん、るー兄さん

木乃香 るう兄い

夕映、ハルナ ルーク先輩

その他モブキャラ ファブレ先輩

第9話 抱き合つたために必要なこと

ちゅ……

甘い、甘い、キスを交わす。
唇を啄ばまれるように、何度も、何度も……

「せん……ぱ、い……せんぱ、い……す、きですう……ん、はぁ……
…んちゅ、うぁ……」

彼の吐息に包まれて、彼の唾液が咽を潤す。

彼が私を求めているのだ。

そう思うだけで、のどかは場所も弁えずに身体が熱くなる。

ここは図書館島は地下3階。

誰でも簡単に来られる場所ではないが、誰も来ないような場所でもない。

少なくとも、図書館島探検部に所属する人間ならば、結構容易く来られる場所だ。

そんな場所で、こんなエッチなことをしていたら……

でも、のどかの思考は深い霧の中。
抵抗しようなんて気持ちを捜せない。最初からそんな気持ちはなかったのだけれど。

それに今の状況が、ちょっとエッチな少女マンガみたいで、のどかはなおさら肢体に火が灯ってしまうのだ。

まるで物語のヒロインみたい。

そう少しだけ陶醉しながら、のどかはビクンツ！身体を一瞬跳ねさせた。

彼の手の平が、のどかの淡い膨らみを蹂躪し始めたのだ。
そうして彼の唇が離れ、のどかの咽からくぐもった喘ぎが漏れ出てしまう。

「あ、あああ、はあ、あん！ や、せんぱい、だ、めえ……」

ダメなのに。こんなに大きな声を出したら、誰かに見つかってしまう……

のどかは漏れ出す甘い喘ぎを必死に堪えようと、両手で口を押さえる。

それでも漏れ出してしまう喘ぐ声が、人気のない空間に静かに響いてしまう。

小さく小さく反響を繰り返し、のどかと彼の耳朵を震わせる。

気持ちが高まり、もうどうなっても構わない！

そののどかは覚悟を決めて、潤んだ瞳で彼の瞳を見る。

のどかの無言の想いが通じたのだろう。

彼は先ほどのキスの情熱を上回る熱さで唇を奪った。

膨らみを蹂躪していた手は腰にまわり、力強く抱きすくめてくる。

全身に彼の身体と腕の力強さを感じ、のどかは胸の奥が熱くなるのを覚えた。

そんな中、彼のもう片方の腕がのどかの臀部を触り持ち上げると、腰と腰とがぶつかり合う。

のどかは、さり気なさを装いながら、彼が行為を行い易いようにと腰の位置を調節した。

この……辺りかな……？

ずらされた腰の位置が、丁度彼の熱い塊にあたり、それが徐々に力を持って硬くなっていくのがのどかに分かる。

心臓が勢い良く跳ね、あまりの激しい動悸に、彼に奪われてる唇から心臓が飛び出たしまいそう。

でも、彼の鼓動ものどかの身体を震わせる程に激しく高鳴ってる。

先輩も緊張してる。

そう言えば、前回中途半端に終わっちゃった時も、先輩は緊張してたっけ。

そう思ったら、心がとても軽くなった気がして、のどかは少しだけ大胆にいつてみようと思うのだ。首を振り、彼の唇から強引に解放されつつ、のどかは艶の含んだ声色でこう言った。

「先輩、お願い………します………」

「お、おう………！」

急に積極的になったのどかに押され気味な彼だが、そっぴや前もここ一番はこうだったな、と思いきを取り直した。

彼は、ここで止まるワケにはいかない！

彼にはワケがあったから。

こんな場所で。見つかったらマズイと言うのに。こんな風に強引にのどかはそのワケは知らないけれど、最近………と言うかここ数ヶ月、彼が何かしら悩んでるのは知っていた。

アスナも少し気づいてた。でも、彼女は今はそれ所ではない。イキナリ現れた年下、それも十にもみたない少年教師との同居に始まるゴタゴタに忙しいから。

メイはまだ気づけない。

彼女は彼女で何か落ち込んでいて、恥かしそうに、切なそうに、今までの積極的な行動を潜ませてしまっていたから。

彼女もアスナと同じで、それ所ではないのだろう。

だったら、今彼の悩みをどうにか出来るのは私だけ。

それでものどかは何も言わない。何も聞こうとは思わない。

話せるのならとづくに話してくれてるだろうし、そうでないなら聞くべきではないと思ったから。

ただ自分が出るのは、こうして彼の昂ぶりを受け止めるだけだろう。

それに……

彼を信じてる。

イチバン彼を知ってるだろうアスナにも、いいや、誰にも負けないくらい信じてる。

だから呑気にこんな事を考えもするのだ。

初めてが図書で本に囲まれてなんて 私らしいかもー

彼の肩に顔を埋め、決してわからないようにクスクス笑った。

やっぱり、中途半端でも一度経験すると強いものだ。

のどかはドキドキ鼓動が激しくても、どことなく冷静に自分と彼を見ていた。

ここ一番ではやはり女の方が強いという証明である。

実際、彼はここに来てガチガチになってしまい、手の動きひとつと

ってもモドカシイ感じがする。

「先輩ー、落ちついてくださいー」

にっこり柔らかく笑ってみせるのどかに、彼は少し戸惑いながらも、

「お、おう」

と返事を返した。

先輩、さっきからおうしか言ってますよ？

そう言いそうになるのどかは、けどしっかり口をつぐみ、相変わらずもたついたままの彼に代わって、自分からショーツをずり下ろす。

戸惑いを深める彼の手を取って、自分の服の中に導き、淡い膨らみに押しつける。

柔らかく暖かい、そんなマシユマロのような心地好い感触が彼の手のひらと脳裏を支配し、否が応にも興奮を高めるのだ。

そこまでして、ようやく覚醒したのか？

彼はパンっ！と残った手で自分の頬を叩いて気合を入れると、

「わりい、こっからは、俺がする……！」

無駄に真面目な表情でのどかの瞳を覗き込んできた。

ドキンと胸が高鳴る。

ああ、やっぱり先輩って素敵だなー

他人が聞いたなら砂糖を吐き出すほどの惚気。

正直、今の彼はちよつと情けなく、格好悪い。

自分から攻めておいて、イザその時が来たら怖気づき女にリードされてたのだから。

ここにきてようやく主導権を手にしようとしてるみたいだが、やっぱり滑稽ではあった。

でものどかは違った。多分、アスナやメイも同じ様な反応をするだろう。

それはともかく、彼は宣言通り意気を上げ、のどかの片足を抱えるように持ち上げると、肩に担ぐように引っ掛け、離れてしまった腰と腰の位置を自分で調整する。

ソレがのどかの大事な部分を弄り、のどかは声を荒げた。

と同時に、あれ？ である。

どうもソレが、前回に比べて硬さが足りない気がするのだ。

のどかは疑問を感じはしたが、彼以外との経験があるでもなく、前回といっても数ヶ月は前の事である。

だから、こんなモノなのかなー？ なんて思いながら、その時が訪れるのを待った。

遂に、初めての瞬間である。

少し柔いが、彼の熱い塊の熱を感じつつ、のどかは彼と見つめ合う。最後にもう一度啄ばむように唇を合わせ、そして、バサ、バサバサバサ……大量の本が床に崩れ落ちるような音がし、2人は音のした方へと目をやった。

「あうあうあうあうあうあうあう……」

顔を真っ赤にしたのどかの友人、綾瀬夕映がそこに居た。

「す、すみませんです。決して覗こうと思った訳ではなくてですね、そのなんて言いますか、こんな場所でしなくてもとか、のどかはやはり大人の階段を昇ったのですねとか、ルーク先輩のあんな表情初めて見てちよつとドキドキしました。それにちよつと羨ましかつたというか……っていえ！そうではないです！！私がルーク先輩に懸想してるなどとトンデモないのですよ！？私はのどかの友人として3股してる彼氏を持つのが心配で……って違うです！決してルーク先輩がダメだと言ってる訳ではありません！むしろ素敵だと……って違うですよ！ええ、違いますとも！！ああ、だから、その、ええ、なんていえばいいのでしょうか私……」

「お、落ちついて、ゆえー」

パニックってマシンガントークし始めた彼女に、のどかは彼の身体が

ら離れて彼女を落ち着かせようと微笑んでみせた。

正直、のどか自身もパニクリそうだ。

親友に自分のあられもない姿……情事を見られるなんて、とても酷い罰ゲーム。

それでも冷静に見えるのは、それ以上に彼女がフアビョってるからだろう。

事実のどかは彼女が何を喋ってるのか理解出来てない。

もっとも、それは彼も一緒であり、簡単に言えばこの場にいる3人全てが恥かしさのあまり混乱していた。

「はい落ち着くですよ私。ですからですね、好きですルーク先輩」

「あ、ああ、そっか、サンキュな夕映」

「そうだったんだー。もっと早く言ってくれたらいいのにー」

「ええ、そうでしたね。そういう訳でして、私はもう帰ります。それじゃ、のどか、ルーク先輩、程々にするのですよ」

「いや、今日はもうしねーよっ!」

「そうだよ、ゆえー!」

「今日はどういことは、明日にはまたするのですね?って違うですよ!と、とにかく私はもう帰るですね!では!」

落とした本を急ぎ拾い集めると、トトトトトト……彼女は駆け足でこ

の場を去った。

後に残されたのは、

「もう少しだったっていうのに、またこのタイミングで邪魔が入ったぜ。呪われてんじゃないのか、俺……」

「また、って、前は誰とだったんですか？」

「ああ、アスナと……って何言わせんだよっ！」

「何って……知りたいと思っってはダメですか……って……」

「……あれ？」

今、彼女は何て言った……？

彼が好きとか言っただか……？

2人は顔を見合わせ、そして、

まさかね。

「「あははははは……」」

そう笑って誤魔化した。

彼は元々老若男女満遍なくモテてはいたが、彼女の彼に対する態度は、最近とても厳しいものがある。

親友であるのどか以外にもお付き合いしてる女性が2人もいれば、それは厳しくもなるだろう。

彼女は潔癖っぽい所もあるのだから、それも当然だとのどかと彼は思っていたが。

だからこそ、先程の彼女の発言は意表を突いてて、まさかと言った気持ちが大きかったのだ。

でも、もしも本当だったら……？

だとしたら、はっきりと彼女の口からそう言って欲しいと思う。

のどかは彼女のことを大切な親友だと思っているし、彼女もそう思ってくれていると信じてるから。

そんな訳だから、のどかはこの件に関してはやっぱり気のせいだと思ふことにした。

彼女から面と向かって言われるまでは、これからはずっとそうするつもり。

のどかと別れて自宅への帰り道。ルークは、もう限界が来たと悟った。

EDを患ってからもう3ヶ月以上経過してるのだ。
気を抜けば鬱々としてしまう今日この頃でもあるし、最近のアスナとのどかはどこかルークの状態に気づいてるのではないかと思う節があった。

知られたくねー！。

ルークは心からそう思う。

だから知られる前に何とかしたいのだけど……

あともう少しなのだ！
さつきもあとちょっとで雄々しく立ち上がる寸前だったのだ！
なのに、この間の悪さ……

前回は木乃香、今回は夕映、だったら次回は誰だよ！？

関係的に親しい女の子が復活の邪魔しに来るってんなら、次はあやかか？

あっはっはっはっはー！。

…… っていい加減にしゃがれっ！

ここに来て、ルークは自力でなんとかしようとするのを諦めた。

ルークは知っている。

この地に納められている一冊の魔本の存在を。

伝説のふたつ名を持つメルキセデスの書

それさえあれば、俺は……！

ルークは自宅へと向ってた足を、理事長室へと変更する。

この伝説の書の使用許可を取る為に。

簡単ではないだろう。

なんせ伝説の2つ名を持つ本だ。

安易に使用許可など出る筈はない。

それでも、それでもルークは意地でもその使用許可をもぎ取るつもりである。

もう、限界なのだ。

愛したい。愛されたい。

もっともつと触れ合いたい。

アスナが好きだ。メイが好きだ。のどかが好きだ。

この先、ずっと一緒にいる印を彼女達に刻みたい。刻まれない。

そうすれば、きっとこの心のもどかしさも消える筈だから。

それは思春期特有の性欲の暴走だけではなかった。

きつと、心から愛する異性がいるのなら、本当に自然な行為であるはずなのだ。

しかし、いや想定通りルークのメルキセデクの書の使用許可申請に、反対する魔法教師達。

あの書には膨大な魔力が秘められており、一個人が勝手に使っていない物ではないのだから。

だが、学園長の言葉により、話は一転する。

「まずは訳を聞いてからじゃ」

学園長のもつともな意見に、この場に居た全ての魔法関係者の視線がルークに向いた。

ルークとしては話したくない。でも話さなければならぬ。

どうせ話さないといけないのなら、せめて……

「女性陣の退出を……」

ざわめく理事長室に、だが学園長の一喝でルークの望み通りの状況が訪れる。

そこで語られるルークの事情に、その場にいた全ての魔法教師（男性）達の頬に涙が伝った。

「規則は大切じゃろう。じゃが、真に困ってる者を救うことこそが、我等【立派な魔法使い】を目指す者達の使命ではないかのう」

タカミチ・Ｔ・高畑は真つ先に賛同し、明石、弐集院がそれに続いた。

そして彼らの視線は一人の堅物へと向けられる。強硬に書の使用反対を訴えてた彼は、人差し指で眼鏡をクイツと直す、

「ええ、彼の苦悩は察するに余りある。私も立派な魔法使いを志す一人として、いいや、それ以上に一人の男として、ルーク・フォン・ファブレに対する書の使用許可を願います」

家に帰れば、双子の養子と一人娘に囲まれた幸せパパさんであるガンドルフィーニ。

職場では常に厳しい彼の、それでもやはり同じ男として思う所があったのだろう。

はつきりと告げたルークのための願いは、パチパチパチ、ワーッと一堂から拍手で迎え入れられた。

その後、入室許可を得て入ってきた女性陣は、先程まで強硬に反対していたガンドルフィーニの変遷と、泣きながら土下座して感謝の意を表すルークに目を丸くしたとかなんとか……

ルークは胸を撫で下ろす。

もつとも、これで絶対治るとも信じてはいなかったけど。

それでもルークは、徐々に図書館島の探索を開始した。

時に、期末考査まであと少し。

今期最後のテスト結果がボロボロになろうとも、ルークに後悔は一切ない。

異世界出身のルークの目から見ても、いっその幻想的と言ってもいい

図書館島深部の光景に緊張を高まらせながら、ルークはそう思った。

第9話 抱き合つたために必要なこと（後書き）

夕映は2番目のサブなヒロインじゃないです。

今回はその2番目のサブヒロイン登場まで話が進むはずだったんですが、そこまで到達せずw

第10話 抱き合うために必要なこと2

メルキセデクの書。

それは聖書の創世記に記載されているサレムの王にして、ユダヤの至高神ヤハウエの司祭メルキセデクの名を冠した書だ。
至高神ヤハウエは魔術を堅く禁じており、その司祭であるメルキセデクが魔術書を書くなどありえないが、確かに絶大な魔力が込められている本である。

その絶大な魔力を正しく用いることが出来たなら、ルークの望みはまず間違いなく叶うだろう。

ED。俗に言う、インポテンツを治すなど、実に容易い……はずなのだ。

だが、ルークは現在、心底困っていた。
図書館島を完全攻略したさいに見つけたメルキセデクの書が、以前有った場所になかったのだ。

しかも書が安置されていた場所に、

メルキセデクの書は現在貸し出し中じゃ。byこのえもん

と書かれたメモ用紙が一枚。

ルークはそのメモ用紙を持って、怒りにワナワナと身体を震わせた。

「あのクソジジイ……ぶつ殺すッ!!」

この世界に来て、正しく教育を受けたルークであったが、その彼の常になく汚い言葉。

だがそれも仕方ない。

学園長は知っているはずなのだ。

ルークがメルキセデクの書をどうして欲しているのかを。

そして、今こうしてルークが書を取りに来ているのも。

なのに！ どうしてだよっ!!

ルークは半日かけた探索が無駄に終わった疲労感を感じながらも、瞳を怒りに染め上げ踵を返した。

理事長室でレイディアント・ハウル。

長い頭狙ってレイディアント・ハウル。

この世界に来てから、ただの一度も使ったことのない秘奥義の名を

ぶつぶつ呟きながら、湧き上がる怒りのオーラは止まるところを知らず。

身長171cmの決して長身とは言えないはずのルークが、やたらと大きく見えるぐらいだ。

今のルークなら、あの世界で最強の名を冠していたヴァン・グランツとてただでは済むまい。

そこまでの怒り。そこまでの憎悪……！

だからだろう。

平常心をこれ以上ないくらいに失わせていたルークが、いつもなら決して掛からない罫に引っかかってしまったのは。

パカリと床が開く単純な落とし穴。

それに見事にはまったルークは、

「んうのうつわあああああああああああああああああああああ……

……………クソジジイっ！ 絶対に死なすっ！！」

悲鳴を上げて落ちた。

割と余裕あるみただけども……

「ウ…………グ、ああ…………」

呻き声を上げながら、ザバツと水の中から這い出るルーク。

悲鳴をあげる身体を無理矢理起こして周囲を見渡すと、そこはまるで別世界。

地底だというのに光にあふれ、しかもケテルブルクの高級ホテル内にあつたスパのような暖かさ。

しかも景色がこれまた凄い。

古ぼけ、歴史と曰く有り気な建物を中央に、秘境の様な滝群と、そ

の行き着く先にある湖。

そして所々にある水に沈んだ本棚は、流石図書館島。不思議なのに
も程があると思わせた。

どうやら【上】から落ちて来た先は、図書館島探検部内において幻
と称される地底図書室みたいだ。

ルークがここを訪れるのは2度目で、だからこそ迷いない足で中央
の建物を目指す。

アソコには最低限の食物やトイレ。そして外へと通じる出口が近い
場所でもあった。

が、途中でルークは足を止める。

ルークの視線の先には、丁度いい感じの滝と泉。

あの滝ならばシャワー代わりに丁度いいし、泉も風呂代わりに丁
度いい。

図書館島の探索で汚くなった上に、水の中に叩き落とされてボロボ
ロのぐちゃぐちゃになってしまった自分の学ランと身体。

……濡れたシャツやパンツが身体に張り付いて気持ち悪い。

そして目の前にはいい感じの滝溜まり。

ルークは心の内から湧き上がってくる衝動を止める必要性を感じな
かった。

すなわち、濡れて気持ち悪い服や下着を脱ぎ捨て、泉に飛び込んで
さっぱりしたい。

どうせココは人が滅多に来ない魔境。

素っ裸でうるついた所でなんの問題があるのか？

だからルークは躊躇なく服と下着を脱ぎ、適当な本棚に置き捨てる。
ここは暖かい場所だから、こうして放置しとけばその内乾くだろう

とルークは素っ裸になり、泉に身を沈め大きく手足を伸ばす。

「ふう、気持ちいいな……」

と大きく息を吐いて身体から力を抜くと、溜まった疲労が身体の奥から溶け出して、この滝溜まりの水に流れて消えていく。そんな感じがした。

余りの心地よさに、眠気が襲ってくる。

ルークはゆっくりと目をつぶった。

メルキセデクの書探索の疲れだけじゃない。

ここ最近の心労は、ルークが自分で思っている以上に酷いモノだ。

立つべきモノが立たず、それによる男としてのコンプレックス。

思春期の男女として、当然先にある行為を出来ないもどかしさ。

そんなモノまでもが、溶け出して消えていく。

ルークは特異な生まれのせいで、基本的には激しいコンプレックスと後ろ向きな性格の持ち主だ。

最初からそうだった訳ではないけれど、もうどうしようも無いくらい根深くルークの心を蝕んでいる。

普段は明るく傍若無人にしているせいか、中々そうは見えない所が更に問題を複雑化させていた。

残すならオリジナル

そうはつきりと、共に旅をした仲間に告げられたのを今でも忘れられない。

その言葉を、誰も否定してはくれなかったことも、はっきりと覚えてる。

いや、一応は止める素振りを見せてはいたが、どうにも本気の言葉には聞こえなかった。

ただ、この言葉に安堵した自分も確かにいた。

これでようやく楽になれる。

アクゼリユスの罪の償いを求める声も、これでようやく聞かずに済む。

だってそうだろう？

ただ卑屈になるのはやめると言うだけで、本心はオリジナルルーク、アッシュをこそ大事に思っているに決まってる。

ナタリアがアッシュに言った言葉……アナタが本物のルークでしたのね？

否が応にも自分が偽物なんだと理解させられた言葉だ。

「そついや、あれからもうすぐ10年か」

目をつぶりながら、スルリと唇からこぼれ落ちた言葉。

あの世界で生きた8年と、この世界に来てからの10年。

どちらが幸せだったのかと問われれば、迷うことなくこの世界だと

答えれる。

だけでも、あの世界で過ごした最期の一年。

あの一年の密度は、こちらの10年よりも遥かに勝っていた。

それまでの鳥かこの生活から一転、オールドラント中を駆け回る日々。

知らないことは罪だと知った一年。

自分が人ではなくレプリカという名の紛い物だと知らされた一年。レプリカには価値がないんだと解らされた一年。

何より、生きるのがこんなに辛いんだと知ってしまった一年。

思い返せば、何か楽しいことが一つでもあつたらうか……？

見下す視線。蔑む言葉。

愚か者よと、最低な奴だと。

「……やめやめ」

これ以上考えると、バカなことまで考えてしまいそうだ。

確かに自分はバカなのだろう。愚か者なのだろう。

でも、そんな自分を大切に思ってくれる人達がいる。

それはこの世界で出来た仲間達がそうだし、なによりも……

今の自分には恋人がいる。

なのにいつまでも後ろ向きなことを思っていると、彼女達に失礼だ。なんせ彼女達のおかげで、今は生きるのがとても楽しい。

ルークは水飛沫を上げながら立ちあがり、今度は水が流れ落ちる滝に頭から突っ込む。

バシャバシャとかかる冷たい水が、胡乱なことを考えていた頭を冷やした。

辛かったことや、苦しかったことばかり考えていても仕方ない。

そう、アッチでも良かったことがあったじゃねーかと、ルークは口元を緩める。

大切な出会いがあった。

決してルークを貶めなかったノエル。

最後までルークの傍に居てくれたミュウ。

「ブタザル、どうしてっかな〜」

アイツには幸せになって欲しい。

いや、きっと幸せだろう。

自分がいなくなってもティア達がいる。

だったら大丈夫。

ティアは俺を蔑んでいたのだろうけど、ミュウのことは大好きだったもんな。

可愛いもの好きで、あれで結構天然入ってるヤツだったけど、うん、

大丈夫。

そうしてルークは滝に打たれながら両頬をパシン！っと叩き、

「っしやー！」

気合いを入れる。

まずはこの図書館島から脱出し、理事長室へ行って、あの長頭に一撃喰らわす！

そしたら、もう彼女達に話してしまおう。

一人で悩んでいても仕方ない。

恥ずかしい上に屈辱だけでも、彼女達はルークにとって最も大切な何かだ。

だからこそ、ルークはEDを治したかった。

もっと、彼女達と繋がりたいかった。

繋がって、分かり合って、刻みたい。

それは大切な人を想う、ごくごく自然な感情。

ルークは頬を緩めた。

そうして微笑みながら滝から出て、濡れた髪を掻き上げる。

頬とは言わず、顔中に流れる滴の滝を、強引にゴシゴシと腕で拭い、そこでピシりと堅まった。

……ここには誰もいないはずだった。

現在この地底図書室まで来れる者はルーク以外に誰もいない。

それだけではない。

第一、テスト期間中である今、この図書館島の使用は禁止されている筈だ。

なのに、どうして!?

ルークの目の前には、顔だけ見たことがあった少女がいた。

名前は知らない。

ただ、アスナ達のクラスメイトとだけしか……

その少女が、顔を真っ赤にしてルークのとある一部分を凝視していた。

そう、ルークのアソコをだ!

すぐにそこを隠そうとするルークだったが、彼もまた少女の姿に釘付けになってしまう。

ただ一点だけを凝視する少女の、淡く膨らんだ胸。

アスナより遙かに小さく、のどかよりもまだ小さく、メイと同じくらいの大きさである胸。

その柔らかそうな頂にあるツンと尖ったピンク色の部分に視線が走り、そのままその視線が下へと降りていく。

見かけによらず引き締まった腹からへソ。そして、女の部分へ。

アスナなどに比べ、一段と幼い顔に見える少女であったが、そこだけは確かにアスナ、のどか、メイよりも大人であった。

髪の毛と色と同じ色の茂みがうっすらと覆い、乳首と同じ色した性

器がひくついている。

ともすればメイよりも幼い外見……というよりは明らかに子供然とした色気の無い風なんだが、確かにそこだけは大人だ。

なんせアスナやのどか、メイのアソコは無毛だったし。

だからこそ初めて見るソレが珍しく思えて、ジッと視線を固定させてしまった。

そんな感じで思わずマジマジと見てしまいが、少女は気づかず視線はルークの股間に釘付けのまんま。

それはルークから邪なモノを感じなかつたからかもしれない。

なぜなら、現在の彼は常時賢者モードであつたから。

とは言え、ルークの不躡な視線にいつまでも気付かない訳もなく、

「いやああ〜んっ」と慌てて両手で胸を覆い隠すと、腰を抜かしたみたいにへたりこんだ。

下半身を泉に沈めた 字開脚のような格好は、両手で覆い隠す胸が見えないだけで、一番大切な場所は丸見えのままである。

いや、むしろ更に見えやすくなったと言えよう。

この場合、俺が覗かれたてんだから、俺は悪くぬえーよな？

それでもこの状況を誰かに見られた場合、問答無用でお縄間違いなしだ。

やべえな。どうすつか……

そう思いながら視線を少女の秘所部から顔へと移す。

すると、丁度少女も恥ずかしそうにうつむかせていた顔を、再びルークの股間に向け、続いて徐々に上へと上げていく。

……そんなにそこが気になるのかよ！

隠したい気持ちが多々あれど、やはりルークも平常心ではないのだから。

身体が思うように動かない。

どう思った？

やっぱ【可愛い】か？

それとも、ちっちゃ、い……か……？

殆ど面識のない女の子にそんなこと言われたら……俺は死ぬ！

いや、むしろアスナ達に言われた方がキツイか？

なら、俺はもう大丈夫なはずだ。

のどかに、もう【可愛い】って言われてるもんな……

思わず目に涙があふれた。

ルークは右手で目じりを押さえ、涙がこぼれ落ちそうになるのをグツとこらえる。

すると少女は何を思ったのか、体育座り風M字開脚から四つん這いになってルークににじりよった。

ばしゃっ、ばしゃっ。

水飛沫を上げながら、なんとかルークの足元近くまで来ると、申し訳なさそうな声色で、

「う、ごめんね……」

初めてお父さん以外の男の人のモノを見ちゃったから、つい……だ、だってね？ お父さんのと比べるとずっと大きくて！ びっく

りしちゃって……
ほんとうにゴメンなさい……」

良く言えば天真爛漫。

悪く言えば子供っぽい彼女だからこそ、こう言えたのだろう。
自分が見られたことによる羞恥よりも、今にも泣きそうなルークに
対しての罪悪感が先にきたのだから。
もちろん、自分が最初に覗いていたのだということも忘れてないか
ら、こういった反応をみせたのだろうか。

だが、少女の言葉に対するルークの反応は劇的だった。

目を大きく見開き、身体をワナワナと震わせる。

少女が更に心配そうにすると、ガツと少女の脇の下に手を差し込み、
ザバツと水の中から少女の身体を引き上げた。

「な！ なにするつもりっ！？」

さらされる柔肌。さらされる胸。

濡れた肌が外気に触れ、暖かい筈の地底図書室なのに、ひんやりと
どこか冷たい。

こんな状況だ。

いくら天真爛漫の代名詞と言える少女といえど、羞恥と、そして貞
操的な意味での恐怖が顔を覗かせた。

でもルークはそんな少女の当たり前前の反応に気づきはしない。

それ所ではないからだ。

「今なんて言ったーっ！」

「へっ？」

「だから、今なんて言った！」

ルークの余りの勢いに、少女は貞操的な意味での恐怖は消えた。ただ、別の意味で怖かったけど。

「え、えと、ごめん……？」

「ちがうっ！ その先だ！」

なんでこんなに必死なのかなあ？

そう思いながら、少女は先に自分が言った言葉を思い出す。

「初めて男の人を見たって……」

「もっと先いつ！」

「ホントにごめん……だったっけ？」

「行き過ぎだっ！」

「あつと……お父さんのより大きいって言ったような？」

「そう、それだ……俺の何が大きいんだ！」

……恥ずかしい。言いたくない。

でも、ルークの目は真剣そのもので。

更には何かしら追い詰められているようにも見えた。

子供っぽい少女にもそれが解るくらいだ。本当にそうなのだろう。

だったら、口にするのはどうかと思う言葉だけでも、言わなきゃいけない。

そうじゃないと、彼は……

少女は勇気を振り絞るようにして、それでも恥ずかしそうに頬を染めながら……

「お、おちんちん……」

小さく、小鳥がさえさえずるよりも更に小さくそう言った。

だが、ルークは満足しない。

するはずもない。

「……もつとデカク！」

「えっ？」

「でっかい声でっ！」

「おちんちん……」

今度は、さつきよりは大きく。
でも、まだ小声と言った方が自然な程度の大きさ。
当然、ルークは満足出来ない。

「なんだって!？」

「だ、だから……」

「はつきり言えっ!」

「おちんちんだってばーっ!!!」

ドドドドド……と滝が流れる音しか聞こえないこの地で、少女の声はやたらと大きく聞こえた。
ルークは少女の脇の下に手を差し込んだまま、天を仰ぎ見る。

大きい……

俺のモノが大きいだと……!？

ルークのEDは心因性の物。
のどかが言った何気ない言葉、可愛い。
この言葉に傷つき、自信を失くしたのが原因である。
それが少女の言葉で癒された。

そう！ 今思えばのどかの言葉も、そういうつもりではなかったの
かもしれない。

ただ、大きく雄々しくなった状態から見たら可愛いと、そういう意
味だったのかもしれない。

決して、ルークのモノが小さいなどと言った訳ではなかったのだ。

「あはははははははは……」

泣いて笑う。

漢は涙を見せてはいけないのに。
でもだ、今は泣いてもいい筈だ。

だってルークのそれが、少女の裸と柔肌に反応して雄々しくそそり
立ったのだから……

だから泣いてはいても、それは心が晴れ渡るような笑いだった。
少女も自分の状況を忘れて何だか嬉しくなってきた。
何が何だかさっぱり解らないけど。

「ありがとな」

「えつとー、なにが？」

「内緒だ」

ルークは少女の耳元でそう呟くと、その声にゾクゾクと背筋を震わせる少女の様子に柔らかく笑んだ。

そして、そのまま少女のうなじに唇を押し付け、チュツと音を立てる。

常のルークなら絶対にしない、なんだか女タラシのような所業。股間の戒めが解け、一時的にハイになっているのかもしれない。

だが効果は抜群だ。

少女はビクンつと電流が走ったみたいに身体を跳ねさせ、身体が凄く熱くなる。

なんなのコレ！？ そう思いながら、ルークの身体から離れようともがく。

脇の下に差し込まれた手からなんとか抜け出すと、腰が抜けたみたいに全身から力が抜け、膝から崩れ落ちた。

ペタンと尻もちをつき、そして目の前のモノにボンつと顔を充血させる。

「おっきい！ さっきよりも全然おっきいよコレっ!?!」

思わず指先でツンとつついてみる。

ビクビクンっ！

するとやたらと硬いソレが、痙攣したみたいに跳ねると、更に大きく硬くなる。

目を丸くして、再びソレから目を離せなくなってしまった少女は、何これ？ ちよつと面白い。それになんか可愛いかも。

なんてルークが知ったら再びEDになつてしまうようなこと考える。

「っってお前っ、どこ触つてんだよ！」

「くふふ……」

そんなルークの反応が面白くつて、少女はいたずらっ娘の顔で笑う。そうしてもう一度つつこうと指先を伸ばした。

だけでも、それは叶わなかった。

なぜならルークが、「おぼっわあああああっ!?!」横っ跳びに吹っ飛んだからである。

「なにやってんのよアンタわあああああ!?!」

アスナだ。

ルークは知らないことだが、少女と一緒にこの地に落ちていたアスナが、ルークに飛び蹴りを喰らわせたのだ。

少女と同じように水浴びでもしようとしていたのか、アスナも裸で全身赤く染まっていた。

少女も赤かったが、間違いなく赤の意味が違う。

怒りだ。

一般人である少女の目から見ても、アスナの背後にゴゴゴゴ……
となんだか水蒸気のようなものが……

それもそのはず。

ルークの手を、少女がナニしてるようにしか見えなかったから。

「こんの浮気モンがつー!!」

仰向けに地面に倒れ伏していたルークの上に、いわばマウントポジションの体勢で乗った。

ぷにぷにしたアスナの尻の感触が何とも言えないくらいに気持ちがいい。

だからルークのアソコが更に力を持ってしまった。
でも、そんな場合じゃない。

「ち、違う！ 誤解だっ！」

「なにが？ なにが誤解なの？」

にっこり怖い顔で嗤うアスナに、だがルークは言い訳が思いつかない。

だってそうだろう？

この状況、何を言っても苦しいだけだ……

だから、

「死なない程度でお願いします」

諦めた。

アスナの拳が振り上げられて、ルークはこれからくるだろう痛み
に身体を強張らせる。

彼女の一撃はとても重く、とても痛い。

それにアスナの目の端に浮かぶ涙。

……罪悪感がルークの胸を焦がす。

だからルークは殴られる前に、自然と口から「ごめん……」と言葉
がこぼれた。

言い終わるが否や、アスナの拳がルークの頬をペシんと叩く。

それは軽い一撃。むしろ撫でるような優しい一撃。

「ばか……」

ルークの頬に、アスナの涙が一滴。ひとしずく

そうして、自然と2人の唇は結ばれた。

騒ぎを聞きつけてやってきたアスナのクラスメイトが見たものは、裸で抱き合いながら深いキスをするアスナとルーク。

そして、顔を真っ赤にし、何だか切なそうに2人を見ているまき絵の姿だった。

クラスメイトである少女は、ルークとアスナの行為に茫然と、普段はあどけない子供のまき絵が女の顔をしているのに驚愕する。

「どつでもいいですが……いえ、やっぱりよくはありませんが、一体全体何があったのでしょうか……?」

クラスメイトであり、ルークの後輩でもある夕映の声は、3人の耳には届かなかった。

「もうそろそろ本気で考えてもいいんじゃないかねえ」

「結婚、ですか……？」

「そうだよ！ アンタももういい年だからさ。イエモンさんだつて、安心して眠ってらんないよ？」

「……結構です。まだまだやりたいことが沢山あるんで」

「そうかい？ いい縁談なんだけどねえ……」

少しキツメに言ってしまった言葉。

それでもふんわり受け止めてくれる彼女に、素直になんかなれない。だからノエルは最後にペコリと頭を下げると、逃げる様にしてその場を去った。

はあ、はあ、はあ……と、息が切れる程に勢いよく駆けてむかう先は、シエリダン襲撃で殺された人たちの為の慰霊碑の前。

キムラスカとダアトの共同出資で建立された慰霊碑……

ノエルは慰霊碑にむかって何か話そうと思うのだけれど、なにも言葉が思いつかない。

どうすればいい？
どうしたらいい？

今もこうして彼のことを想うのは、もう自分しかないのだというのに。

ND2017からND2027へとなった今では……

「あれから10年か〜」

茫然と呟く。

時間の流れが恐ろしく速いと思った。

今でも目をつぶれば、あの日のことが昨日のことのように思い出せれるというのに。

だけでも、あの頃10代の少女だったノエルも、今では20代半ば過ぎの一人の女。

その彼女が、慰霊碑を背に向け、とある方向へと視線をむける。

ここからじゃ決して見えるはずの無い場所。

彼の終焉の地、レムの塔。

「ルークさん……」

今思えば、あれは恋とはいえなかったかもしれない。
なのに、今でもこうして彼の姿を捜してしまう。

どこにも居る筈はないのに。

だって彼は死んでしまった。

……違う。私達が殺したのだ！

世界が障気に覆われた時、彼を【使って】世界から障気を打ち消した。

追い詰められ、生きる気力を失わせていた彼を死に追いやったのだ。

やめて……

いけないで……

そう言えたらどれだけ良かったのだろうか？

でも、その言葉は決して言っていない言葉ではなかった。

そうしなければ、世界は、人は、被験者は

滅んでいたかもしれなかったから………

でも、それは本当……？

ただ自分達が死にたくなかっただけじゃないの？

会いたい。彼に会いたい。

会って、そして謝りたい。

ノエルの切なげな姿は、天に浮かぶ音符帯だけが見ていた。

ルークの新しい世界で 異伝 季節外れのノエル

何かと呼ばれるようにして外へ出ると、空には大きな三日月が碧く
光り輝いていた。

その碧い月の光りに照らされた何かが、ふわふわと風によってルー
クの目の前を通り過ぎた。

「雪………?」

もう春だというのに、空からキラキラ光り舞い落ちる白い結晶。

なんだ……？

ルークはその結晶に、なぜ心が逸る。

何かに急かされるようにルークは手を伸ばすと、周囲の景色が急に変わった。

麻帆良からなら何処にいようと見えるはずの世界樹がなく、代わりに天に浮かぶ音符帯。

「へっ？ まさか、オールドドラント!？」

そして目の前には、今にも泣きそうな一人の見知らぬ女性。

……いいや、知っている。

彼女は、「ノエルっ!？」だ。

あの頃つけてたゴーグルはなく、短かった髪も肩を超えるほど。

その彼女が目の前にいる。

ただひとり、ルークをレプリカルークではなく、ルークとして【だけ】見てくれた彼女が！

「ルーク……さん？ ルークさん！」

そんな彼女の声が、ルークの鼓膜を震わせる。

これが夢ではないのだと。

これは現実なのだとはつきり。

なんで俺がオールドラントに……

胸から焦がす恐怖に似た何かを振り払い、ルークはノエルの体温を感じていた。

ノエルは涙がこぼれ落ちるのも気にせずに、ルークの胸に飛び込んだ。

……暖かい。生きている。夢じゃない！

「ルークさん、ルークさん、ルークさん……！」

泣いて泣いて泣いて……泣きながら彼の名を呼び続けた。

彼の体温と匂いに包まれながら、いっぱい泣いて……

そうして彼に抱きついたまま、ようやく顔を上げた。

初めて会った頃と同じ朝焼け色の髪。

十年前と同じ……ううん、違う。

あの頃よりも、どことなく大人びて……

震える手を、彼の顔に伸ばす。

夢じゃないんだと、目の前の彼は本物なんだと、彼が消えてしまわないようにと。

「おかえりなさい、ルークさん……」

そう言うと、ちょっと困った風にしながら、コクンと頷き、

「ただいま……でいいのかな？」

笑ってくれた。

その笑みに、最期にアナタが儚く微笑んで消えていったことを思い出す。

まったく違う。まったく真逆の生気に溢れたその笑みに。伸ばした手が、微笑む彼の頬にふれた。

……暖かい。すごく、すごく！

「ああ……」

もう一度、涙があふれ出した。

この十年。片時だって忘れなかったアナタがココにいるのだと。なんでココにアナタがいるのか分からない。

でも、この奇跡をノエルは心から嬉しく思う。

込み上げる熱情のまま、ノエルは爪先立ちになってルークの唇に唇を重ねた。

大きく目を見開いて硬直する彼を、可愛いなんて思いながら。

「そっか……こっちでも十年なんだな」

「それにしても驚きました。だってルークさん、あの頃と姿が変わってないんですもん」

「ははは、まあ、俺は実年齢から成長やり直したっばいからなー」

「……やっぱり変わってました」

「そっか？」

「はい。あの頃よりも、ずっと素敵です」

彼は驚いたように目をパチクリさせた後、嬉しそうに、

「だとしたらさ、それはアスナ達のおかげだな」

そう言っただけで笑ってみせた。

さっき聞いた彼の十年。

その十年の中で何度も出てきた女性の名前。

ノエルは胸が痛むのと同時に、彼の傍にそんな女性がいてくれたことを喜んだ。

……自分には出来なかったことだ。

ただ否定し、押さえつけ、強要する人たちの中にいて、それに同調はしなかったが結局は同じ穴の貉だ。

彼が死に逝こうとするのを止めなかったのだから。

でも……

「あとさ、ノエルも……そのなんて言うかよ、あの頃より、ずっと美人だぜ？」

恥ずかしそうにそっぽ向くルークに、ノエルもまた、恥ずかしそうに顔を俯かせた。

20代半ば過ぎ、四捨五入したら優に30になるのに、私ったら……

10代の乙女のような反応をしてしまった自分が（とは言っても乙女】であるのだが）、少し情けない。

「もう、ルークさんたら……」

そう言って、大人の余裕を見せようと、ちょっとだけ無理して彼の腕にまとわりつく。

きっと彼は顔を真っ赤にするだろう。

ノエルは自分の胸をグイグイ押しつけながらそう思った。でも、違った。

彼は結構余裕有り気だ。

……なんだか情けない気持ちじゃ溢れ、切ない思いでルークを見ていると、彼はジッと空を見上げたまま身動き一つとらない。

どうしたんだろう？

そう思って問いかけようとすると、「マジ……？」と困惑した表情を浮かべるルーク。

「どうかしたんですか？」

「ああ、なんだって急にこっちの世界に来たのかと思ったら、ローレイの仕業だったみたいだよ。久しぶりに頭ん中かき混ぜられるような痛みがしたぜ」

「……ローレイ？」

そうローレライ。

第7音素集合体は、もうこのオールドドラントから離れてしまったはず。

今はもう、あの天空高く音符帯にのみ存在していて、地上に残されているのも、今では大分薄くなってきていた。

そのローレライが、どうして？

ノエルの疑問に、ルークは、

「あんがとな、ノエル。俺のこと、ずっと思ってくれていてよ」

「えっ？」

「オレさ、今はすんげー幸せなんだぜ？ だからよ、そんなに自分を責めんな」

穏やかな声だ。

あの頃の彼には、こんな穏やかな声は出せなかった。

全ての罪を背負わされ、傷つき、追い詰められ、死を強要された彼には。

「ってかノエルがなんで罪悪感を感じなきゃなんねーんだよ？」

それは、そう……

「好きだから。アナタが、好きだからですよ、ルークさん」

もう一度、唇を押し付けた。

……彼と触れる唇が、とても熱い。

彼の背中に腕を回し、絶対に離れるものかと力を入れる。
擦れ合う布のガサガサとした音が、とても淫靡に聞こえた。

唇がはなれる。

名残惜しそうに、その離れた唇を見ていると、少し困った彼の顔。

「アツチに待ってる奴らがいる。だから、オレ……」

複数形？

と疑問に思ったけれど、ノエルは「いいんです」と静かにそう言う。

だって、もう歩けない。

このままじゃ、前を見て歩けない！

ノエルの中で、ルーク・フォン・ファブレの物語がキチンと終わらないと、歩けない……

ノエルは上着の裾に手をかけると、「私、この年になっても初めてなんですよ？」そう笑いながら、困惑するルークを横目に次から次へと服を脱ぎ捨てていった。

彼はきつと初めてなんかじゃないんだろう。

キスに慣れてたし、女の身体にも慣れていた。

でも、「と、途中までは何回かあるけど、俺も初めてだかな！」

そう言って覆いかぶさってくる。

そして、2人は一つになった。

舌で舐め合うのも、胸を弄られるのも、下半身の強烈な痛みも、全部が全部幸福の証だった。

彼の激しい鼓動を全身で感じながら、ノエルは思うのだ。

もう、後ろを見るのはやめよう。

彼が生きていた。彼が幸せになっていた。

これだけで十分ですよね。

そう、思った。

だって、彼のマグマのような精のほとばしりを体奥に浴びながら、

「初めてがノエルでよかった」なんて言われたんだもの。

嬉しくて、嬉しくて。

何かを、彼の中に残せたのなら、それだけで。

彼と一緒にいられなくても、きっと彼の中にずっと残る。
彼の、永遠になれた……

だから、

「私も、ルークさんでよかった……」

そう言って微笑んだら、力を失って小さくなっていった彼が、再び中で大きくなって……

「えっと、まだ時間あるみたいだから……その、さ……」

「キス、して欲しいです」

「お、おう……」

「好き、って言って欲しいです」

「ああ」

「時間いっぱい、愛してください。今だけは、私だけを見ていてください」

次の瞬間、内臓がめくられる様な感触に嬌声を上げた。

最奥を何度も小突かれ、粘る水音を周囲に響かせる。

だらしなく舌を突き出し喘ぎながら、ノエルは空を見る。

空が夕焼けに染まる。

まるで彼の髪の色のような鮮やかな。

空が暗闇に染まった。

まるで彼がいなかった頃の私の心のような。

空が白ずみ、朝焼けに染まった。

まるで彼の髪のように……

「ルークさん！ ルークさん！ ルークさんっ！」

「ノエル！ ノエル！ ノエルノエルノエルノエルツッ！」

名前を呼び合う。

彼の名前を叫ぶたび、彼に名前を叫ばれるたび、私は、彼は、熱く、熱く、どこまでも熱く……

何度も達し、何度も彼を浴びせられ。

意識が白ずむ。

でも、意識を失いたくはない。失う訳にはいかない。

だって、こんなにも。

うふふ……と笑う。

「どっした？」

「ううん、なんでもないです」

そう言っつて、もう一度、うふふと笑う。

やっぱり好きです、なんて思っていると、彼の身体が薄れてきた。

「時間、か……」

咳く彼に、いかないで……！

そう言いたい気持ちをグツと抑えた。

今度は一滴足りともこぼさない。

そんな気持ちですがりつく。

両腕を、両足を、ガシッと彼の身体に巻きつかせれば、もしかしたらこのまま一緒に、彼の新しい世界にいけるかも、なんて思っ……

でも、

「幸せに……」

お腹の奥で熱い迸りを受けながら。

「はいつ。ルークさんもっ！」

泣きながらの最後の言葉。

「俺は大丈夫。みんながいる、か……ら……ノエル、じゃあな……」

そして、彼は消えてしまった。

太ももを伝う血の一筋と、大量の白濁した液体。

私の中に、沢山の彼の証と、沢山の言葉を残して。

脱ぎ捨てた服を拾い集め、身なりを整える。

頬を伝う涙をぬぐうこともせず、嗚咽がもれるのも気にせずに。

歩く。歩く。歩く。

街の入り口近くに着くと、心配そうにウロウロしている街の住民が見えた。

慌てて涙をぬぐい、彼らの下へと駆けだした。

それより一年ほどの時が流れる。

ノエルはもう一人ではなかった。

愛する者が出来た。

大切な、大切な存在だ。

彼の事は忘れられないけれど、彼以上に大切なんだと胸をはって言える。

だって、

「ノエルー。ルーちゃんは元気かい？」

「はい！ 今日もいっぱいお乳を飲んで……」

ノエルの腕の中には、キムラスカの証を持った赤ん坊。

見る人が見ればすぐに分かる。

この子は、彼にそっくりだと。

現実的に考えれば、この子は現キムラスカ王であるアッシュの子だろう。

だけでも、この街の住人は、誰一人としてそうは思わなかった。

「奇跡って、起きる時は起きるもんなんですよ。ねー、ルーくん」

私は、もう一人じゃない。

だから私は幸せですよ。

そう天空高い、音符帯にむけて……

もう、彼女はレムの塔の方向を見たりはしなかった。

きつと、あの音符帯の向こうのどこかの世界で、彼は今も幸せに生きているのだろうから。

さっきまで、確かに彼女を抱いていた。
リアルな感触が、今も残っている。
でも、ここはアノ世界じゃない。

空を見上げた。

天空高くあつた音符帯は、ない。

その事実には、顔を苦く歪めた。

ローレライ。ルークをアッシュの予備としかみなかった超越存在、
第7音素集合体。

恨みに恨み、果てしなく憎く思ったあの存在。
きっとそれは逆恨み。

でも、ルークは思ってしまう。

奴がいなければ、自分はヴァン師匠に操られたりはしなかったかも
しれない。

奴が余計なことさえしなければ。

奴がはつきりと自分に危険を告げてくれたなら。

アッシュに渡した鍵のように、自分にも宝珠をくれたなら。

だから思う。

あの存在が大事に思っていたのは、オリジナルのルークだけだった
のだと。

でも、もういい。

ルークは苦く歪めた顔を緩める。

ノエルを救ってくれた。彼女に最後の別れを言わせてくれた。
だから、もういい。

キラキラ光り、舞い落ちる結晶。
ルークは再び手を伸ばす。
もしかしたら、もう一度彼女と会えるかもしれない。
そう思っ

て。
白い結晶を掴む。

手の中で、ジワリとすぐに溶けて消えてしまった。

「季節外れの雪か……」

これがクリスマスだったら良かったのに。
去年のクリスマスは雪が降らなかったからな……

クリスマス……

ノエル……

「ルークっ！」

「せんぱーい！」
「お兄さまー！」

ルークに会いに来た彼女達の声に、我に返った。

「なんかあったの？」

そう聞いてくる彼女に、ルークはもう一度空を眺め……

「なんでもねーよ。ただ、季節外れのノエルだったただけだ」

「はあ？ なに訳わかんないことってんだか」

「……そんなに格好つけなくても、私は先輩が大好きですー」

「お兄さま？ 似合わないことはよした方が……」

「……お・ま・え・らあーっ！」

没した旧バージョン（前書き）

どうにも新話の執筆に取り掛かれません。

そんな訳で、時間稼ぎ……げふんげふん、もとい、おまけで

ルークの新しい世界で

に、なる前の話。完全に没した旧バージョンのプロローグを投下させて頂きます。

新話は……3月10日までは必ず……投下出来たらいいよね？

では、『ねぎるくくん』と題名付けられ、そのまま某所で投下後削除された作品を、暇つぶしにでもご覧下さい。

没した旧バージョン

一体何の為に生まれてきたのだろうか？

レプリカと呼ばれる存在として、心無い者達からは蔑まされ、それでも世界の為に、友の為に、愛する人の為に走り抜けた、たった8年の彼の生涯。

なのに、彼と言う存在の全ては、彼のオリジナルに全てを奪われ……彼に全てを奪われたのだと言うオリジナルに、命も、身体も……自分の全てを奪い尽くされたのは何の皮肉か？

でも、彼自身が生き抜いた証、記憶。

魂に刻み込まれた記憶だけは、誰にも渡さない。渡すわけにはいかない。

例え、それがどんなに辛く凄惨な記憶だとしても。

仲間達との絆、小さな幸福、そして、拭い去れない罪。

騙され、操られ、超振動により一つの街を滅ぼした罪の記憶。

世界を覆う瘴気を晴らす為に、同胞たる1万のレプリカを生贄に捧げた罪の記憶。

そんな罪に塗れた記憶でも、決して誰にも渡さない。

これだけが、レプリカであるルーク・フォン・ファブレの生きた証なのだ！

だから決して奪わせはしないと、駄々を捏ねる子供のように癩癩をあげる。

「安心しろルーク。お前の記憶はお前だけのものだ。それにな、例え誰が忘れても、俺だけはお前を忘れない。だから安心して輪廻に還れ。そして、遠い遠い、いつかの明日で、また、会おう」

幼い子供みたいな魂は、その言葉を聞いて緊張を解いた。ゆっくりと、全身から力が抜けて行く。

オールドラントでの生を否定され尽した彼が逝く先は、まったく別の異世界。

そこで幸せになれと、彼を最も憎んだ男は思う。

そうして自分が犯してしまった罪も、彼が犯してしまった罪も、全部を背負って彼は彼の仲間が待つ世界へと帰るのだ。

レプリカのルークと、アッシュであったオリジナルのルーク、双方を併せ持つ存在として、あの醜くも美しい世界に、還るのだ。

「また、な……」

最も憎んだからこそ、今では最も彼を理解する。
全てを理解した彼は、もう彼を憎むなんて出来やしなかった。
オールドドラントで苦しみの生を送るよりも、まったく新しい世界で
幸せになつて欲しい。

偽りの絆なんて捨てちまつて、新しい本当の絆を作つて欲しい。

『ルーク・フォン・ファブレ』は、幼い彼の分身が輪廻の輪に入る
のを見届けると、ローレライの力を借りて、元の世界へと降り立つ。
彼ではないルークを待つ、彼だけの仲間の下に。
セレニアの花咲く中で、彼はルークの仲間達に向つて手を上げた。

「待たせたな」

そして、空を見上げた。
青い、蒼い、どこまでも青く。
遠く音符帯の向こう、更なる向こうの遠く。

世界を超え、新たなる生を受けたもう一人のルークに向つて、もう
一度……

「じゃあ……な……」

そうして一つの物語が終わりを告げ、新しい物語が始まる。

炎に包まれている村を見下ろす少年が居た。

少年の名は、ネギ・スプリングフィールド。

思わず見惚れてしまう紅、それが毛先に近づく程に金色になっていく美しい髪を持つ少年だ。

その少年が、呆然と自らが住まう村を見やっていた。
そして不安に襲われる。

行かなきゃ、行かなきゃ、行かなきゃ……

まだ3歳になったばかりの少年は、炎の村を目指して駆け出した。

「ネカネお姉ちゃん、どこーっ！」

少年にとって、最も身近な存在。

父も、母も、どちらも居ない少年にとって、最も大切な家族。その家族を求めて、少年は燃え盛る家々を潜り抜ける。

そして、少年は見てしまった。

石になってしまった村の住人達を。

小さな村である。

当然、ソコに住まう者達とは、みんな顔見知りで……

その周囲を囲うように見た事もない沢山の化け物の群れ。

その中でも一際大きな化け物が、少年に対し、手を振り上げた。

目の前に迫り来る大きな拳が、何故だか酷くゆっくり見えたのだけれど、でも少年は身動き一つ取れやしない。

まだ、たったの3歳の少年が、何が出来ようものか……？

このままでは確実に訪れる死。

身体がガクガク震える。

死にたくない……死にたくない……死にたく、ない……！

少年の内側に、魔力とも気とも違う力が高まり、でも、所詮はただの3歳児。

何も出来ず、ただ、震えるだけ……

そして、少年の全身を覆うような大きな拳が、遂に少年にブチ当る瞬間！

バシイイイインツッ！！！！

その拳を弾く大きな結界。

「ギリギリ間に合ったわい」

化け物の拳を結界で弾き返したのは一人の老人。
英雄と呼ばれる少年の父親を、ただ一人罵り続ける少年にとって少し苦手な人だ。

老人はネギが無事なのを確認すると、安堵の吐息をこぼす。

「どんなことがあっても、お前を守る。それが死んだあのバカへの、ワシの誓いなんじゃ」

ニツと笑うその姿は、とても老人とは思えないほどに若々しくも感慨に溢れ。

「スタンおじいちゃん！」

「さあ、ぼーず！ 見とれよ！ これが、ワシの魔法じゃっ！！」

スタンは手に持つ杖を化け物に突きつけると、詠唱を始めた。

それはネギが初めて耳にする魔法の呪文。

だが、その呪文が完成するまで、化け物どもが攻撃の手を休めるなんて事がある筈もなく。

スタンとネギ。2人に対して一斉に襲い掛かった！

恐怖するネギ。それでも泰然と詠唱を続けるスタン。

それもその筈。老人は奴らの攻撃が自分たちに届かない事を知っているのだから。

そう！ 2人の前に立つ少女。

ネギの姉的存在を自認するネカネ・スプリングフィールドが居るからだ。

少女には化け物を倒せるような力はない。

だけでも、スタンが詠唱を終えるまでの時間稼ぎ位なら、平然とやっつてのける自信があり、そしてそれは事実なのである。

攻撃をいなし、かわし、反らし、牽制する。

クルクルと踊るように化け物を翻弄する姿は、まだ3歳のネギから見ても、とても美しく軽やかで。

「きれい……」

その眩きを、耳ざとく聞いたネカネは、嬉しそうに笑った。弟に褒められるなんて、とっても嬉しかったから。

そして、遂にスタンの魔法が完成した。

杖の先からほとばしる炎。

それが、力有る最後の言葉で、破裂する！

「燃える天空！！！」
ウーラニア・フロゴシス

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオ

！！！！

言葉通り、大空を燃やし尽くす程の炎。

その炎に焼き尽くされて消滅していく化け物の群れ……

「スタンおじいちゃん、すっい……」

幼い少年の憧れがこもった称賛の眩きに、だがしかし、スタンは顔をしかめたままだ。

「そんなコトよりも、さっさと逃げるんじゃないぞ」

スタンは焦っていた。

自分の最大最強の魔法でも、焼き尽くせなかった魔物が数体。
アレで倒せなければ、自分では無理だ。

第一、この村の住人が集まれば、軍隊の一個大隊にだって負ける要素はない。

なのにこの体たらく。

爵位クラスの魔族が何体も召還されている証拠だ。

そして、それはもう目の前に存在していた。

「それはチト困る。私に与えられた任務は、その少年に関わりがあるのでねえ」

まるで卵の輪郭の様な顔にヤギの角。

その魔族から放たれる暗く禍々しいオーラ。
間違いなく爵位級の悪魔である。

スタンとネカネの背に、冷たい汗が流れた。

これは、勝てない……

そう思った瞬間、悪魔の口が、ガパツと開く。

その開いた口から放たれる閃光！

ネギと魔族の間に身体を割り込ませ、何とか彼を閃光から守る。

だが、その代償は軽くはない。

徐々に石化していく身体を見て、スタンは取って置きの切り札を使

おうと決意する。

しかし、

「ネカネお姉ちゃん！スタンおじいちゃん！」

ネギから感じる凄まじいプレッシャーに、動きを止めてしまった。それは戦場において致命的な隙。

だけでも、悪魔もまた、同じように動きを止めていた。

ネギの内側から溢れ出す未知の力に、興奮し、目を輝かせていたから。

「ふははははは！ いいね、実に素晴らしい！！ これがサウザンド・マスターの息子の秘められた力かッ！！」

「あ…… あああ…… あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ
あ
」

ネギの絶叫と共に、全てが光に覆い尽くされた。

それは超振動と呼ばれる力。

ネギの前世であるレプリカルークが持っていた力である。

その日、天を貫く光の柱が、ネギの村から観測された。
急ぎ派遣された調査団が見つけたのは、クレーター状になって全て
が滅び去った村の跡。

そしてそのクレーターを中心に居た、焦点の合わない瞳で空を見上
げ続ける3歳の少年。

英雄の息子、ネギ・スプリングフィールド。

前世の凄惨な記憶を思い出し、前世以上に辛い罪を背負う事になっ
た少年。

「また……ぼく……は……いや、俺、か……？」

光ない瞳に映るのは、ただ絶望の二文字だけだった。

没した旧バージョン（後書き）

評判が悪かった上に、感想欄に意味不明な輩が出没してしまったことで削除に至った問題作。

この後の展開予定はと言うと……

一部の良識のある大人以外から総スカンされるルーク……もといネギの物語。

原作と違い、自分を庇護してくれる存在であったネカネはすでに亡く、アーニャからは両親の仇として恨まれ、他の正義病に掛かった大人たちからは迫害される。

そんな劣悪な環境から切り離すため、マホラに送られたネギは、学園長やタカミチ等から優しく包まれ……

だがしかし、高音等の魔法生徒の一部がネギを……

な、少し鬱気味な話を展開する予定でした。

メインヒロインに雪広あやかと那波千鶴。

サブヒロインに u y r y a m a お馴染みの神楽坂明日菜と近衛木乃香。

嫌な人役に高音・D・グッドマン。

隠しヒロインにアーニャ。

中ボス役に（偽）ネカネ。

ラスボスに、ティア・グランツ。

こんな感じで始まる、理不尽や差別、贖罪に死に逝く心をテーマにした物語……になる予定だったw

第11話 戦いの前に

なんだってこんなメンド臭いことしなきゃならないんだっ。

内心でそう罵るシンクは、原因である学園長が写し身ゴにしている石像レムをガンと蹴っ飛ばす。

だがしかし、蹴られた学園長は衝撃が伝わっている筈だっというのに、フオフオフオツと呑気に笑うだけ。

シンクとて、全力で蹴った訳ではないのだが、それでも可也の衝撃ではあったはずなのに。

まったく、なんなんだよ、このジジイは……っ！

学園長は、そんなシンクの苛立たしげな様子に苦笑い。

正直、蹴られた部分はかなり痛い。

でも、そんな様子をチラリとも見せず、

「ほれ、予定通り接触したようじゃぞ？」そう言って作戦開始の合図を送った。

やなことだ！ と言いたいシンクではあったが、仕方ない。これも

義父さんのためだ……

心の中でハアッと大きくため息を吐くと、顔の上半分を覆い隠すバ
イザーを装着し、準備に取り掛かった。

「シンク君、分かっとなるな？」

「分かってるよ！ レプ……ルーク・フォン・ファブレの相手をする
ればいいんだろっ」

レプ……？

何事かを言いかけたその部分が気にはなるものの、

「では、任せたぞい」

まあ、ええわい。と【彼ら】のいる地底図書室へと向かった。

学園長の目的……

それは、英雄の息子にして【立派な魔法使い】見習いであるネギ・
スプリングフィールドへ試験を課すこと。

ついでに魔法先生であるガンドルフイーニの養子であり、新年度か
ら魔法生徒に名を連ねるこの双子の少年の片割れ、シンクの腕試し
である。

前者は、まあ問題あるまい。

ネギに課せられた課題【期末試験での2 - A最下位脱出】は、一見

難しそうにも思えるが、その実簡単だったりする。

なにせあのクラスの下位成績保持者は、頭が悪い訳でなく単にやる気がないだけなのだ。

特に成績順位が最低ランクの者にそれが言える。

だからホンの少し。

そう、ホンの少しだけでいい。

彼女達がやる気を出して勉強するだけで、テストのクラス平均点は跳ね上がるだろう。

まあ、彼女達をその気にさせられなかったタカミチを思えば、やっぱり少し心配ではあるけれど。

それでも大丈夫だろうと、学園長は信じている。

そして、腕試しの方もさほど心配はしていなかった。

あのシンクと言う名の少年は、普段の態度や言動とは裏腹に、実に品行方正だ。

養父であるガンドルフィーニの薫陶が篤いのが良く分かる。

実力も、その湧き上がるような魔力の高さに、鍛えられた肉体。

見かけというか、その幼い容姿から想像が出来ない程に高い実力の持ち主である。

腕試しなどとは言ってはいるが、これからその相手を務める麻帆良学園魔法生徒の中でも最強を誇るルーク・フォン・ファブレなどよりも、実力は上かもしれない。

ようするに、これから行われるだろうシンクとルークの戦いは、他の魔法生徒達にシンクの実力を分からせる為の儀式にしかすぎないのだ。

……巻き込まれるルークにとってみたら、本当に迷惑以外の何物で

もないだろつに。

麻帆良学園都市、図書館島

その深部にある地底図書室の生活区域に、ルーク達はいた。

「えへへ。もつとくつついてもいい？」

「ちよっ！？ みんな見てんだから少しはなれろっつーの！」

「やーだもーん」

ふにゃふにゃ幸せそうに笑ってルークにべったべたに甘えてるのは、アスナである。

白皙のような肌をハッピーピンクに染め上げて、目元はへにゃっと垂れっぱなし。

常でない甘えっぷりだ。

もう、これ以上はないって言うてもいいぐらい。

アスナと共にこの地底図書室に来た面々も、そんなアスナの様子に驚いた。

そう、普段のアスナはと言えば、人見知りが激しく、ツンとした態度に冷たい視線。

彼女がその冷たい表情を崩す相手は、近衛木乃香か雪代あやか。

それに最近では宮崎のどかが加わった程度である。

そんな彼女がネギの付き添いとは言え、今回の魔本奪取作戦に参加したこと自体が驚愕だ。

そんなアスナが、である。

ついさっきまで男と裸で抱き合いながらキスをした！

しかも今現在、服を着てはいるが、やっぱり恐ろしい程のバカッブルぶり見せつけて！

……もしかして、別人なのではないだろうか？

クラスメイトではあるものの、アスナのことを余り知らない佐々木まき絵や古菲。

それに同居人のネギ・スプリングフィールドは密かにそう思った。

まあ、軽い現実逃避かもしれない。

特に、佐々木まき絵は。

自分でも知らない内に、陰りのある表情を浮かべてしまっていたまき絵は、その気持ちが良く分かる少女の、暖かい手の感触にハッと

我に返った。

「ゆえちゃん……?」

どうしたんだろう?

まき絵は、自分がどんな状態なのか分かっていない。いいや、【おんなじ】である彼女以外には分からないのかもしれない。

「いいえ、なんでもないのでよ? まき絵さん」

なんでもない。

そう言っている筈の彼女の顔は、とても優しく穏やかで。どうしてなのか分からない。

でも、まき絵も、「えへへ……」と夕映に穏やかに笑って見せた。そうして2人仲良くルークとアスナの仲睦ましい様子を眺め見る。夕映にとつて、少しだけ辛い光景。

まき絵にとつて、初めて感じる胸のモヤモヤを増す光景。なのに、繋がった手の暖かさのおかげなのだろう。むしろ、穏やかな気持ちで見えられた。

そんな2人の様子に、チツと内心で舌打ちするアスナ。彼女のこのあからさまなバカツプルの行為は、夕映とまき絵への牽制だったのだ。

今でも愛衣やのどかなんてお邪魔虫がいるっていうのに、これ以上増えたらたまったもんじゃない。

まあ、そこらの有象無象な女共なら放っておいても安心ではある。あれでルークは人を良く見る。

その目に叶わない者は、決して心を許したりはしない。

許さないから、愛衣とのどか以外の女との関係を、アッサリとお断りしてきたのだ。

でも、夕映は危険だ。

あの娘はルークにとって仲の好い部活の後輩にして、のどかの親友でもある。

もしも彼女がのどかに、

私もルーク先輩が好きなのですよ……

などと言ってみようものなら、あの優しい彼女のことだ。

既に自分も含めて3人でお付き合いしているのだという事実もある。間違いなく、夕映をルークに薦めるだろう。

なんてことになってみる！

ルークのことだ。

簡単に受け入れはしないと信じたいが、流されるまま夕映を恋人の一人に加えてしまう可能性が結構高い。

ふ・ざ・け・る・なっ！

納得してルークの3股を許してはいるが、この日本という国は一夫一妻。
いずれ3人の内の2人はフラレル運命。

……愛人、つて形でいつまでも傍にいやがる可能性はあるけども。

それはともかく、最終的な勝者が自分だって自信がアスナにはあった。
た。

あつたけど、敵は少ない方がいいに決まっている。
だからこうやってルークに甘え、2人のラブっぷりを夕映とまき絵に見せつければ、もう自分が入る隙間などないのだと諦めるだろう。そうして諦め、さっさと別の男でも見つければいい。

ほら、丁度いい存在が、すぐそこにいる。
ネギ・スプリングフィールド。

未来の立派な魔法使い候補である少年だ。
容姿も、頭脳も、その全てが将来性抜群のお買い得品なネギに気持ちに移した方が、きっと幸せになれるわよ？

アスナはルークに甘えたまま、凄絶に笑った。

そう、この男は、私のモノなのだから……

一方、ルークはアスナの気持ちまでは察せない。
察せはしないが、自分への想いから来ている行動なのだろうと分かっ
つてはいた。

分かってはいたが、正直うぜえ。

2人きりならともかく、こんな人前でベタベタするんじゃないかと。だからやや乱暴にアスナを引っぱがし、コホンとワザとらしく咳をして、

「とりあえずよ、自己紹介しないか？俺はルーク・フォン・ファブレ。麻帆良学園男子高等部の2年だ」

話を換えようと自己紹介を始めた。

ルークの恋人であるアスナと、幼馴染である木乃香。

部活の後輩である夕映なんかは、手をひらひら振って笑みを浮かべた。

それらを順繰り見つつ、最後に赤毛の少年へ視線を送る。

コイツがネギか……

ルークは、ネギやまき絵達の自己紹介を聞きながら顔を綻ばせた。

ネギの父、ナギ・スプリングフィールドは、ルークとアスナにとつて恩人である。

ああ、うん。外見はそっくりだな……でも中身は正反対か？

ナギはその特徴的な赤い髪の色と同じに、熱く燃える太陽みたいな男だ。

でも、目の前のネギは、どちらかと言えばルークと同じサイドの人間だろう。

楽しそうに見せてはいても、心の内はドロドロとした何かに埋め尽くされて……

「ルークっ！」

アスナの声に、ハッと我に返った。

「あ、ああ、大丈夫だ。サンキュ、アスナ……」

捨てきれない、暗い何かを吐き出しながら、自分にとっての光りであるアスナに体重を預ける。

さつき乱暴に押し退けておきながら……

木乃香はともかく、ネギなんかはそう思い、軽く義憤に駆られたものの、そのアスナの醸し出す雰囲気は何も言えなくなった。

「ルークったら、私がいないと本当にダメなんだから……」

彼女が、優しい、母性の塊の様な表情で微笑んでいるのだ。

……ところで、子供のネギや、この2人のイチャイチャに慣れてしまっている木乃香はともかく、それ以外。

ルークに想いを寄せる夕映や、まだ幼い気持ちなれど想いを芽吹かせつつあるまき絵。

普段が武術一辺倒の粗忍者だとは言え、やはり年頃の女の子である長瀬楓や古菲。

彼女達にとつてみたら、自己紹介していたと思つたら、突然目の前でイチャつかれたでござるよ。
何を言っているのか分からないかも知れないでござるうが、私達にもさっぱり分からないでござる。

まあ、自己紹介の前にもイチャついてはいた。いたのだが……

彼女達も14才。思春期真っ只中の中学生。

こつも目の前で何度もイチャつかれたら、こつ、何とも言えない気分になるものだ。

だというのに、2人のイチャつき様はエスカレートするばかり。

木乃香なんかは、頬に手をあて、「いや〜んっ」と実に楽しそうに見物……もとい見守っているが、他の面々からしたらたまつたモンじゃない。

なんせ、2人のイチャイチャは、本つつ当にっハンパなかつたのである！

戸惑う彼女達の視線を殊更無視するアスナは、ルークの頭を抱き寄せると、自分の膝の上にポスンとのせた。突然の膝枕に、ルークは一瞬だけ抵抗しようとするけれど、スグに体から力を抜いて身を完全に預ける。柔らかい太ももの感触と、自分の頭を優しく撫でる手のひらの感触。気持ちよさげに目を細めるルークは、手を伸ばしてアスナの頬に触れた。

「なぐに、ルーク？」

「いや、なんでもねえよ」

2人の間に流れる優しい空気。

アスナの頬を撫でるルークの指先が、滑るように唇へと近づいていく。

そして人差し指が唇に触れるなり、アスナはその指をかぷつと啜えて、甘噛みしながら指先を舌の先端でちろちろ舐めはじめた。

「ア、アスナ……っ」

恥ずかしそうに声を上げるルークに、アスナは、フッフ、と艶やかに笑う。

先程ルークに撫でられた頬はすっかり熱を帯び、赤らんだ表情はドキリとするくらい愛らしく、それでいて色香があった。

そんな色香のある笑みを湛えながら、舌で指を口外へと押し出した。続いて唾液に濡れたその指を流れるように手に取ると、自らのうなじに這わせ始める。

「んう……」

ふるふる……と細かく身体を震わせるアスナの唇から漏れ出た甘い吐息は、聞く者の淫心を誘う。

「好きよ、ルーク……」

もう、何度そう言ったろう？

でも、何度言っても言いたらない。

「大好き……」

もう一度そう言った瞬間、ふるふる細かく震えていたアスナの身体が、ビクビクンツ！と大きく跳ねた。

「あっ……はぁ……」

ルークの手をしっかりと握り、背を弓なりに仰け反らせ、ビクビク、ビクビク、ビクビク、ビクビク、ビクン……
数回痙攣を繰り返した後、口を大きく開けて淫熱の籠もった息を吐き出し、涙が零れる寸前まで瞳に涙を湛える。

もう、失いたくはない。

大切な人を、奪われたくはない。

のどかにも、愛衣にも、他の誰にも、奪われたくはない。

アスナは、視線を一瞬だけ夕映やまき絵に向けると、

「ルーク、愛してる……」

言葉にたっぷりと想いを込めた。

ルークも、そんなアスナに答える。

「俺も、愛してる。アスナ……」

アスナは、その言葉に感極まった。

「んっ!? んううう……ん、ん……ッ! は、はぁっ、はっ
っ、はぁっ、はぁ……」

歡喜に身体を打ち震わせると、荒く激しく息を吐き出す。
身体の小刻みな痙攣が止まりそうにない。
下着が、じゅん、と濡れていくのが、アスナには分かった……

「ゆ、ゆえちゃん……」

「……なんですか？ まき絵さん」

「い、いまさ、アスナ絶頂ったよね？」

「ええ、絶頂さいていしましたね。と言いますか、今もイいまってるんじゃないでしょうか？」

「あ、あはは、凄い、ね……？」

「そう、ですね……」

独り身な少女達の心に凄まじいまでのダメージっ！
しかもルークへの恋心を自覚している夕映と、まだ自覚はしていないものの、淡く想い始めているまき絵には致命傷だと言えよう。

だがアスナはともかく、ルークは心に傷を負わされた2人に気づきもしない。

そんな朴念仁なルークの様子に満足したアスナは、

「「」褒美ね？」

とルークの手を自らの胸元に引き寄せた。

「あん……………」

アスナの悩ましい声と、手のひらに感じる柔らかな感触が、ルークの煩惱を揺さぶった。

マジいな……………」

そう思うと同時に、そう思えるのがとても嬉しい。
なんせつい数時間前には、そう思えることさえ出来なかったのだ。

だから、その感覚よ、もっと……………！

とばかりに、ルークはたわわに実ったアスナの乳房を鷲掴む。
指が容易く埋まるほど柔らかいのに、張りと弾力が凄まじい。
まさに極上の感触である。

だからルークは夢中になってアスナの胸を揉みしだく。

「ん……………イ……………ッ！」

アスナは見悶えながら、小さく嬌声を上げ始めた。

そんなアスナの痴態に、ルークはゴクリと生唾を飲む。

快感に惚けたアスナの表情が、あまりに淫らで、下半身が熱く疼くのだ。

そしてアスナもルークと同じように、身体が熱くて仕方ない。

「る、るう……く、わた、し……、もう……」

「あす、な……」

2人の物理的な距離が、ぐんぐん近づいてくる。

互いに唇をほんのり開き、そして……

「あの、おふたりとも、いい加減にしてくれませんか……
……」

「ホントだよ……っ！」

涙目で抗議する2人に、ルークはハッと周囲を見渡した。

……わくわくしながらかぶりつきでルークとアスナを見ている木乃香。

顔を真っ赤にして、どこか非難めいた視線を向けてくる長瀬楓と古菲。

そして、許容限界を超えたのだろう。

プンスカ怒っている夕映と、それ以上に怒っているまき絵。

ちなみにネギは、「仲いいんですね〜」などと随分と呑気なことを言っている。

ルークは、やっちまった……そう反省しながらも、EDが完全に治ったのだと心から安堵していた。

だからだろう。

身体を起こすなり、アスナの耳元に顔を寄せ、

「続きはさ、帰ってからしようなっ！」

そう言って、アスナの顔をこれ以上ないくらいに真っ赤にさせるルークであった。

第11話 戦いの前に(後書き)

きつと次の更新は早い。

第12話 戦いの前に2

「続きは帰ってからしようぜ」

アスナにとって、ルークの言ったその言葉は、嬉しくもあり、恥ずかしくもあり。

はっきりと確かなのは、この激しい胸の高鳴りだけだろう。

そして……

もう、引き返せない。

引き返すつもりなんて、最初からないけれど。

それでも、もう引き返せないのだと、アスナは感じた。

感じた……そう、感じたのだ。

なのに何かが違うと、アラートが頭に響いてやまかましい。頭を軽く押さえたアスナの視線が、何故かルークではなく、子供教師であるネギにいった。

ギリ……

軋む。心が……？

……わからない。

でも、確かに私はレールから足を完全に踏み外してしまったのだ。

手を伸ばし、腕を絡める。

ルークの肩におでこを押し付けるようにして、すん、と鼻をすすった。

一筋の涙が頬を伝い、アスナは堪え切れずに、泣いた。

突如泣きだしたアスナに、ルークは嫌だったのかとショックに顔をしかめる。

違う。違うのルーク。

私は嬉しいの。

でも、悲しかった。

何かが、大切にしなきゃならなかったはずの何かを、私は落としてしまった。

だから、落としてしまった何かに、私は泣いたのだ。

アスナは涙を流す。

戻れない。

戻らない。

さようなら。

ばいばい。

ひとしきり泣いて……微笑んだ。
何もなかったように、何もなかったのだから。

「ルーク、あのね、優しく……してよ？」

神楽坂明日菜。

黄昏の姫巫女と呼ばれた少女。

彼女はこの日、元々薄くなっていた縁を完全に断ち切り、新たな可能性へと足を踏み出した。

戻れない。

戻らない。

さようなら。

ばいばい。

もう一度……

誰に向けた言葉か。

わからない。

そう思いながらも、アスナは再び視線をネギに送る。

困惑した様子で、アスナを見ていたネギを。

戻れない。

戻らない。

さようなら。

ばいばい。

交わらなかった2人を思い、涙し……
交わった2人を思い、頬を赤らめ幸福に微笑んだ。

「ルーク、大好きっ」

新しい明日。

ルークと愛し合う、あした。

告白すれば、今のアスナにとって、『あつたかもしれない物語のヒロイン』よりも、この胸をキュンとさせてくれるルークが大切。

私を犯しそうになった澱は消え去り、心は自由に羽ばたいた。

さあ、はじめましょうルーク。

私と、アナタで。

……しょうがないから、おまけでメイとのもどかも途中までは一緒に。今度こそ、ルーク自身が幸せになる。そんな物語を始めるのだ。

アスナにとって、大切なのはルークだけ。だって、いつだってアスナの心をトキメかせるのはルークだけなのだっ。

がふっ！？

大量の砂糖を吐き出し、同時に吐血した初恋を胸に宿す2人の少女は、ルークに甘えるアスナを羨ましく思いながら互いに慰め合った。

コホン。ルークは軽く咳をする。
このままじゃ話が進まない。

何より、これ以上バカップルの片割れと思われるのも嫌な話だ。

……かなり手遅れっぽくはあるけれど。

「ところで、お前らこんな場所で何やってんだ？」

今更ながら、今更である。

だけど、一番聞かなきゃならないことでもあった。

試験期間中で閉鎖されている筈の図書館島である。

他の誰かがいるわけないのだ。

しかも中学生以下は、地下3階までしか入ってはならない。

これでもルークは図書館島探検部の部員。

彼女達の規則破りを見逃す訳にはいかなかった。

「なあ夕映。どうしてこんな場所にお前らが居るんだ？」

決して誤魔化しはきかないと言わんばかりの口調。

例え一般生徒が知らないかもしれない規則でも、同じ図書館島探検部の部員である彼女が知らない筈はない。

「え、ええっと、そのですね……」

しどろもどろになる夕映。

自分がどれだけ不味いことをしてかしたのか良く分かっていた。

まずいです。

このままじゃ私達は……

先程までの、ルークとアスナのバカップルぶりに砂糖吐いて嘆いていた姿は完全に消え去っていた。

最悪の未来が脳裏をよぎり、すぐる様にルークを見る。

トラウマで自虐癖のあるルークだが、一方で他人には甘い。

だから何とかなるかも……？

そう思いたい夕映ではあった。

が、厳格な先輩、ルーク・フォン・ファブレがそこにいた。ルークとしても、見逃せるものなら見逃してあげたい。

しかし、ここで甘い顔をして見せれば、また来ようと思ってしまう。

それはまずい。

なんせここは危険な図書館島でも、特に危険な場所を潜り抜けねば来られぬ地底図書室。

気軽に来ようなんて思っていない場所ではないのだ。

夕映のすぎる視線を、厳しい眼光で跳ねのけるルーク。

人に優しく、何か理由があるのか自分にだけ厳しい。

それが夕映の知るルーク・フォン・ファブレという先輩。

それなのに、なぜですか……ッ！？

もしかして嫌われてしまったのでしょうか……

誰にも分からない程度ではあったけど、僅かに顔が蒼ざめる。

恋する乙女としては、例え好かれずとも嫌われるのだけはイヤだった。

言い訳を重ねようにも、嫌われたくないという恐怖に怖気づき。下唇を噛んで視線を落とした。

これで夕映は脱落。

いや、アスナをのぞいて、みんなバツが悪そうにしている。が、ひとりだけ顔を上げていている者がいた。

「ルークさんこそ、どうしてここにいます?」

むむむつ……と、軽く顎をしゃくらせ、抗議口調でそう言ってくるのは、ネギ・スプリングフィールドである。

慇懃無礼な態度ではあるが、生徒を守ろうとする姿勢には好感を感じた。

まあ、時によりけりだが。

ルークは少しだけ唇を吊り上げ、よほど付き合いが深い者でなければ分からない笑い方をし、

「俺か? 俺は、とある貴重本を借りに来たんだよ。なんでか、あ

るはずの場所にはなかったけどな。ああ、きちんと学園から許可はとってるぞ?」

そう言っつて更に視線を厳しくする。
声に冷たさが帯びてくる。

「授業はどうしたんだ? まさか無断欠席させたんじゃないよな?」

「あつあつあつあつ……」

顎をしゃくらせて敵意を向けて来たのが嘘みたいに、挙動不審に目をぐるぐるさせている。

先生といっても、しょせんネギは10才に満たない、ただの小利口なクソガキだ。

それでもかつての自分よりは、これまた万倍マシだろう。

むしろだ。

ネギはティアの望んだ『俺』かもしれない。

そうとさえ思えた。

容姿端麗にして愛らしく、才能に溢れ、礼儀正しく、正義を重んじる。

アスナの話を聞くだけだと、ただのエロガキにも思えるが、恐らく間違っつてはいない。

先の抗議も、ルークに夕映が非難されていると思っつての、正義感の

発露だろう。

多分に的外れであるとは思うが。

……いや、違うのかも知れない。

ネギがルークに批判的な感情を見せた途端、世界が変わった気がする。

ネギだけが正しく、それに反する全ては悪だと。

そして、耳に響く、怨嗟の声。

何度も聞いた。何度もうなされた。

あの、憎悪と怨嗟と嘲笑混じりの声……

お前が死ねば良かった　お前が死ねば皆が救われる　お前の存在が
間違っている

この世界に　オマエハイライナイ

グウ……ッ

苦しげに息を吐き出す。

こめかみを伝う冷たい汗を手でぬぐう。

そして、アスナの手を握った。

薄れた存在が、アスナの手を握ったことで、元に戻っていく。

ルークをルークとして見てくれた、大切な存在^{ヒト}。

アスナは、どうかしたの？　と言いたげだ。

でも、他の誰にも気づかれてはいないみたいだ。

事実、忍者っぽい少女がルークの様子に気づくことなく。

ネギを庇うように前に出た。

「ちょっと、待つでござるよ。ネギ坊主に罪はない。悪いのは、拙者らでござるゆえ……」

最初から、ネギが首謀者だとは思ってない。

ここは図書館島。

ここに赴任したばかりのネギが、ここに何かを求めるなんてありえない。

ルークはグルリと彼女達を見る。

先程から、顔を上げることがなくなった夕映。

目があった瞬間、ツイッと横にずらした木乃香。

俺をEDから救ってくれた少女は、あははと誤魔化す様に笑っているし。

アスナは最初から我知らず。

判決。

何をしに来たのかは、まだ分からない。

が、ここに何かをしに来たのは、ネギとアスナ以外。

そしてアスナは……仕事だな。

まあね。と、小さくルークの耳にだけ聞こえた囁く声。

アスナはネギの護衛をしてたということか？ それとも木乃香？

……まあ、いい。

それよりも、

「俺が聞いているのは、誰が悪いとか悪くないとかじゃない。ここに何しに来たんだって聞いてんだろ？」

はあ、と少しわざとらしいくらい、大げさに溜息を吐きだした。
ここにきて、何回こうして溜息したろうな……

このあまりにも不自然な状況……ルークがメルキセデクの書を借りに来て、その本がなく、何故か地底図書室に落ち、そこにネギー行がいる。

間違いない。この状況を作ったのは学園長だ。

……まったく食えない老人である。

ちよつとだけ遠い目をして、光源が不明な地底図書室の天井を眺め見た。

……本当、何だろう？

どうでもいいことに意識がいくのは、心が疲れた証拠だ。
何度も言っているが、色々あったせいかな、基本的に自分に厳しく他人に甘いルークである。

この場所自体に問題はあるが、そうじゃないなら不法侵入しようが、

学校さぼるうがかまわない。
キチンと自分の罪を自覚し、反省するならそれでいいとさえ思っているのだ。

かつて自分がアクセリユスを落とす際に責められたのも、罪を自覚せず、認めずに、言い訳ばかり言ったせい。

あとは、レプリカだったから………というのもつくだらうけど。

まあ、レプリカ云々はともかく、こいつらがこれじゃあ、俺が説教しなきゃならんのか、もしかして？

ガラじゃないし、何より普段が説教される立場だった俺がするってのはどうよ？

疲れたように天井を見始めたルークに、少女達は一息ついた。

ルークの無言のプレッシャーから解放されたのだ。

彼としては、特にそんなつもりはなかったのだが。

それでも本当の死闘を潜り抜けた剣士の眼光。

ハンパな威圧ではない。

研ぎ澄まされた、突き刺す視線。

圧倒的な重量を持った無言の威圧。

だが、ここで彼女達を襲っていた視線と空気は軽くなった。

威圧にさらされ、そして解放されたことで少し冷静に自分を省みれた。^{かえり}

冷静になってみたら、自分たちがしようとしていたことが、どれだけ不味い事なのか良く分かる。

寮の門限破り、学校の無断欠席（欠勤）、立ち入り禁止区域への不法侵入、そして、窃盗。

ネギと少女たちが犯してしまった罪だ。

特に、そう、窃盗っ！

ネギ達がしようとしていたのは、読めば頭が良くなるという噂のある【魔法の本】の奪取。

誰が聞いても明らかに窃盗であった。

なんであんなに気軽な気持ちで泥棒なんてしようと思ったんだろう

……

ちよっと借りようと思っただけです。なんて言い訳で納得してもらえるだろうか？

我関せずなアスナと、事の不味さを理解していないネギ以外、全員の顔が真っ青に。

このままじゃ、魔法の本を使っただけの成績アップどころか、よくて停学。悪けりゃ退学だってありうるかもしれない。

ああ、ほんと、どうしたら……

例えば、成績が悪いんで、ダメだとは分かっていますが、この図書館島でテスト前の最後の追い上げをしてたんです。

とか、どうだろうか？

これなら窃盗の方はなかったことに出来る。
それに目的の物は入手してなくて未遂だし……

門限破りに無断外泊、無断欠席、不法侵入。

これぐらいなら多少怒られはするだろうけど、ルークなら大事にはしないでくれる。

ルークは反省した態度を見せるだけで、結構簡単に許してくれる人でもあるのだし。

そう木乃香は思い、夕映も口には出来ないけれど、そう思ったかった。

木乃香はたった今思いついたばかりのナイスな言い訳を披露しようと口を開きかけた、その時。

重く暗くなった雰囲気になえられなかった子供がひとり。同じ髪の色
の年上の少年に、真実を告げてしまった。

曰く、

下から数えた方がはやい成績の順位を何とかするために、ここにあるメルキセデクの書を使って頭を良くしようした。

だけでも、トラップ(?)に引っ掛かってゴレムにここまで落とされました。

……正直な話、何が何だか良く分らん。

それがルークの感想である。

メルキセデクの書？ ゴーレム？

ネギとアスナ以外は一般人だろうに、なんで魔法関係の言葉が出るんだ？

どう考えても学園長の仕業だ。

しかし、なんだ。学園長、ついにボケたか？
それともオコジョにでもなりたかったとか？

まあ、どちらにせよ……

「んな本使ったからって、頭は良くなるじゃないか？」

「あの本が本物でしたら、少しぐらい頭を良くするなんて簡単なんじゃないでしょうか？」

「いや、むりだろ。ってか、頭が良くなるって具体的にどういってなんだ？」

「……テストの点数が上がるとか、かな？」

「いや、頭良くなっても勉強しねーとテストの成績は上がらんだろ」

「その勉強の労力が減るじゃないですか」

「ああ、なるほどなあ。ってことはだ、お前らズルして成績を上げようとしたって訳だな？」

最後に呆れた口調でそう言い捨てると、「このかつ！ ゆえっ！」
幼馴染と後輩の名を怒声で呼んだ。
ビクンッ！ と身体を強張らせる2人。ルークはそんな2人の傍へ
と行くと、ガツンと頭に拳骨を落とした。
余りの痛みに頭を押さえ、這い蹲る2人をそのままに、ルークは、

「帰るぞ、お前ら」

そう吐き捨てた。もう、この地にいる理由はない。

ルークもメルキセデクの書を既に必要とはしていないし、彼女達に
それを使わせるつもりは全くなかった。

だって、卑怯だろう？

今も真面目に勉強している者達に対して、申し訳ないとは思わない
のか？

なによりだ、んな訳の分からんもんにもんに頼るなら、普通に勉強した方
がいいに決まってる。

今回、メルキセデクの書はたまたま本物だったのだろうが、普通は
当たり前なんて引きはしない。

そう、この手の現実逃避的な行動は、十中八九無駄足になるだけな
のだ。

ルークは自分の荷物をさっさと纏め、拳骨の痛みで這い蹲ったまま
の木乃香と夕映以外の少女達に指示して、帰る準備を急がせた。

少女達もこれ以上ルークを怒らせたなら不味いと思ったのか、実にテキパキと行動する。夕映はもう、大泣きする寸前だったけど。

ルークは泣きそうな夕映にすぐさま気づくと、少しやりすぎだったかと反省する。

夕映はそんなルークにタンコブが出来始めてる場所を優しく撫でられた。

そのことが嬉しくて、切なくて、驚きと申し訳なさに大きく見開いた目から、たつぷりたまっていた涙がこぼれそう。

ルークはそれに気づかないフリをし、

「じゃ、こつから出るか。帰ったらお前ら勉強な？ あと、春休み没収クラスの罰則は覚悟しとけよ」

「くくくえ〜〜〜〜つ！！」「」「」

夕映とアスナをのぞいて一斉の抗議。しかしちよつと待ってくれ。

それを決めるのは俺じゃない。

そうなるんじゃないか？つて話だ。

まあ、間違いなくそうなるだろうがな。

「あ、あの、悪いのは僕も……」

どう見てもネギは巻き込まれた側だ。

教師としては明らかに失格だが、ここに来るように『学園長』に誘導された節もある。

それは夕映達もそうだろうけど、ネギが罪に問われることは恐ろくない。

……不公平だなあ、って感じはするが。

「まあ、反省はしとけよ？ あと、あんま鼻屑はすんな」

せめてそれ位は……とルークは思う。

というか、最低限の自覚はして欲しいものだ。

「へっ？ 僕、鼻屑なんて……」

「鼻屑なんだよ。その魔法の本、持っていない奴からしてみたらな」

「そう、ですね……」

ナギと違って、随分とまあ、素直なんだな。

ルークはそんなネギの素直さに、面白そうに笑った。

もしも彼女達の担任教師がネギでなくナギだったら……

ナギなら俺を倒してでも、面白がって魔法の本を使用すんな。

そんな光景が目には浮かび、くすくすと笑うルークであったが、袖を

クイツと引つ張られる。

なんだ？ そう思い視線をそちらにむける。

「ルーク先輩……ごめんなさいです……」

「別に俺に謝っても意味ねーよ。それに、ズルをする前だったし、反省もしたんだろ？」

「はいっ」

「なら、いいって」

「はいっ」

最後の返事に、心で言葉を付け加える。

そんな風に地味に優しいトコを見せてくれる先輩が、好きです。

この先、絶対に言わない言葉。言っては、いけない言葉。

アスナのジトツとした視線を殊更無視しながら、頬を赤く染めて、小さい幸せに浸る。

飲み込んだ言葉に、沢山の想いを込めて……

「……なんかさ、すっごく狂じらいんだけど？」

「ふむ、困ったのう」

フオフオフオと呑気に笑うゴーレムに、本当に困ってるのかよ！
とツッコみたいシンクだった。

閑話 シンクとアッシュ

あの日、確かに僕は死んだのだろう。

音素剥離に弱っていた体を、レプリカルークの死によって完治させ、更には劣化レプリカと蔑んでいた彼の音素をも取り込み、完全体のローレイの同位体として強大な存在となったアッシュ……真のルーク・フォン・ファブレの手で。

ヤツの通り過ぎた後には、点々と死体が転がっていた。全身を、その深紅の髪と同じ鮮血に染め上げて。ヤツの後ろには、ゼエゼエと息を切らし、何とかついて行くことだけしか出来ない、レプリカルークの仲間達。

この時、シンクはようやく理解した。

不可解だったヴァンの行動の一つ。

どうしてあれだけアッシュを自らの陣営に取り込もうとしていたのか。

コイツが居る。それだけ、僕たちは勝てない……そう、理解させられた。

ラルゴが死んだ……

アッシュの剣の一振りで、身体を両断させられて。

リグレットが死んだ……

アッシュの放った第2超振動を浴び、この世界から消滅させられて。

そして、僕は死んだ……

最期に見たのは、能面のような表情。感情を殺したアッシュ。

大爆発。きつと、あいつはレプリカルークを知ったのだ。

恨み、呪い、蔑んだ。アッシュにとって、この世で最も憎い存在の、
本当を。

ハッ！ 今更、僕達レプリカを知ったつもり？

そう蔑み返す間もなく、僕の存在はヤツの手で消されたのだろっ。

すまない

聞こえた声は、きつと気のせいだ。

僕は……僕達レプリカは、どこまでもいつても、彼ら被験者から見れば、ただの道具にしかすぎないのだから。

そして、光、光、光……

苦しさはなかった。

恐怖も、なかった。

あったのは、安堵。

世界全てを壊すまで膨れ上がった憎しみが、浄化されていく。

これが一度灰になり、再び燃え上がった『聖なる焔の光』

勝てるはずがない。

きつと、ヴァンも負ける。

ざまあみろ。

それでも浄化しきれなかった憎悪の全てを、最後の力を。

全て込めた嘲りを、世界とヴァンと被験者全てにぶつけ……僕は世界から消えた。

「……行くぞ」

しばし瞑目した赤毛の青年は、つまらない物でも見るような視線を、彼の後ろについて来るだけの者達にぶつけると、実は答えなどどうでもいいとばかりに足を先に進める。

「おいアッシュュ！」

「もう！ いい加減にしてよね！」

「チームワークってものを知らないのかしら？ いつか痛い目を見るわよ？」

「やれやれ、この年になるとキツイんですがね」

「ルー……アッシュュ、お待ちになって！」

ああ、気持ち悪い。

自分の物ではない記憶。

アイツの、この世全てから呪われた、この世界の生贄だった存在の記憶が。

彼を、無知で愚かだった自分を苛む。

クソッ！ チッ、と小さく舌打ちした。

そして空を見る。

音符帯、彼らが還って逝った場所。

すまない……

そう言いたくなる弱い自分から目を逸らし。

許してくれ……

そう言いたくなる情けない自分から目を逸らした。

後ろでごちゃごちゃ言ってる糞共は、しょせん、アイツを道具扱いしたヴァンと何も変わらず。

自らの罪を見ず、アイツの罪だけを嘲って。

そうして人形のように、道具として、使い、使い、使い……
命までも使い倒し、彼を殺した屑野郎。

なあナタリア。

どうしてお前は、あんなにも簡単にレプリカを見捨てれたんだ？

なあガイラルディア・ガラン・ガルディオス。

どうしてキサマはヴァンの共犯者だったクセして、レプリカばかり責めれるんだ？

なあアニス・タトリン。

どうしてキサマはレプリカイオンを殺しておいて、そんなにレプリカを責めることが出来たんだ？

なあジェイド・カーティス。

言っただけだったというキサマが言っておけば、アクゼリユスの悲劇はなかったのだと、どうして思えない？

なあティア・グランツ。

どうしてキサマは自分の兄の罪をレプリカに押し付ける？ キサマは知っていたのだろうか。ヴァンが何をしようとしていたのかを！

だけでも、そんな屑野郎を批判する資格などあるはずのない己。所詮は、同じ穴の貉なのだ、俺も、コイツらも。

劣化レプリカに全てを奪われた！

そう彼に憎しみをぶつけていた己こそが真に奪ったなんて、笑劇にもなりはしない。

だけど、せめてこの記憶だけでも、お前に返してやりたい。いいや、違う。救われたい。この凄惨で無慈悲な記憶から。

ヴァンを倒し、ローレライを解放すれば、それが叶うだろうか……？

アッシュはキャンキャン煩い連中を、意識的に無視しながら足を進める。

音素剥離は治ったはずなのに、どうしてこんなに足が重い。

そう思いながら、一步、また一步と。

ローレライの鍵を握りしめ。

「……来たか、アッシュ」

「ヴァン、テメーを……殺すッ！！」

その後、アッシュはヴァンを一蹴し、ローレイを解放することに成功した。

ローレイと共に、劣化レプリカの記憶も音符帯へと昇っていくのを感じたアッシュの胸に過ったのは、とてつもない解放感と、

「バチカルへ……キムラスカへ『行く』ぞ、ナタリア。」

「え……？ え、ええっ！」

嬉しそうにするナタリアへの不信。

これから行こうとする場所にいる者達……両親や、国王への不信。

そして……

アッシュは不意に足を止めた。

視線を遠く、ある方向へと向ける。

その視線の先には、塔があるはずだ。

彼の、半身ともいえた存在。

レプリカ……いや、もう一人の『ルーク・フォン・ファブレ』の墓標となった塔が。

全てが終わった今ならば言えるはず。

いや、言わなければ、もう、俺は……進めない。

「すまなかつた、『ルーク』……テメーに全ての罪を背をさせた、俺達を、許してくれ」

小さく、本当に小さく呟かれた言葉だった。でも、万遍の想いが込められた言葉だった。

ひゅうつ、と息を飲む音が聞こえる。

ルークの、元仲間達の出す音だった。

彼らは、一様に目を驚きに見開き。

アッシュは、そんな彼らを生ゴミでも見るような目で見ると、すぐに興味を失くしたように『先』へ進んだ。

鮮血のアッシュはこの日死に、アッシュ・フォン・ファブレがこの世に生誕した。

ファブレの第2子として、世界を救ったルーク・フォン・ファブレの弟として。

それは、きっとアッシュの贖罪の一步。

誰が認めずとも、俺は、お前を忘れない。

ルーク、おまえのことを、忘れはしない……

第13話 事故だっ!?

それは突然だった。

地底図書室から脱出するため、滝の裏側の非常口へと向かったルーク一行の頭上に、動く石像が降ってきたのだ。

ルークは慌てて隣にいた夕映達を安全圏へと突き飛ばすと、キッとゴーレムを睨む。

「フオフオフオ、ここから逃さんぞい。観念するのじゃ」

変声期みたいな物が使われているようだが、そのイントネーションは聞いたことがある。

悩むまでもない。学園長だろう。

ルークは不快感にヒクリと頬が引きつった。

周囲の喧騒　　ネギや夕映達の話の聞くに、どうやらここに落ちてくる切欠を作ったのは『アレ』らしい。

だとしたら、この事態。酷い目に会ってるのも、結局はメルキセデクの書が手に入らなかったのも。

(全部、学園長シジイが原因かよ……っ！)

ゴーレムの首元に、メルキセデクの書があるのを見て、間違いないと確信した。

あれが欲しかった。

あれを手に入れるために、期末テストを捨てた。

あれを手に入れるために、恥ずかしい思いまでした。

今はもういらなけれど。

でも、でも……

(ふざけんなッ！！)

沸々と湧き上がる怒り。

無言で道具袋から木刀を取り出し、学園長に鉄槌をつ！

……と思ったその時、ゾクツと背筋に悪寒が走った。

油断すれば死に繋がる感覚。

かつてのモノに比べると随分と生易しいが、常の者に出せる感覚ではない。

この感覚には心当たりがある。

何度も相対し、何度も殺し合った世界の敵、その配下の一人。

「シンク……」

なぜここにいるのかは分からない。が、それを言うなら自分も同じ。……同じだが、『オレがあの世界で死んだ時』にはヤツはまだ生きていた。

なら、あの世界のあの後がどうなったのか知っているんじゃない？ いや、それ以上に、どうしてこうしてこの世界に俺達が存在しているのか？

その理由を知っているかもしれない。

最初に遭遇……というか、一方的にちよっかいをかけられた時から考えてはいた。

だけでもEDの方に頭がいっぱいで、今の今まですっかりおざなりにしていたのは秘密だ。

この辺り、あの世界での終盤……自ら死を望むほど追い詰められていた頃と比べ、随分と余裕がある。

あの世界のその後よりも、どうしてこの世界にいるのかということよりも、EDの方が大問題だったのだ。

と言うか、思春期の男としては、アスナやのどか、メイといった恋人達とエッチしたいって思うのはむしろ健全である。

そう思えるようになってくれた恋人達に心からの感謝を捧げつつ、ルークはクスリと笑う。

……が、すぐに気を引き締めた。

相手がシンクなら、緩んだままの自分では勝てやしない。

なんせ、『あの頃』ヤツと戦ったのは、常に仲間と一緒に。

自分一人では、シンクどころか 六神将 (アッシュ除外) の誰一人として相対したことはない。

だから、このままじゃ勝てない。
もっと、もっと集中しなければ……

ルークは思考を暗い戦闘状態に切り替える。

あの世界で戦っていた頃と同じような、ドス黒い感覚。
無論、随分と鈍ってはいたが、それでもこの世界の人間の大部分には到達出来ない、恐ろしい闇の思考。
殺し合いの果てに辿り着いた、知らない方が人として健全な、そんな感覚。

いわば殺す覚悟、殺される覚悟。

言葉にすれば、これほど陳腐で遣いかつてのいい言葉はない。
ファンタジーな存在の、自分勝手な主人公がよく使う言葉。

でも実際にこんな言葉を使う者などキチガイとしかいえないだろう。
しかも、それを人に強要したり、そうしない人間を見下すなんてイカしてる。

簡単に人を殺すヤツなど、人格破綻者でしかないからだ。

だけど、ルークは……

状況に流されながら覚えた。
覚えなければ、見下され、役立たずだと嘲笑される。

殺さなければ、殺される。

そう言われ、だからこそ生来の優しさを覆い隠し、必死になって覚

悟を持った。

それはちっばけなプライドから来るものだったけども……
殺される覚悟はともかく、生きるために他者を殺す覚悟……傷つけ
る覚悟を持った。

持ってしまった……

そうして人
殺してきた。

レプリカも含め

たくさん、たくさん、

アクセリユスで街ごと滅ぼし、レムの塔では1万以上ものレプリカ
を道連れに盛大な自殺。

それ以外でも、直接剣で殺した神託の盾騎士団……他にも野盗まで
入れれば、何人殺したのかさえ分からず仕舞い。

血塗られた手、というならば、ルークを超える者など、この世界に
も、あの世界にもいやしない。

そう、はっきり言えた。

だって、今になって思うのだ。

本当に殺さなければ殺されたのだろうか？

他に道はなかったのだろうか？

(でも、俺は……)

ティアの見下す視線が悔しくて。

ジェイドの嘲笑に腹が立って。

ガイの呆れた口調が遣る瀬無くて。

(殺すことを選んじまった)

当時の自分には出来なかつたらう選択だが、逃げてしまっても良かったのだ。

他にも考えればいくらでも選択肢は増えただろうに。

鬱になりそうなことを思い出しながらも、この世界で教えて貰った大切なことは決して忘れない。

ルークの平和の証。

守らなければならぬ人。

彼女達が自分と同じように誰かを傷つけ、殺さねばならぬ立場にしたいはない。

そんな大切な人達の姿を見て、力に変えるために。

ルークは、前方に注意を払いつつも、チラッと首を斜め後ろに向ける。

……確かにソレはルークの力になったのだろうか……か？

まあ、下半身的な意味で『力』は出た。うん、間違いぬえ。

危機的状況にも関わらず、ぽか〜んと大口開けて、思わず魅入ってしまったルークの視線の先は……3人の少女のあられもない姿。

無論アスナは当然として、何がしかの武術をやっていたのだろう長瀬楓と古菲は無事だ。

が、ルークに直接突き飛ばされた夕映と、それに巻き込まれたまき絵と木乃香の3人は……

制服のブラウスやスカートをはしたなくも乱れさせ、地面に突っ伏して肌を露わにする文字通りの艶姿。

「あたたた……るう兄、酷いわ〜」

と痛そうに声で抗議する木乃香は、まぶしいまでに白く細い太ももを煽情的に曝け出し。

「ル、ルーク先輩……いつたいなにが……?」

制服の上着が肌蹴た夕映は、可愛らしいおへそをチラ見させ。そんな夕映のスカートの中で苦悶するまき絵は……

「ふえ〜ん、こ〜どこ〜!?!」

うつ伏せにお尻を高く上げ、まるで交尾する前の獣の格好。
しかもスカートが完全にまくしあげられており、当然のように下半
身が丸出しである。

その上、彼女は……

そういや、水浴びしてたんだっけ。

どこか茫然とそう思ったルーク。

なんせまき絵はパンツを履いていない。

四つん這いで、尻を突き出す形のまき絵は、尻の蕾どころか、股間
の中心部、生え始めの薄い恥毛に割れ目の盛り上がりまでくつきり
だ。

幸い、ルークと相對してるゴーレム……学園長と、その奥にいるだ
ろう『彼』には、そのルークが壁となつて3人の艶めいた姿は見え
ないだろう。

だが、どうなっているのかは分かる。特に、学園長は、

「フオフオフオ、若いのう」

そう言つて、下半身を押さえるルークを笑つた。

「つるせえーっ！」

「ただ、ルークにだって言い分はある。」

「ED 治ったばかりのルークは、現在アソコが絶好調！である。」

「今まで大人しくしていた期間が長かった分、ちよつとした刺激で元気になるってしまう。」

「しかも、今ルークの目の前の光景は、ちよつとした……なんて言うて良いレベルじゃなかった。」

「ちよつ！？ まき絵さん！ そんなところで喋ら……ひあんっ！？」

「そ、そんなこと言っただつて……っ！」

夕映の股間に顔を押し付けてるまき絵は、モゴモゴしながら必死で喘ぎ悶えていた。

「まるでまき絵が夕映をナニしてるみたいな……そう！ 百合んなレスビアンショーである！」

「思春期真っ只中のルークにとって……いいや、男なら股間を熱くして当たり前。」

「むしろしない男はEDだろう。」

「などとツイさつきまでEDだった男は、心の底からそう思った。」

「思いはしたが、このままにしておく訳にもいくまい。」

「ルークはゴーレムと、その奥にいるだろうシンクに目で、ちよつと待ってる！ そう告げると、夕映と、夕映のスカートの中で悶えるまき絵の傍へと歩み寄る。」

まずは無言で下半身露出状態のまき絵のスカートを直してやり、続いてそのまき絵を助けるために夕映のスカートをめくってあげた。そうして苦しそうにもがくまき絵を抱え上げようと、まき絵の腋に手を差し込む。

……この結果どうなるか、ルークはやる前に気づかなければならなかった。

だがルークは気づかなかった。
腋に差し込まれた手の先は、柔らかい脂肪の塊……女性のシンボル、胸。

やべっ！？ そう思った時に遅かった……いや、これこそ男の本能か？

思わず胸を、ギュツ、と鷲掴む。

中心部は僅かに芯が残っているものの、十分以上に柔らかく心地好い。

定期的に揉んであげれば、すぐにこの芯もなくなり、素晴らしい揉み心地になるに違いない。

そんなおっぱいである。

「ひゃうっ！」

突然の痺れるような刺激に声を荒げるまき絵。

脳髓に直接響くような可愛い嬌声。

そして、膨れ上がる『アスナ』の殺気。

死死死死死死死死死死死死死死死死

股間が熱くなるよりも先に、このままじゃあアスナに殺される……！
どうすればいい？ どうすれば死なないですむ？
恐ろしいまでに柔らかく心地好いまき絵の胸の感触を無意識に堪能
しつつ、ルークは灰色がかった脳細胞で必死に生に足掻く。

もうあれだ。俺はおっぱいなんか掴んじゃいねえ。

あくまで佐々木さんを助けただけで、たまたまおっぱいを掴んでし
まっただけなのだ。

しかも俺は当然気づいてやしないんだから、悪い所なんざ一切ねえ
はず！

ルークはアスナの殺気に怯えつつも、必死に表情に出さないよう気
を引き締めて。

何事もなかったのだと。俺はただ彼女を助けただけなのだ。
そう自分に言い聞かせながら、まき絵を持ち上げた。

ふにゅん

おっぱいを鷲掴んだまま持ち上げるのだ。

当然、まき絵のおっぱいはルークの手の平で押し潰されて。
しかもアスナの殺気に怯えているせいだろう。

恐怖で微妙に振動するルークの手の平は、まるでバイブでもあてたかのようにまき絵の乳房を震わせる。

彼女も『誰に』胸を揉まれているのか気づいてた。

胸の先端が硬く屹立したのはその証だろう。

ほのかに想い始めたばかりの男に揉まれてるんだから、それも仕方ない。

結果、

「ファ……レせん、ぱ……いつ、だ、だめ……ああんっ!？」

嬌声を上げながら助け起こされたまき絵は、身をよじり、頬を真っ赤に染め、潤んだ瞳でルークを見上げる。

どうしてファブレ先輩が、私のおっぱい揉んでるんだろう？
恥ずかしい……ちっちゃいって思われないかな？

羞恥でまき絵の体温が上がった。

いや、本当に羞恥だけだろうか？

まき絵は……

「ふ……っ、んあ……い、よお……」

気持ちいい……

男の人に触ってもらうのって、気持ちいいんだ。
それとも、わたし……先輩のこと、もしかして……？

ルークの顔に、まき絵のとても熱い吐息がかかる。

まき絵の、切ない、切ない、想いのこもった吐息が、ルークの心にかけられた。

……この状況良く似た状況を、ルークはよく知っていた。

アスナやメイ、それにのどかとキスする直前の状況だ。

まるでルークを誘うように火照る肢体。

……期待に薄く開く唇。

「あ……っ」

茫然と、だが待ち焦がれるように零れた吐息混じりのまき絵の声は、恐らくは了承の証。

まき絵の身体が、初めて『男』を感じた相手への期待に、ふるふる震えだす。

そしてゆっくりと焦らすように目蓋が閉じられ、顎を、ツンと上へ向けた。

後ろから抱きしめるような体勢で、更に胸まで揉んでるルークは、この状況に戸惑いを隠せない。

今日知り合っただけの少女と、どうしてこんな状況になったのか

がさっぱりだ。

ただルークにとって、この佐々木まき絵という少女は凄まじく恩人である。

なんせ、彼女の言葉でルークのEDが治ったのだ。

どれだけ感謝してもしたりない。

だけでも、佐々木まき絵にとってのルークはどうだろうか？
なにか好かれるようなことをしただろうか？

そう思いながら、助けを求めるようにグルッと視線を回す。

……アスナの咎める視線が痛い。

そして、夕映の切なそうな視線が痛い。

楽しそうに見てる木乃香は……あとでウメボシの刑だ。

ただこの中で、どうしても気になることがあった。

アスナが怖いのは当然として、夕映だ。

切ない視線で自分を見ているは、気にはなるけどまあ良しとする。

でもなんで……？

どうしてお前は……

「パンモロなんだよっ!？」

ビシッ! とツッコミ。

あまりにも流麗な利き手によるツッコミ。

ハラハラドキドキしながら見ていた木乃香は、

「さすがるう兄、素晴らしいツッコミや」

感心したように何度もうんうん頷く。

トンカチツッコミ3段の木乃香にこう言わしめるなど、たぶん名譽なんだろう。

……まあ、木乃香はいい。

それよりも夕映だ。

なんでパンモロ……いや、よくよく思い出してみると、彼女をその状態にしたのは俺かもしれないねえ。

そう、ルークは先程まき絵を助ける際に、夕映のスカートを確かにめくった。

めくりはしたが、どうして!？ どうしてお前はめくられたままなんだよっ!

綾瀬夕映の身体は、年齢以上の幼さがある。

身長138cm。3サイズは上から、66、49、66、とまあ、恐ろしいまでの幼児体型。

だが……だがっ！

そんな幼児体型にもかかわらず、彼女の履いてるパンツは大人のおパンティー。

明らかに隠す部分が少ない黒い紐パンとか、いまどきの中学生どんだけだっ！？

その上、その黒紐パンの中心部分……女の形に盛り上がっているそこが、妙に黒さを増している。

あれっっていんも……違う！もしかしなくても濡れているのか？

さっきまき絵が顔を突っ込んでいた場所でもあるし、恐らくはそのまき絵の唾液だろうが……もしかしたら、あい……

ルークはブンと勢いよく首を振り、不埒な妄想を脳裏から振り払う。とにかく、夕映にはアスナやメイ、のどかにはない、夕映なりのコケティッシュな魅力が確かにあった。

いいや、むしろ……ゾクツとする。

手が届かないと諦め、でも強く焦がれ求める。

そんな、綾瀬夕映という名の少女の、切なく愁いをこめた視線に射竦められて。

夕映はルークが好きだ。
だからこそ不満だった。

ルークは親友であるのどかの恋人である。
同時に、親友ののどかはルークの恋人の一人であった。

……そう、ひとり。

クラスメイトの神楽坂明日菜。下級生の佐倉愛衣。そして親友の宮崎のどか。

一度に3人の少女と付き合う不貞の男。

それが夕映が恋するルーク・フォン・ファブレだ。

でも、夕映は知っている。

彼の事が本当に好きだから、分かっている。

ルークが、本当に3人のことを大切に想ってるって、知っている。

……真剣なんだって、分かってる。

だから自分もそこに加えて欲しいなんて思わない。

……いや、加えて貰えるなら加えて欲しいけど、加えて貰えるなんて思わない。

(だから不満なんです)

目の前で繰り広げられる行為に、夕映は心から思った。
まき絵の胸を揉んでるルークに、そう思ったのだ。

(まき絵さんでもいいなら、私もいいのでは?)

そう思ってしまう不埒な自分に、そう思うのだ。

夕映の視線は益々愁いが膨れ上がり、しっとりとした色香まで感じられる。

ルークは、夕映の潤んだ瞳に、飲み込まれる。

気のせいか、吐き出す吐息まで強く感じる。

胸を上下させる鼓動まで聞こえてくる気がする。

……黒の紐パンのシミが大きく広がってる気さえしてきた。

(いや、広がってる？ 俺を求めて、広がってるのか?)

もうルークの意識の中に、学園長扮するゴーレムやシンクどころか、殺気走るアスナさえなかった。

手に感じる暖かく柔らかい胸の感触と、視界の隅にいつまでもあるまき絵の唇。

そして視線を外せなくなってしまった夕映の瞳と色気むんむんに少し透け始めてる紐パンだけだ。

ルークは、下半身に熱がもったことを自覚する。

まあ健康的な男の子としては仕方ない。

だけでも、れっきとした彼女持ちの男としては確実に失格であった。
だから、罰が下った。

「いい加減に……しなさあ　いつ!！」

アスナの無慈悲な一撃が、ルークの顎を捉えた。

「ぐぼあっ!?!」

目が眩むような痛みと同時に、ルークは空中に舞う。
茫然と宙に舞うルークを見るまき絵と夕映の姿が、どこかしら可笑しく思え、

「流石はアスナ殿でござるな」

「腰の入った素晴らしい一撃だったアルよ」

完全に傍観者だった長瀬楓と古菲のどこかズレタ会話がやたらと耳に響き。

オロオロするネギと、けらけら笑う木乃香にイラツとした。

むろん、そんな資格ルークにはない。

ドゴスッ！ と轟音を立てながら頭から地面に落ちたルークは、

「俺が愛してるのはお前らだけだっ！」

あまりの衝撃に、一瞬気が遠くなりながらも、必死にアスナにむけた言葉。

でも、タダの浮気者の言い訳にしか聞こえなかったと、この場にいる全ての人達が後にそう証言した。

「……ねえ？ 帰っていい？」

「ダメじゃ」

第13話 事故だっ!?(後書き)

シンク、オチ係w

ここにきて、サブヒロインのプロットを変更しました。

3人設定されてるサブヒロイン。

本来ならば、佐々木まき絵、雪広あやか、そして、ずっと後の方で出てくる予定でしたアンナ・ユーリエウナ・ココロウアでした。

が、アーニヤの出番が異常に遠いことと、なんか夕映が可愛くなってきたんで、彼女と交代ですw

これも、投下間隔が長くなった弊害でしょうww

第14話 烈風

「アソコが出口だ。後はお前らだけで行けっ！」

指を滝のある方へと向け、厳しい口調で言い放つルーク。もつとも、どこかしらシラ〜とした空気が流れはしたが。しかしルークは気にしないフリしてやや大振りに木刀を構える。そして、シッシッ、と手振りでさっさと行けと促した。

10年前は自分よりも強かった六神将の一人が相手だ。邪魔くさい学園長……もといゴーレムは速攻で倒さねーと後が面倒。つてーか、これ以上、変なツツコミが入ったら体がもたん。だからさっさと行けっつーの。

そんなルークの内心を見透かしているアスナは、フンッ！と不満そうに鼻息を荒くするも、結局素直に従った。

アスナも、気づいていた。ついでに長瀬楓と古菲も。バカやりながらも、決してルークが緊張を解かない理由を。

こめかみに汗が流れる。

濃密な殺気に、足が震えた。

実力の程度では伍して戦えるかもしれない。

でも、ムリだ……！ そう思ってしまった。

明らかに世界が違っていると、心が負けてしまった。

屈辱は感じる。

でも、どうにもならない敗北感。

例えどんなに身体や技を鍛えても、経験だけはどうにもならない。

直接的な殺意に平然としていられるには、よほど鈍いかそれなりの修羅場を乗り越えなければ無理なのだ。

これには学園長も計算をミスったと、自分の考えの甘さに反省する。まさか、あの堅物なガンドルフィーニの息子が、こんなにも『あちら側』に属する人間だとは思わなかった。

いや、もちろん学園長には分かっている。この『殺気』が、本気ではないことに。

だけでも、これは本当の『殺意』を知る……幾人もの人を殺し、世界を憎まねば到達出来ない領域の鬼気。

いわば、殺人者にしか出せない本物の狂気だ。

そう言えば、シンク・ガンドルフィーニとイオン・D・ガンドルフイーニの双子の兄弟は、紛争地帯で拾われたと聞いていた。

(ふむ、そう考えるなら尋常でない殺気も不思議ではないのか?)

だけでもルーク・フォン・ファブレは、そんな殺気を当たり前のように受け止めている。

これもまた、本物の戦場……いいや、本当の殺し合いを潜り抜けた者にしか出来やしない。

そのことに老人は悲しく思った。

前途ある少年達が殺し合いの世界にいたのだと思うと、立派な魔法使いの元締めみたいな立ち場である老人としては遣る瀬無い気持ちで一杯。

と、学園長が慙愧に駆られていると、リン……と空気が鳴った。

いや、魔力が、精霊が、音素が……詠いだす。

学園長はゴーレム越しに視る光景に、フォツと片眉を上げた。

これが世にも珍しい、旋律する魔力の波動かと。

そして淡く灯る。魔力を通された木刀が薄く光り出したのだ。

(……始まったの)

興味深かげに目を細める学園長以外に、一体どれだけの人がこの異常に気づいたろうか?

全てを知っているアスナは無論、忍者である長瀬楓は気づいた。

この、異質な状況に。

他に、ルークに好意を持つ綾瀬夕映も、また気づく。

いいや、美しい光景に見惚れていた。

そしてもう一人……10歳に満たない、英雄の資質を持つ少年も。

潔癖症な観のあるネギである。

ルークさんだけに任せる訳には……そう思っていたのも当然だろう。なにより自分は魔法使いで、戦う力なら『一般人』には負けやしないという自負もある。

だけでも、光る木刀を雄々しく構えるルークに、ネギは先の考えを捨てた。

292

……いいや、ルークの背中に魅入られたのかもしれない。

だって、その背中は父さんに似ている気がしてならなかったから。

でも、どうして？

そう言えばルークは赤毛だ。

(だからなの?)

とネギは思うが、同時に、さっき正面で話した時には、そんな風には感じなかったのにも思う。

だが、すぐに分かった。

ルークの美しいまでの貴色。翡翠の、瞳。力強く、生命力と自我に溢れた眼光は、ルークの個としての印象を強く魅せる。

だがその背中。背中は朝焼け色の髪もあつてか、あの目見た父の姿を思わせてしまうのだ。

思わず呆けたようにルークの背中を見続けるネギだったが、「邪魔だッ！」ルークの怒声に身が怯んだ。

そして、そんなネギに苛立ち、

「さっさと行けッ！」

厳しい口調で言い放ち、ルークは木刀を振り下ろす。

続いて「砕けるッ！」気合と同時に流麗な剣捌きで斬り上げた。

上下から攻める高速の2連撃は、まるで獣の牙顎が閉じられる様に似ている。

この技、その名も相応しく双牙斬という。

ルークがオーロドラントの8年という短い生の中、師であり敵でもあったヴァン・グランツから学んだ、アルバート流と呼ばれる剣術の技である。

基本に近い技ながら、その使い勝手の良さからルークが好んで使う技の一つなのだが、早々人目につけさせることが出来る技でもなかった。

ルークが双牙斬を放った瞬間、魔力に光る刀身が、更に激しく紺碧色に淡く輝いた。

あの世界の技は、総じて魔力
あの世界でいう音素
を用いられる。

そして、この世界で使ったのならば、技の威力に応じて光り輝き、ルークの2つ名に相応しく『詠う』のだ。

ネギはルークの怒声に怯みながらも、ルークの剣の輝きに魅せられた。

魔力には、こんな使い方もあったんだ。
でも普通の魔力の使い方……じゃないよね？

ピリピリ肌で感じる波動。
慣れしたんだ魔力と微妙に違い、何か、音が聞こえる。

(どこか、こつ……懐かしい音……)

「ネギっ！ さっさと行くわよ！ ルークの邪魔になっちゃっつ！

」！

「は、はいっ！」

知っている気がした。

もう少しで何かを思い出せそうな気がした。

でもアスナの切羽詰まった声に、ネギは深い思考の渦から現実に戻されてしまう。
アスナにせつつかれるようにして出口に向かったネギには、もう何が懐かしかったのか、思い出せはしなかった。

アスナに引き摺られるようにしてネギ達一行が視界から消えると、場が急速に静まり返った。

シン……としたその空気の中、上半身を半ば碎けさせた石像の後ろから現れた仮面の少年の醸し出す雰囲気、静まり返ったのだ。

年の頃は12〜13才。

ルークの知るかつての姿よりも、一回りか二回りは小さい子供の姿。

「ふうん……あれが英雄の息子？ ま、僕には関係ないね。例えばレがこの世界のキーだとしても、僕と、僕の大切な人達が無事ならどうでもいい。アンタもそう思うだろう？ レプリカ……ルークッ！」

仮面の少年の魔力が爆発する。

ルークの持つ木刀と同じように、彼の腕に装備された手甲が碧く輝いた。

破損したゴーレムを通じて視ていた学園長は、ふおっ！？ と目を見開く。

何がしかの魔力を用いた格闘術を修めているとは聞いてたが、まさか……と驚愕した。

違うはずなのに、酷似している。ルークの剣と、似ている……

(ルーツは同じかの?)

ルークとシンクの魔法技術を考察している学園長をよそに、静まり返った場の空気が、シンクの魔力開放と同時に狂気混じりの殺気に変異する。

この場におらず、ゴーレムを通して見ているだけのはずの学園長すら息苦しくなるほどの殺気に。

だがルークは……目をこすり、確かめるように何度も少年を見、何度もまばたきを繰り返す。

その姿はこの緊張した場にそぐわず、ある種の滑稽さがあった。

当然、突然そんな行動をし始めたルークを訝しむ学園長とシンクであったが、次の瞬間、ルークは、「ぶふおーっ!？」とふきだした。

「お、おまえ……なにちっちゃくなってんだよっ」

笑いの波動に声を震わせそう言ったルークに、少年は怒りを覚えた。

今この場において、その反応はないだろう。

10年。そう10年だ。

10年前に殺し合いまでした世界の敵との再会。

普通はもっと戦慄いたり驚愕したりとか色々あるはず。

なのに、コイツ……

「うるさい！ 空気読めよっ！！」

「や、やめろ……シンク。その背格好で凄まれても……ぶぶっ、怖くねえっ……て……っ、ぶはっ!?!」

「馬鹿じゃない!? 今そんな場面じゃないでしょ!?! 超振動だ
けじゃなくて脳みそまで劣化してんじゃないのっ!?!」

「いや、俺より身長が劣化したお前の方が問題だって! ってもう
……だめ……笑いこらえんの……げんか……」

はっ
あっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっ
はっ

堪え切れずに遂に大笑いし出したルークに、少年は怒りのアカシックトーメント。

「みぎやーっ!？」とルークの断末魔。

周囲は破壊の赤い炎に包まれ。

「実に楽しそうじゃの。けっこうけっこう……」

フオフオフオと、自分こそが一番楽しそうに笑う学園長。しかし、その笑いはすぐに治まり、悲しげに歪むことになる。

遊びの時間は終わり、かつて殺し合いをした者達による本気の闘気がぶつかり合った。

ルークは、薄く笑いながら木刀を放り投げる。

その事実には、仮面を外し素顔を晒したシンクは、不快そうにフンッと鼻息を荒くした。

「……バカにしてんの？」

「随分と鈍ったね、だったか？」

苛立つシンクに、自信有り気に以前言われた言葉で問い返す。

ああ、そうだ。そうだとも。

気持ちで言えば、俺は確かに鈍っただろう。

でもな、実力は鈍っちゃいないぜ？

だからよ、

「その言葉、そっくりそのまま返してやるぜッ！」

ルークは10年前……オールドドラントにいた頃よりも、確実に強くなっている自信がある。

殺す覚悟は確かに錆びついた。

殺される覚悟？ 冗談じゃぬえ！

今の俺は……生きる。大切な人と、生きるっ！

虚空瞬動

残滓すら残さず宙を疾走

シンクの頭上近くまで一気に駆け

崩襲脚

雷撃の如く凄まじい蹴り

シンクの頬を掠めるルークの超高速の一撃。

だが流石はシンク。

紙一重でなんとか攻撃をかわし、だが驚愕に目を見開く。

アッシュのような圧倒的な力は感じない。

でも努力の果てにある確かな技は、この世界にきてからの10年で、鈍りに鈍った自身の身体能力では対応できない。

……なんとも言うが10年。そう、10年だ！

シンクがアッシュに殺され、この世界に移動してから10年。

この世界で過ごした時間は、ほぼルークと同じだが、圧倒的に違う

物もある。

シンクがこの世界に来た時、彼の身体年齢は、おおよそ2〜3才だった。

……ぶつちやけ幼児である。

7〜8才程度の姿でこの世界に来たルークは、この10年、遊びもしたがしっかり修行もしている。

だがシンクは違った。

どこの世界の大人が、2〜3才の幼児に武術を仕込むだろうか？
シンクの養父となったガンドルフィーニは、自身の実娘に魔法を教えないなど、子供が過度の力を持つのに嫌忌する真つ当な父親である。

そんな彼の傍で健やかに育ったシンクだ。

再び武を身体に覚え込ませたのは、ここ2〜3年。それもガンドルフィーニの監修の下、決して無理のない修練だけ。

オールドラントに居た頃のような破滅的な修練は一切なく、しかも7年という時間はシンクの覚えた業を錆びつかせるには十分な時間だった。

でもルークに対して絶対の自信があった。だが、ここにきてその認識が覆された。

『今』のルークに、『今』のシンクは勝てない。

だけでも……

「10年……アンタがさつさと死に、ボクがアンタの被験者、アツシユに殺されてから過ぎ去った時間」

「……みんなは、勝ったんだよね？」

「知らないよ、そんなの。ボクも最後まで残れなかったからね。大体さ、あの世界じゃレプリカである僕たちなんてゴミ屑と一緒に。なのに、なんでアンタはあんな奴らを気にするんだっ！」

『自殺』したくせに。

レプリカだからと迫害され、全ての罪を理不尽にも背負わされ。それに耐えきれずに、死を望んだレプリカルークが！

ルークの応えが返る前に、シンクは闘気を高める。認められない。そんなアンタを認めるわけにはいかない。

自分から死んで逃げたヤツなんかを、認められようはずがない！
例えそれがそうすることしか出来ない状況に追い込まれていたのだとしても。

それでも納得は出来ない。

絶望したアンタの顔が。

もう、楽になりたいといわんばかりのアンタが……

そのアンタに、今のボクが負ける訳にはいかない。

守るべき者を見つけた、今のボクが……

だから、

「舐めるなアーツ!!」

闘気を爆発させる。

ルークの背筋がヒヤリと凍った。

(ははっ、そうだ、これだ。この、感じ、これがっ！)

怒りをみせたシンクにルークは表情を崩し……変じた。

本質は優しいルーク。

だが、彼は平和主義ではない。

むしろ喧嘩っばやい性格だ。

だからこそ、自分と正面切って戦える存在に、魂が震えた。

「さっさと死になよ、レプリカルークッ！」

「レプリカレプリカ煩せえっつーんだよ！ だいたいテメーだってレプリカイオンじゃねーかっ！」

闘気が殺気に、ルークの口元が凶悪に歪む。

あの世界では届かなかった高見に、自分は到達したのだという自負。それはルークに暗い喜びをもたらした。

詠う 詠う 詠う

目をカツと大きく見開き、脚に、膝に、腕に、肘に……身体に纏いしは魔力に似て非ず。

ルークと、シンク。

2人の同系統の力が、拳が、ぶつかり合う。

ギインツ！！ と空間が断絶する軋みと悲鳴に似た残響。

同時、ルークが一瞬顔を苦み走らせる。

10年近いアドバンテージがあろうとも、体術オンリーならばシンクにまだ分があるか。

だがそれだけ。

そう、それだけだ。

瞬時に放たれる蹴撃も、合わせることは出来ずとも、受け止め、返すことは容易いことだ。

この世界にはない魔法……譜術の詠唱。
そして、完成

「フリジットコフィン」

地底図書室が、オールドドラント由来の魔法が発する氷の霧に包まれる。

ゴーレムを通じ監視している学園長の『目』を排除。

ついでとばかりに、氷の結晶をルークにぶつけ 瞬動による

バックステップであっさりと避けられたが。

視線を、先程ルークが捨てた木刀へと向け、

「捨わないでいいの？ 本当に……死ぬことになるよ？」

静かに、静かに、静かに告げる。

背筋を走る悪寒は、死に怯えるルークの本能。

だけどルークは、首を横に振った。

ニヤリと口角を上げ……

「この世界……日本だとなっ！ 木刀で『小学生』殴ったら警察に

捕まるんだよッ！！」

シンクをへなへなと地面に手をついた。

いい加減にしてくれこのバカ。

「今更なに言ってるの！？ それ言っならボクに殴る蹴るする時点で捕まるってばっ！ ばっかじゃないのっ！！」

という至極最もなシンクの叫びは、むなしく地底図書室に響き渡ったという……

第14話 烈風（後書き）

シンク・イオンの原作での肉体年齢は15才。
製造されてからは2年です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1884n/>

ルークの新しい世界で

2011年10月12日15時52分発行